二つの世界と二色の未来

杉岡丘波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの世界と二色の未来

【Ｎコード】

Ｎ０７０４Ｈ

【作者名】

杉岡丘波

【あらすじ】

取り柄は家事の青年が異世界に行ってしまった！そこは剣と魔法のファンタジー！さてこの青年はどんな物語を創るのか！

第一章　『夢の始まり』　プロローグ

わたしはあなたに二個の箱を差し出しました。

赤い箱と青い箱。

あなたはどれを選ぶの？　どちらかを選んだらその選ばれなかったほうは消えちゃうから。

わたしはあなたにいじわるをしました。

それはあなたが好きだから。しかしあなたはどうなのだろう？

あなたはわたしを見ていますか？　わたしじゃなくちがうものをみてますよね

あなたは悩みました。こんなくだらない箱選びに。

あなたにとっての幸運はなんでしょう。それはあなた自身が決める事。

でもあなたは気づきません。箱を選ぶ事自体が愚かだと。

あなたはどの選択肢をするか？　箱の中身がわからないのに悩むあなた。

この箱の二つの中身はどっちも悪いものかもしれないのに。

あなたにもうひとついじわるをしました

あなたが選ばなかった箱の中身はあなた自身が壊してね？

そしてとまるあなた。

わたしをみないで箱とにらめっこをしています。

わたしはそれがいとおしくて、そしてさびしくて。

わたしはあなたを――――――

今の季節は生命の息吹を感じられる春。

季節の移り変わりはめまいがするほど早く、まるで昨日が冬のような感覚がする。

俺は墨田幸一（すみだこういち）。今年で高校２年生だ。もう高校生活に慣れてきた感じがしてくる。

俺は今私立南城高校に通っている。ルックスは中の上ぐらい。童顔とよく言われる。好きな事は家事。これは自慢だ。というかこれしか取り柄がないのだ。

勉強は中の中。運動は上の下。俺の点数を聞けば平均点がわかるともっぱらの評判である。これはあんまり良くないが……というか良くない。勉強してるのに。

友人は比較的いるほうかも？　いまいち分からないけど。今日はクラスメイトとの顔合わせである。色々ワクワクするものだ。

えっと俺は…２－Ｃで名簿番号は２９か……。他に友人がいればいいんだが……。ここの高校は掲示形式ではなく便箋形式であるため教室に行かないと友人がいるかは分からない。

教室はわりと静かだった。それはそうだろう。まだ時間は朝のＨＲまで４０分もある。というか自分でもこんな時間に来るなんてありえないと思っているものだ。とりあえず俺は２９の名簿番号がつ

けられている机を見つけて寝るのであった。

――――何分経っただろうか……気がつかない間に人が増えている。

「お！　こうちゃんお久ぁ！！」

まったくハイテンションだな……

「市、昨日会っただろ？　今眠いから機嫌悪い……」

「まったく幼馴染なのにつめたいねぇ！！」

こいつは市原愛子（いちはらあいこ）。俺の幼馴染だ。ちなみに家事はまったくできないので俺にやってもらっている。

「関係ないだろ関係ない。俺低血圧なんだよ……」

自分は低血圧なほうでは無いのだが市にノリを合わせるのがしんどい。まぁ今回はただ単に眠いからお引取りしていただきたいだけなんだが。

「えーこうちゃん休みの日は早朝に張り切ってジョギングしてるじゃん！　おじさんくさい趣味だぞー」

若い奴はあんまり朝ジョギングしないか。自分でもオヤジ臭いと思っているがな。

「文句言うな。唯一の趣味なんだから」

俺はあんまりゲームの類は好きではない。いや嫌いではないがなんか微妙。なんか大自然にこそ真の楽しさ無いがないかな？

「健康な趣味は結構だけどぉー、ゲームも楽しいよ？」

「それはお前の趣味だろ……俺は体動かすの好きなの！」

「はーそんなんだったらつまらない人になっちゃうよ」

そんなゲームやらなくても心豊かな人はたくさんいるだろう

「おーっす久しぶりー。ＡＨＡＨＡＨＡ！　墨田ーまた痴話喧嘩か？」

「お、久しぶり。ってか痴話喧嘩じゃないって杉並……」

こいつは杉並衛（すぎなみまもる）。俺とは一番仲のいい友達だ。いわゆる親友。何考えてるか分からないけど。

「ふーん、まぁいいけど今日カラオケ行かないか？　久しぶりに会

ったんだし」
「ああ、いいな」
「私も一緒でいいでしょ？」
「別にいいですよ。市原さん」
俺は反対したいんだが。こいつマイク持ったら離そうとしないから……
「それじゃ放課後な。墨田は一旦家に帰るか？　午前で終るし」
「いいや、家にだれもいないから普通に大丈夫だ。って知ってるだろ杉並は」
俺の両親は海外で働いている。家の家事をやらないと駄目だが、まぁ一日ぐらいいいだろう。
「あえて聞くのが……友達だろ？」
こんな感じでおかしい奴だ。
「みなさん！　始業式始まりますよー並んでくださーい」
もうそんな時間か……さて並ぶか。

「えーであるからして――――」
まったくこの理事話長いんだよな。時々授業に入ってしまう話の長さである。まったくこの拷問で何人の生徒が倒れた事か。そもそも教育者としてそれでいいのか？
それにしても。今日耳鳴りするな？　んーどうしてだろう？
「――――田、墨田」
うーん今日カラオケの帰りに耳鼻科にでも行こうかな？
「聞けっての！」
ガキッゴポッ――
ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！　腕の関節が外されてまたつけられた痛さが！！
「なんだよ！？　杉並！！」
「今日お前そわそわしてないか？」
「あー？　ああ、ちょっと耳鳴りがさっきからしてな」

「耳鳴り？　珍しいな。常に健康体であんまり病院には行かない人が耳鳴りなんかでそわそわするとは。ふむ、実はホモな男に弱みを握られ今日は掘られたの――」
「はい！　ダウトォォー！！」
まぁそうだな……自分は健康体だから病院にあんまり行かないから……でも……それとこれと違うくない？
「まぁ珍しく耳傷めたんだろう。まぁすぐになれるだろう」
「まぁそうか……」
なんか今日はあんまり茶化さないのか？
「さて、本題に入るぞ」
本題じゃ無かったのかよ。
「この拷問から逃げないか？」
「それはいえてるな。しかしどうやって？」
「簡単だ、ちょっと首を貸せ」
なんで首なのだろう。普通耳じゃないのかな。
「はい、どうするんだ？」
「こうするんだ。」
ガスッ
気持ちのいいような音がなり自分の意識が深淵に行った――――

ここどこだっけ？　保健室？　ああ、杉並に斜め４５。チョップ食らったんだ。
杉並め……謀りやがったな。
「大丈夫？　こうちゃん？」
近くに市がいた。
「杉並は？」
「先にカラオケ行ってるって」
「そうか、行くぞ」
「え？　もう？　もう少し休んだら？　貧血ってあんまりあんまり甘くないんだよ？」

「大丈夫だ。原因は杉並の斜め４５。チョップだ」
「そうなんだ。でも元気ならいいや」
さて急ぐか――――
「おい……杉並、なにてめぇ俺のこと生贄にしてんだぁ？」
「いいじゃないか、結局あの拷問から逃げれたんだし～」
まぁそのとおりだがちょっと納得がいかないものだ
「まぁでも、俺を身代わりにしたから、今度なんか奢れよ」
「あーはいはい、心が広い人でよかったですよ」

俺達はカラオケをおもっきり楽しんだ。しかし耳鼻科は7時までなので6時３０分には帰ることにした
「そんじゃ俺は帰るから、まぁ二人で楽しんでな」
「あいあーい」
「それとさすがに俺の幼馴染を襲うなよ？」
「俺は市原さんは好みじゃないから大丈夫だよ」
ちなみに杉並の好みは俺はしらない……まぁいいけど
「そんじゃ、行ってくるわ」
「んじゃーまた明日～」
「明日なー」
「ああ、明日な」
そういい俺はカラオケからでた――――
「異常ないですね、一応薬を出しておきましょう。」
そういわれ3日分の薬をもらった……
んーなんだろうな……
ポツンポツンポツンと小粒な雫が空から降ってくる。
「あ、雨だ……ってやばい！　傘持ってきてねぇ！！」
濡れるが風邪を引かないために急がないと。

やっぱり走るのは気持ちい――――じゃない！急がないと！
キィーン……
ぐ……やっぱり耳鳴り？いやこれは頭に直接響いてる……
急いで薬をのんだほうがいいかも・・・走っ――――て！？うわぉ
！！下に穴がぁぁあああぁぁあ

「うわわぁぁあああ！！っとっと！！」
もにゅもにゅ
「なんだったんだ？しかしなんか柔らか――――」
目の前には胸がありその胸の持ち主である女性は怒りのオーラを
出していた……
「えっと……ワザとじゃないんです……信じてください。ちょっと
！！や、やめぇ！ぎゃぁぁぁあああぁぁあ！！！」
そうして俺は二度目の深淵を見た……

第一章　『夢の始まり』　プロローグ（後書き）

はい杉岡です。急にファンタジーが書きたくなった。後悔はしてない。書きたくなったら次の話ＵＰする感じなので更新は遅いですがよろしくお願いします

第一章　第一話　『召喚？』

ここはリニティアスというこちらからみれば異世界。だけど向こうもこっちの世界を異世界というだろう。
ここには現在１２の国があり今この世界はミネス、アイシラ、リキュアの３国がほとんど領土を占めている。
ここ最近ではこの３国も協調路線にあり、友好的なムードがある。
ミネスは戦士、アイシラは魔法使い、リキュアは聖職者が多い傾向にあり、その各国では養成学園がある。そこでは優秀な人材を育成するために日々指導している。
今回の物語はこの三国のアイシラが中心になっておきた騒動である。

「次はあなたの番ですよ？クリス・アルマーニ？」
若い女性教官が生徒に指示をだす。今は実践召喚の授業。この授業では永遠の契約を結ぶための召喚だ。つまり、この召喚で自分のパートナーが決まるという事だ。
クリスと呼ばれた女性は前に出る。生徒の中ではよく噂になっている。彼女は平民の出身で貴族の人たちから良く扱われていない。
しかし魔法の才能はずば抜けて高く、将来は大魔術師候補に入るといわれている生徒だ。
けれども平民の生まれの故、悩みを打ち明けられる人は少ない。唯一いるのは二人の友人だけだ。
その二人の友人はシリエル・クリストファーとファニアス・Ｓ・クレージュ。
二人は貴族でありながら貴族を嫌う人たちで彼女達も友人はあまり多くない。しかし美人で有名な貴族なため男がよくよってくるのは日常茶飯事だ。
彼女ら曰く『最近の貴族はただ家の偉功だけ』らしい。まあ実績

はあんまり無いのだからそうなのだろう。
「はい！」
そう高らかに声をだす。この召喚で大物を出した人は常に大魔術師となっている。だからこの召喚はミスはできない。
しかしこの学園長は弱いモンスターを召喚したが、それでも努力で大魔術師クラスになれる。問題は力じゃない。
力の使い方と召喚したパートナーの絆なのだ。この召喚で召喚したものは一番術者に合うものなのだ。
必然的にパートナーとは相性がいいが自分のパートナーを殺してしまったりしてしまっているマスターもいる。
気持ちの持ちようでもある。自分が嫌いなら仕方ない。しかし術式の問題で、一回やったら１０年は新しく契約ができない。
自分の手でパートナーを殺すのはある意味、自分が魔術書を破り捨てるのとおなじだ。そんなことをするぐらいなら少しぐらい嫌でも殺さないものだ。
きっと飼っているうちにその弱点も克服できるかもしれないし。
「汝、私の前に現れ我と古の血の契約果さん。汝との契約は永久のものなり。私は汝に力を与え、汝は私を守りたまえ。」
詠唱が始まる。魔術師は己の血と召喚されたものの血で契約する。体の中に流れる絶対の証明。それが血だ。
遺伝子は嘘をつかない。それは古より伝わる真実。血印（けついん）。それが召喚されたものとの永久の契約の証。
術式が発動された。周りには魔方陣が描かれる。地響きが鳴る・・・まるで賛歌のような音色を出している。
「さぁ出でよ！！私の僕よ！！理を破り私の道を照らせ！！」
……全員が緊張の面持ちで見守る。こんな地響きが起こったのは初めてだから。
とてつもなく強力な奴が出るのだろうと思った。しかし――――
「出ませんね……」
教官が無慈悲に言う……

（まさか……私失敗したの？）
クリスは落胆した……みんな召喚できているのに自分は召喚できない……これからはさらに罵倒されたり暴力を振るわれるであろう。
周りの貴族は落胆した後全員笑っていた。そう、これからはアイツを落ちこぼれと呼ぼうと誰もが思ったはず。
「元気だしなって？　きっとあまりにも強力だから学園の設備が悪く出せなかったんだ」
そんなシリエルの声も聞けなかった……自分は召喚できないのがショックだった……
「元気だすのです！きっと大丈夫ですって！」
ファニアスも元気付けてくれるが今の私には焼け石に水と同じだろう……
そのとき……なにかが落ちてきた……人？
「———△#$&$#”」
何か喋っている……なんだろうこの少年……
「△◇#$&%#$#%”？”#”#%$#%%&#……」
……自分にちょっと違和感を感じた。胸をもまれていたのだ……
私は怒りを露にした……まだ誰にも触らせてないのに……いきなり空から降ってきたガキに触られて……
「……%$#$……&△$###$、#$！！　◇、◇☆！！　▽◇∵∵∵∵△△！！」
問答無用！！そう思い自分はそのスケベ野郎に思いっきりローリング・ソバットを食らわせてやった。
ガキは沈黙した……何だ？　コイツは……
「えっと……その子の腕についてる血印って……クリスと同じじゃない？」
血印は同じものは一個も無い……ということは？
「ならこの子がわ、私のパートナー？」
血印を見てみる。確かに同じ血印だ……しかし、納得がいかない……

なんでこんなガキが私のパートナー？私の夢が丸つぶれじゃないか……こんなガキじゃたかが知れてる。
能力も見たところなさそう。服は変わっているがただの少年にしか見えない。せめて最下級の精霊のほうがまだよかった……
「まぁでも一応保健室に運びましょう」

――――――

……ここはどこだろう？
見たことも無い白い空間……。自分が寝てるところの隣にはカーテンが閉まっている。
「◇△＃＄％＃＄＊？」
わ、わからない……なんだろう。なにいってるんだ？　隣に白いローブを着ていた女性がいた。
大人びている。例えて言うならエリートな女性？　凛々しいがどこか孤高なオーラが若干出ている。
「あの……？　ここは一体？　あなたはなんていってるんですか？」
まぁ女性の言葉も分からないのにこんなことといっても意味無いだろう
「あら？　あなたは異世界から来たのね？」
「え？　言葉分かるんですか？　ってなんで普通に喋れるのですか？」
驚きだった……ってか普通に喋れるんだったら最初の言葉はなんだろう？
「ええ、あなたは喋ってなかったからどの言葉で話せばわからなかったから最初はここの言葉で話したの」
なるほどそういうことだったのか。ん……でもここはどこだろう？
「ここはどこなんですか？異世界って言ってましたが……」
「ここはリニティアスという世界です。あなたはたぶん、地球というところの日本からきたのですね」

「は、はい。なぜ俺はこんなところに？」
そう何故だろう……覚えてるのは走ってるときに穴があってそこに落ちたのしか……
「あなたは私の生徒の召喚によってこの世界に来ました……すみません。一般人が来るとは思いませんでした。」
「えっと、という事は元の世界には戻れないんですか？」
「ええ、たぶん戻れると思いますが……このことは私が教官になって初めてなので分かりません。」
そうか……なら俺は自分の世界では行方不明になっていることだろうな。でもどうして自分が召喚されたんだろう……
「でもなんで俺の世界のことを？」
「文献がありその中で異世界のことについてふれられていたのがありました。それを読んで学びました」
「そんな文献あるんですね」
「ええ、昔こっちに来た人がいたそうで」
「その人は？」
「それがどうなったかはわかりません。どこかの村の医者としか」
医者？　なら医療関係の人が来ていたのか？
「ちょっと物を取ってきます」
「あ、はい分かりました」
そういうと白いローブを着た女性教官はでていった。

俺はどうなるのだろう。この世界で暮らすのかな？　でも杉並や市……他にも俺の友達はどうなるんだろう。
もし帰れたら海外に行っていたことにしよう。そうでもしないと駄目だと思う。
しかしこの世界は俺達の世界より空気が澄んでいる。もしかしたら俺はこっちの世界のほうが合ってるのかも知れない……いやいやいや友達とは会えるか分からないのがつらい……この世界には俺の仲間はいなさそうだし……

そのようなことを考えていると女性教官の人が戻ってきた。
「さて、この薬を飲んでください。」
なんか見た目が怪しいピンクっぽい……なんか怖いな。しかし覚悟を決めよう……
ゴクンッ！
……なんともおきないな？
「どう？」
「えっとなんとも有りませんよ……」
「いや、成功ですよ」
なぜだろう？どこか変わったかな？
「私は今あなたの国での言葉を喋っていませんからこの言葉が分かるのは成功ってことです。」
「そ、そうなんですか。ありがとう御座います……こんな俺のために……えっと？　ん？　名前はなんていうんですか？」
「あ、そうですね。私の名前はアスティラ・クラウド・リスミール。アスティラでいいわ。」
「ありがとうございます。アスティラさん」
俺は心のそこから感謝する。あれ？　でも呼び出したのはあっちだから別に自分感謝しなくていいのかな？
まぁいいや。うん。
「ところであなたの名前は？　私も名乗ったのですから、あなたも名乗ってください。」
そうだそうだ、向こうも俺の名前知らないんだ。
「俺は墨田幸一といいます。」
「コウイチ？　不思議な名前ですね。やっぱり日本という国は変わった名前が多いですね」
うん。外国とかから見ればこっちの名前は基本的に変わってるからな
「あら？　やっとおきたのね。このスケベ」
いきなりまったく知らない赤の他人からスケベって……俺なんか

したっけ？
たしか……落ちて、落下して受身取ったらその反動で胸を……
あーなるほどこいつの胸触ったのか……
「あなた？　何一人で納得しているの？　私に詫びぐらい入れなさい」
「すみません……あれはワザとじゃなかったんです……」
「ふん……どうだか！」
そういい敵意を剥き出しにしている……まぁ初対面から胸触ったもんな……仕方ない……
「まぁまぁ、クリスさん。あの上空から受身を取って胸だけですんだらいいほうじゃない？　普通なら死んでるわよ？」
「うぬ……」
いきなり黙った……自分そこまで高いところから落ちたっけ？
「ま、まあ私の僕になったんだからこき使うわ。覚悟しなさい？」
嫌だな……まぁ仕方ない……やるしかないな。
これからこのクリスって奴のところで暮らすのか……
ん？　良く考えたらこいつが俺を召喚したのか……
まったくこの野郎め……

―――――――

「ファニアスちゃんのー用語解説ー」
パチパチパチー
「はい！これから用語解説するファニスなのだー。みんな！この小説で意味がわからない用語ってあるよね！それにズバリ！解説するよぉー！」
ボードがありそこには字が書かれている
「今回はこれ！血印だよ！！これは魔術師は全員がもっている印だよ！これは魔術師全員形、色、場所が違うのだ！ちなみにクリスちゃんは右腕で色は赤！形はうーんなんといえばいいか分からないな

ー。私はへそにあって色は青！形は雪の結晶みたいなかたちだよ♪。ちなみにシリエルちゃんは胸の谷間で色は紫！形はシャンデリアみたいな形だよ！他の人たちは知らないなー。ついでに血印は魔術師の証で、人為的につけられたものと生まれつきの奴があって生まれつきのほうが魔法扱うのうまいのだー。私とシリエルちゃんとクリスちゃんは全員生まれつきだよ！まぁ用語解説はこれで！またねー！！」

第一章　第一話　『召喚？』（後書き）

はい、杉岡です！！書いてるときにゼロの〇い魔みたいになる恐れを感じてしまった・・・

第一章　第二話　『新たな生活』（前書き）

あらすじ
オタク共が喜びそうなおいしいことになってしまった幸一君。どうやら異世界で魔法使いの学園らしい。彼はどのように行動するのだろうか。

第一章　第二話　『新たな生活』

はぁ・・・なんで俺がこんな目に・・・」
広大な泉で洗濯板で服を洗う。魔法って意外に不便だよな・・・
ゴシゴシ・・・
拝啓、お母様、お父様。俺は今異世界でしもべをやっております。
いつか日本にもどれるように精進したいと思っています。
なのでお母様、お父様達は仕事に集中してください。
なんて、送れない手紙の内容でも考えながらゴシゴシ・・・
夜なので水が冷たいのにも関わらず汲んではゴシゴシ・・・
ってか・・・普通男に女性物の下着洗わせるか？
ああ、しもべだからいいのか・・・。
ついでにさっきは部屋の掃除をした。なんなんだアイツの部屋？
ほとんど足の踏み場も無かったし、服も畳んでないし、怪しげな道具は片付けられてないし・・・
部屋を片付けるのにかなり時間が掛った。たぶん5時間程度は片付けたんじゃないか？
それにしてもだいぶ暗い・・・多分もう夜中だろう。
ちなみに俺のご主人様は俺が掃除している間、遊びに行き、今はノンビリ寝ている・・・。
自分は家事が大の得意で好きだけどこれはイラツク・・・。
これで給料なしぃ？
「ワリにあわねぇぇぇぇぇ！！！！」
「キャァアアアア！！」
え？近くに誰かいるのか？声のしたほうに向かう。
そこには透き通る肌にハリのある太もも・・・そして・・・着崩れているローブ・・・男なら誰でも興奮しそうな感じだった・・・
「す、すいません。大声出すつもり無かったんです。大丈夫ですか？」

「え、ええ。こちらこそすみません。すこし水遊びしようとしたら声が聞こえたのでビックリしたのです。てっきり、寮を抜け出したからそれがばれたのかと・・・」
それって違う意味で危ないよね。
ちなみにここは寮から結構離れている泉で水はとても澄んでおり水遊びにも適している泉だ。
「えっと、ここ使うなら俺は寮の噴水使って服洗いますので・・・」
はっきりいってここにこれ以上いるともう押し倒しそうになる・・・
さすがにそれはやばい・・・
「ここで洗濯しても、いいです。私一人じゃちょっと怖いので・・・」
ちょっと震えていっている・・・あー理性壊れそう。でも・・・女一人って言うのは危ないかもな・・・
まぁ今日ぐらいは警護しよう。
「いいけど・・・もう少し離れますね。ここだと泉に洗濯物の汚れがバリバリ入ってしまうので。」
「細かいところまでありがとう御座います・・・」
そういわれ少し小走りで若干離れて洗濯を再開し始めた。
そういえば困った事が一つある・・・それは自分の服だ。自分の服はこれしかないから、どうするか。
あ、そうだローブでも借りよう。きっと教師に訳を話せば貸してくれるだろう。
「あの・・・クリスさんのしもべさん？」
「え、どうしたんです？」
髪が濡れてるが体は濡れてなく、ローブを着ている・・・どうやらもう水遊びを終ったらしい。
「あなたのお名前はなんと言うのですか？」
「えっと、幸一です。」
「コウイチ？変わった名前ですね。私はシュリスと申します。これからよろしくお願いしますね」

「え？あ、はい。よろしくお願いしますね。」
「えっと・・・コウイチさん？」
少しモジモジしながら俺の名前を呼ぶ。どうしたんだろう？
「私の部屋であなたの世界の話聞かせてくれませんか？」
「そのくらいお安い御用だよ」
そうしてシュリスさんと一緒に寮に行った。
かなりの美人だと思う・・・優しそうだし・・・あんな主人よりシュリスさんが主人だったら良かったのに。
ここの寮にはもず男性寮と女性寮が分かれている。そこからさらに二つに分かれているつもり寮は４つある。
女子の寮は西と東。男子は南と北。どうやらシュリスさんは自分の主人と同じ東の寮らしい。
さらにいうとこの学園の女性寮は各１０階まであったりする。まぁそれだけ人数多いのだろう。ちなみに男性寮は各７階で２５番まである。
主人は５階の２４番の部屋。ちなみに３０番まである。まぁ片方の寮だけで３００人。単純計算で女子だけで６００人もいることになる。男子も合わせれば９００人前後。
これだけの人間が魔法使いになり名を世に知らしめようとしている・・・。なんか砂漠の砂の中にある物を探す人の気持ちがわかるかもしれない。
教師達はそこからすばらしい素質を持つものを探してその才能をつぶさないようにする。なんか嫌だな。俺は・・・
そんなこと考えながらシュリスさんの後をついていく。いきなり止まった。着いたらしい。
「ここが私の部屋です。」
そういい扉を開ける。そこは白く、すばらしく心地のよい空間だった。
「きれいな部屋ですね・・・」
自分は素直にそう思った・・・自分の主人に爪の垢煎じて飲ませた

いぐらいだ。
「そうですか？よかったです。今スコーンと紅茶を用意しますね」
この世界にも紅茶は存在したんだなーと思った。まぁ異世界ってい
ってもそこまで桁違いに違うわけもないし当然か・・・。
「はい、どうぞ。」
そういいバケットの中に多めにはいったスコーンを持ってきた。
「紅茶は今蒸らしているので待ってくださいね。」
そういい、紅茶のほうに取り掛かりに行った。
それにしても不思議な物だ。同じく人間がいて、同じものがあって・
・・。異世界ってものを実感しないが、あっちの世界はここまで空
気は澄んでいなく、機械文明が発達している。
それだけがこの世界を否定する事のできるものだ。それ以外はほと
んど同じ。たぶん地形は違うだろうさすがにここまで大掛かりな学
園を作るとなると大陸部がもっと必要になってくる。
もう一つの否定材料が今できた。しかし、否定する理由なんてある
のだろうか・・・。たしかに元の世界に帰らないといけない。しか
しこの世界を否定したって何も変わらない・・・
それならこの世界に身をおくしかないと思う。なんて少しブルーな
ことを考えているとティーポットとティーカップをお盆で持ってき
たシュリスさんがやってきた。
「悩み事ですか？」
そういいお盆をテーブルの上におく。
「ええ、どうやったら自分の世界に戻れるかって事をね。」
すこし自傷気味に言う。こんなこと言っても無駄なのに・・・
紅茶のいい匂いが鼻にふれる。今頃になって自分は空腹な事を思い
出した。
「でも、悩んでも仕方ないので前向きに生きますよ。」
そういいスコーンをたべる。ん、ジャムすこし甘いな。
「そうですか。私は役に立たないかもしれないですが手伝いますよ。
」

シュリスさんは紅茶をティーカップに入れる。紅茶のよいにおいがする。
一口口に含む。少し苦いがこのスコーンとは合うな。なによりも作り手の愛情が感じられる。職人の作る奴もおいしいが。一定の動作になる。
しかし家庭的な味は味のバラつきがあるのが特徴だ。失敗が許されない料理人と趣味で作る人の差はここに出る。
そのバラつきが自分では作り手の愛情だとおもう。このバラつきが家庭料理の味の良さだね。
思った以上に手が進んでしまう。久しぶりだ。他の人の温かみがある物は・・・ここ最近は自分の作ったものしか食べなかったからな・・・
「ありがとうございます。あ、そうでしたね・・・俺の世界の話をしますよ。聞きたがっていたでしょ？」
そういうとシュリスさんはうなずいた。さて・・・どこから話そうかな――――

「そうなんですか。あなたの世界も大変なんですね。」
「ええ、そうなんですよ。機械も所詮人が作った物だから万能じゃないんです。」
俺はまず自然環境、世界情勢と話していき、最後に文明について話した。
「面白かったです。ありがとう御座いますね。いつかまた聞かせてくださいね。」
「いえいえ、こちらこそおいしいスコーンや紅茶などありがとう御座います」
お互いに礼を言い合う。とても充実した時間だと思う。この異世界にきてから初めて友達みたいにはなせたのが嬉しかった。
「では、そろそろ俺は帰りますね。もう夜もかなり経ったので明日がつらいですよ？」

そういい、俺は部屋から出ようとする。
「明日も、話聞かせてくれませんか？あの今日会ったあの泉で・・・」
「ええ、よろこんで」
バタン・・・
さて俺も寝るかーあれそういえば俺ってどこで寝ればいいんだろう・・・

「第二回！！ファニアスちゃんの用語解説ー！！」
パチパチパチー
「さぁ第二回目の用語解説なのだぁー！今回はこのリニティアスという世界における属性を紹介するよー！！このリニティアスは属性がバランスよく組み合わさってできているのだー基本的なものは火、水、土、風の四種類だよーそのほかに光、闇があるよ！！しかし生まれつき血印がある魔法使いの場合は属性が混じっているときがあるのだ！！私は水と光の複合で回復魔法と浄化魔法が得意だよー。シリエルちゃんは闇と風の複合なのだ。得意魔法は毒だっけ？クリスちゃんは火単体だった筈だよ？得意魔法は形状変化だったはずだよ！ついでにこれは時々血印の色にも関係あるよーでもきちんとしたのは入学時に調べれるよ！ちなみに複合の場合強い属性が色に出やすいのだ！私は二つ同じぐらいの量で混ざっているから若干にごっちゃになっている青。シリエルちゃんは闇のほうが強いから紫だよ。変わっているのはクリスちゃんー他の火属性の人たちより血のように赤く聖水のように澄み切っている透明感・・・それを見てるとなんか惹かれちゃうんだよねー。あ！あと属性関係無しにみんな魔法つかえるけど、属性あってるほうが威力高いよ！！ではー本日はここまでーまたよろしくねー」

第一章　第二話　『新たな生活』（後書き）

えっと投稿がかなり遅れてしまいました。まじすみません。

第一章　第三話　『朝の賛歌』

コケコッコー

結局……外で寝ました。一体何時ぐらいなんだろう？時計がないと不便だなー。さて主人の部屋の掃除するかー。

寮の中に入るがダレもいない……うーんまだ朝早いのかな？たしか5階だっけ？さてここだな……

ドアを開ける。そこには……昨日よりはマシだが散らかっている部屋があった。まだ寝ていやがる……というか寝にくくないか？こんなに汚いと寝るものも寝れないと思うが……

というか寝ているのがなんかイラツクな。さてこの粗大ゴミも一緒に掃除しちゃっていいかな？

3時間後

「ふーこんなものだろう」

明るい日差しが入っている。前に比べたら段違いに清々しい。床も喜んでいるように光っている。自分も清々しい。心のもやもが晴れる様だ。この主人が居なければな……

鐘の音が聞こえる。どうやら今が起床の時間らしい。周りの部屋や廊下が段々と騒がしくなる。しかし私の主人はおきません。声をかけてみる。それでも主人は起きません。ピチピチと頬を叩いてみた。スースーと寝息が聞こえる。

こちょこちょくすぐってみた。起きない……このクソ主人め……どうするか……とりあえず主人の頬をプニプニしてみる……だめだ起きない……どうしよう。

「あら？やっぱりクリス起きてな―――」

その時、扉が開いた。誰だ？

「あらぁ？男がいるなんてねぇ～まったくぅクリスも罪ねぇ。」

「いや！！別に付き合ってませんよ！！自分、この主人のしもべになった幸一というものです」

「あー空から落ちてクリスの胸を揉んだ子ね。」
クスクス笑いながらそう言った。嫌な覚えられ方だ。
「そうそう、クリスは起こさなくても大丈夫よ」
「え、なんでですか？」
「クリスは朝に弱いの。朝ごはんにはいつも遅く来るからね。私はクリスの代わりに席取り係りなんだけど。いつも朝に来てるからね。そして来たらあなたがいたと」
なるほど、でもここまで反応しないものなのかな？
「そして～私も今から食堂に行くのだけどついて来る？」
「え？ええ、行きます」
そうして食堂に向かった。

「す、すごい……俺の学校の学食とは桁が違う……」
食堂はどっかのパーティーのような豪華さがあった。今思ったんだけど……ローブって一人一人違うんだね。これじゃ借りれないな……。
「そうそう、奴隷階級とかはパン一個ぐらいらしいから。まぁでもおいしいパンだから期待してね。」
ガーンガーンガーン
パンって……朝食はバリバリライス派なのに！！
「少ないど我慢してね。」
そっとパンと皿を差し出してきた。しかたない腹が減ったら戦はできぬだな。でも昔の農民って食べるものが無いから国と戦ったはずだよな？　矛盾だな……
「お～！おーいシリエル～一緒に食べよー」
そういいながら小さい女の子がこっちに向かってきた。
「ファニアスーそんなに急ぐとこけ――――」
つるん、どてん、ぼふっ。
「「あ」」
もっていたパンを落としてしまったらしい。しかしスープとかも

ってなくてよかったな。
「うー、パンがぁー今日はパン楽しみしていたのにぃ……」
ん？今日の献立表を見てみる。献立はパンとクリームシチュー、サラダにデザートだ。うん、本当にパンが合いそうだ。仕方ない……。
自分はこのファニアスと呼ばれた子のパンを手に取った。
「どうしたの？　コウイチ君？」
シリエルが不思議そうに聞いてくる。しかしそれには答えないで自分はそのパンのゴミを軽く掃った。そしてそのパンを自分の皿に乗せ、落としてない俺のパンをファニアスに差し出した。
「ファニアスちゃんが落としたの俺が貰うよ。そのかわりに俺のパンをあげる。」
「あ、ありがとうですよー」
「ちょっと！コウイチ君！？　あなた落としたものを食べるの！？」
なるほど育ちが分かるな。
「気にしない気にしない～。俺はしもべだもんな。上の人に良いものを食べて――――」
「そういうことじゃなくて！！　落としたものなんかが食べれるの！？」
まったく……金持ちはこれだからな……
「俺はこのパンをくれたシリエルさんに感謝している。農家の人やパン屋の人にも感謝している。でも落としただけで食べないってこのパンに携わった人たちに悪いだろ？　だから俺はこのパンを食うよ。捨てるなら食べるほうが幸せだよ」
「ま、まぁそうだけど……」
「大丈夫！　大丈夫！　腹なんて壊さないさ。」
そういい一口食べた。
「お！　こりゃうまい！　あーこれシチューと一緒ならいくらでも食べれるだろうなー」
自分は笑顔で言う。これは本当においしい落としていても食いた

いパンだ。
（おい……あれがクリスが召喚した奴らしいぜ。）
（さすが庶民のしもべだ。マナーもなっていない）
（俺だったら殺すかもな。こんなやつよりだったら１０年ぐらい居ないほうがマシだ）
まったく……酷い言われようだな。俺。
「コウイチさん、おはよう御座います」
シュリスさんが俺のところにきた。声だけで癒されそうだ。でもなにか悪いことが起きそうな気がする。
「コウイチさん？　一緒に食べませんか？」
シュリスさんが……言った。これって死刑宣告と同等だと思う。
（なんだと！！　学園でも三本の指に入るほどの超絶美人がどうしてあんな奴に！！）
（まったくだ！！　あいつ殺したほうがいいんじゃないか？）
（そうだな、あいつを殺したほうがいい）
やっぱり死刑宣告だったか……
「いいですよ。シュリスさん。あなたのほうが誘ってくれるとは思いませんでした」
そういいシリエルさんは俺の隣をすすめる。ちょっと待って……それ死亡フラグ。
「そうですか？　ならここに座らせてもらいます。いいですよね？　コウイチさん？」
笑顔でこっちに言ってくる。近所のヤロウ共が座らせんじゃねぇよ。みたいな視線を送ってくる。どうするべきか……
「えっと、やっぱり女同士で隣のほうがいいんじゃないですか？俺なんかの隣に座ったら品が落ちてしまいますよ」
「いえ、そんなことはありませんよ。あなたはいい人ですから」
……もう無理だ。この運命を受け入れるかしかないのかな……。この死という運命を
「あれ？　シュリスさん？　いつのまにここにいたんですかぁ？」

いつの間にかパン以外を手に持っているファニアスが話しかけた。
「ついさっきですよ。ファニアスさん」
「そうなんですかー。なら一緒に食べようよー。人数の多いほうが楽しいよ！！」
明るいなぁ～ファニアスちゃん。でもそれ俺の命左右しているんだよね。
「ええ、多いほうが美味しいですし。一緒に食べましょう？」
さらにくるシリエルさんの発言……絶対こいつら俺を殺そうとしているよな。
「「「なら俺達も一緒に！！」」」
あ、さっきまで殺すしかないとかいった奴だ。
「あんたらは生理的に受け付けないから嫌だ」
シリエルさんの無情の一言……。ん？　なら俺は認められているのかな？
「コウイチと違っておまえらは優しくないよー！！　私がパン落とした時だって助けてくれなかったし……」
そういえば他人事みたいな目でみんな見てたな。
「あとあなたたち引くってこと知ってないじゃないですか。このプライドだけが高いクズたちが」
シュリスさんまで笑顔で毒舌はいてるよ……どんれだけこいつら嫌いなの？　あ、あいつら泣いてるよ？
「さて食べましょう」
シリエルさんが振る。まぁ区切りつけないとね。
「「「「いたたぎます」」」」
傍から見れば美男美女の食事風景だ。そこだけ異質な空間でしかもハーレム状態……男は全員嫉妬の視線を送っている。
「おまたせーファニアスとシリエル。あ、シュリスさんもおはようございます。」
……新たな爆弾がやってきた。俺には挨拶しないのか？　がんば

って部屋掃除してやったのに……
「あ、コウイチいたのね？　ごめん、見えなかった。まぁ掃除はありがとうね。」
　褒めるなんて……こんな奴だったっけ？
「今、失礼な事考えなかった？」
「いいえ？　滅相も御座いません」
「そう」
「コウイチさん？　そういえばあなたの世界の文明の話の続き聞かせてくれません？」
　そういえば泉で話すって行ったのだけど気になったのかな？
「ええ、いいですよ。なら俺の世界の乗り物のことでも話しますか」
「私も気になるから教えてーコウイチー」
「いいですよ。減るものじゃないですし」
「コウイチさん。あーん」
「あ、いただきます」
　ってこれって恋人とかやるやつじゃん！！　食べてから気がついたけど！！
『『『コロセェェエエエエエ！！！！！』』』
　あ……やっぱり……うん。これ死ぬな……
『もうがまんできねぇぇぇえええよ！！』
『ああ！　まったくだ！！　アイツの息の根止めてやる！！』
「みんな！　落ち着くんだ！！」
　そういい綺麗な顔立ちをした男が声を出していた。ありがたい……
「ちょっとクリスのしもべは今すぐステージの上に来てくれ」
　なんだろ？　うん行かないとな。ステージにあがる。
「君の名はなんだい？　しもべ君？」
「えっと墨田幸一といいます」
　目の前にいる男は自分に……
「私！！生徒会長！！シュベルト・G・クレリアスは、風紀を乱そうとするスミダコウイチに決闘を申し込む！！　お互いに全力を出

し合おうぞ！！」

死刑宣告の証の手袋を投げてきた。嫌だな……

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

「第三回！！ファニアスちゃんの用語解説コーナー！！」

パチパチパチー

「今回は魔法具の説明だよぉ！！この世界では魔法の触媒に魔宝珠と言うものを使うときがあるのだー。自分には力が余る強力な魔法や魔法の発動スピードを上げたりできるんだよー。ちなみに質がいいものほど強力な魔法の強い支えになるし詠唱スピード速くなるんだよ！！ついでに撃つ数も増えるよ！！杖には高純度の魔宝珠がついてるのが多いんだ！！次はローブの話だよー。コウイチは気がついたけど一人一人ローブが違うのだぁ！！それはローブは自分の能力の形状に合わせているのだー。自分の魔法力を放出すれば魔法や物理攻撃から身も守ることもできるんだよ。それを行いやすくするのもローブの役目なのだー。あと自分の潜在能力も引き出せるだからこの学園に居る生徒は常に防具は最強みたいなものなんだよー。それでも弱い奴は弱いだけなのだー。でもそういう奴もすばらしい潜在能力が眠っている場合もあるのだー。だからあきらめちゃ駄目だぞ？これにてお終いだよー。ではではーまた今度ー」

第一章　第三話　『朝の賛歌』（後書き）

辛口評価だれか書いてくれないかなぁ？

第一章　第四話　『決闘』

「何事ですか！？」
そういい大人たちがステージに駆けてくる。これはありがたい。
「私がスミダコウイチに決闘を申し込んだのです」
ははは、さすがに教師だ。安全第一だろう。そんなこと認める訳が――――
「いいですね。丁度一時限目は戦闘実習だったので。今回はその決闘を見て皆に学ばせますか」
あったね。きっぱり認めたね。俺の意思は無いのか？
「では、朝食が終ったら第一実習室に来てください」
もしかして俺って全体的に嫌われている？なんか悲しいな。先生たちは戻ってしまった。ここって本当に教育機関か不思議だ――――
「ええ、いいところに生徒会長が決闘を申し込みました。これで彼の戦闘能力を調べられますね」
「ああ、まったくだ。これはこの学園の創立以来の大事件だからな。サンプルはとっておかないとな」
「ちょっと、待ってください！！こんな非人道的なことが認められるんですか！？それだけのために戦わせるんですか！？もし死んでしまったらどうするんです！？」
「そんなことは気にしなくてよい。それともアスティラ先生？それともあなたは彼のことが分かるのですか？この先わが国の崩壊を招く可能性があるというのに」
「くっ……」
そう喋られては言い返せない。そう……一回も起きた事がないのだ……別の世界の人間が召喚でこっちの世界に来るなんて――――
俺は周りの視線から逃げるように席に戻る。

「えらいこっちゃ！えらいこっちゃ！」
いきなりファニアスが騒ぎ出す。どうしたのだろうか？
「あの人って生徒会長だよ！！」
「いや知っていますよ。生徒会長って宣言してたし」
「たしか超強いらしいんだよぉー！！　どうするの！！」
「っていわれても……戦うしかないでしょ？」
うん、ついでに言うと久しぶりに暴れたくなったし丁度いいね。
「でーもー！　でーもー！」
なぜか引き下がらない。なにかあるんだろうか？
「どうして戦わせたくないの？」
「だって！！　あの生徒会長はいたぶるのが好きって聞いたよ！！
　コウイチのケガしたところなんて見たくないし・・・」
それってただ単に性癖がおかしいだけじゃないかな？　会長の女にはMが多そうだナー
「それでも戦わせないと。俺は約束や誓いとかは破りたくないからな」
そういいパンを食べながら俺は第一実習室に向かおうとした。
「待って……」
シュリスさんが俺を呼び止める。どうしたんだろう……
「これ、お守りです。持っておいてくださいね」
「ありがとう。一日しか会ってないのにここまでしてくれて」
「いえ……なぜか前にも会った気がするのです」
「そうですか……じゃ向かいます。早く向かって体温めないとね」
お守りを持ち……俺は第一実習室に向かった。

「準備は万全なのか？」
向かいにはサーベルを持っている生徒会長が立っていた。
「ああ、もう体はあったまりましたよ。ついでに覚悟も決まりましたからね」
「そうか……それで貴様はそれで私に戦いを挑むのか？」

「ああ、そうだが不自然か？」
俺は私服で戦おうとした。うーん普通だと思うのだけどなー
「なぜ実戦で木刀を使うのだ？」
仕方ないじゃないか！！　これしかなかったんだから。周りは笑っている。しかし生徒会長は違った
「おい！　誰か！　コイツに剣を渡せ！！」
そういうと若干大柄な奴が来て一振りの剣を差し出した。俺はその剣をつかんだ。
俺は剣に使うのに慣れていない。この剣は自分に合わないらしい。手になじまない。しかし戦うしかない。
冷静になれ。そして戦え。逆は？戦うな……？そんなことはできない。俺は戦うと決めたんだ……口の中に苦味が感じる
周りの男どもは殺せと騒ぐ。俺は勝たないとならない。自分の主人の名誉にかけて。そしてシュリスのために。あれ？　あいつら私怨じゃないか？　気のせいだ気のせい。
剣を鞘から抜く。鋼が光にあたり。鈍く光る。まるで血を欲しているようだ。俺の居た世界の喧嘩とは違う命のやり取り。自分は覚悟を決め向かい合う
「さて！始めてください！！」
ギィン！！
お互いが攻撃して激しい音がなる。それが開始の合図だった。会長はいきなり牽制とは思えない思い一撃で踏み込んでくる！！　それを俺は剣で防ぐ。さすがにこれだけ重いと手が痺れる。
しかし！！　このぐらいじゃないと面白くないな！！
会長は強い……しかし、俺は無様に防戦に回らない！　お互いに剣戟をぶつけ合い、相手を力でねじ伏せようとするッ！！　激しく剣と剣とぶつかり合い火花が飛び散る。
「一つ質問していいか？」
「ああ、いいぞ」
そういいながらもお互いに剣戟をぶつけ合う。

「スミダ……お前はなんで戦うんだ？」
会長が剣が振り下ろされるよりも早く踏み込んで体をぶつけ、勢いが弱まったところに剣を叩き付ける。向こうも同じことを考えていたようで、体勢を崩されながらもこちらの攻撃に武器をぶつけてきた。
「俺は……自分優先で偉ぶって威張っている奴が嫌いなんだ。そいつらは個人の意思を知らずに見下す奴が多いからな！」
素早く体勢を立て直し、自分の武器を相手の方へと強く押し込む。相手も同様な行動をとったので、鍔迫り合いのような状態になった。
「だから、どうしたというんだ」
だが膠着状態にはならない。俺も会長も示し合わせたようにぴったりなタイミングでお互いに蹴りあって間合いを開く。
「なんだと！！」
その言葉と同時に俺は踏み出す。しかし会長は防ぐ。
「どうせ人なんて使い捨てだ！！　なのに役目を与えられるのだ！！　すばらしい事じゃないか！！　男は労働力、女は跡継ぎを産むだけの存在だ！それ以上もそれ以下もない！」
「貴様ぁぁあああ！！　ふざけるなよ！！　貴様は人の意思なんて関係ないとでも言うのか！！」
剣に力を入れる。会長は苦しく呻き声を少し上げる。
「ああ！！　そうだろ！！　意思なんて尊重しても意味も無い！！　どうせ家畜は家畜なんだよ！！」
その瞬間俺は怒りを感じていた。もしかしたらこの会長はいい奴じゃないかな？　と思った。けど違った……こいつも同じなんだ。偉ぶっている奴の一人なんだ！！
「スミダはどうなんだ！？　貴様は傲慢じゃないのか？　貴様の考え自体傲慢なんだ！！　全員が個人の意思を持ち行動したら破滅だ！！」
お互いに間合いを開く……
「けど！！　ある程度は意思は必要だ！！　お前らは下を下でしか

見ていない！！　生まれとかでしか判断しないじゃないか！！」
「それが傲慢だって言っているだろう！　貴様は個人の自由を訴えているだけだ。自由なんて存在してはダメなんだ。よく世界をみろ！　貴様が居た世界だって格差があっただろうが！！　貴様は幸せなところに生まれたんだな。お前は現実を知っていないからそんなことといえる！！」
そうかも知れない……俺は知らないかもしれない……けど俺は……自分の気持ちを貫く！！　自分の考えている事も間違ってるかも知れないが相手も間違っている事は分かっている！！
飛ぶ！　舞う！　打つ！　そして時に退きあい、もったいぶるように間合いを計り、お互いに飛び込みあって火花を散らせあう！舞を踊るように旋回しながらお互いの虚を狙う。
お互いにさっきから攻撃は当たっていない。ただただ攻撃と防御の激しい応酬があるだけだ。
「仕方ない・・・貴様なんぞに使うつもりは無かったが私も本気を出そう。」
そういうと足元に魔方陣が現れた。
「私の声を聞き駆けつけろ。我の盾となれ」
魔方陣から徐々に光が形を成す。そこには本でしか読んだ事も無いような魔物が現れた。
「こいつが私のパートナーのグリフォンだ。まぁ貴様とは質がもう違うけれどな。勝つためには仕方ない。行け……」
そういうとグリフォンはこっちに向かってくる。人間とはケタ違いの速さだ！！
「ぐ……は……」
なすすべも無く壁に叩き付けられる。そして会長は何かを詠唱していた――――――
「やばいのですよ！！コウイチがやられそうです！！」
ファニアスが言う。まったくのその通りだ。このままでは負けて死

んでしまう。しかし自分は何をすればいいのだろう……自分のしもべも救えないなんて……自分がとてつもなく悔しい……
しかしシュリスは冷静だった。まったくもって穏やかだ。他の全員はみんな焦ったり、喜んでいるのに……一人だけ、一人だけ彼を。異世界から現れた彼を穏やかに見ていた。
「がんばってください・・・ヴァ――――」
そう言ったがまわりは五月蠅くて聞こえるわけない。
シュリスは静かに祈りを捧げた。

「実験は失敗か。所詮……温室育ちの異世界だから仕方ないか。」
「なんてこと言うですか!!　あなたは!!　あの子だって……」
「あの子だってなんですか？　ほうほう？　知っているんですか？
あなたは？　あのクリスのしもべのことを？」
「知りませんがいいじゃないですか！　私はあなたの非人道的な研究なんて認めません!!」
「そうですか？　ならあなたの願いも叶いませんがいいんですかぁ？」
「くっ……」
「そうそう、あなたはそういう風に何もできないのに反抗している姿がいいんですから。」
「しかし。生徒会長のデータを取れただけでも大収穫だ。私はもう部屋にもどるから、死体の処理は任せましたよ……」
「うっ……うっ……」
所詮私は何もできない。彼の言うとおりにものをやるだけしかできないじゃないか。まるで操り人形のような自分……それが悲しくて……辛くて……

「ぐぐぐ……」
「これでおしまいです」
会長の周りに光の束が何個もできている

「光の束よ。私に仇名す敵を焼き尽くし浄化しろ！！　ライトバルカン」
一気に光が放出される……。そして全てコウイチに当たる。周りの男どもは狂喜している。恋敵的みたいな奴が死んだんだ。嬉しいと思うだろう。
しかし。異常な状態にある生徒が居た。クリスだった……。クリスは顔が真っ青になっている。しかも震えている……
「クリスどうしたの！！」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」
あきらかに異常になっている……ずっと肩を小刻みに震わせ謝り続けている。
それを見た教師達も驚いている……パートナーが殺されても普通ならこうならない……なにかの力が働いている感じがする。

「まったく、少し痛いなぁ」
誰もが耳を疑った。そんなわけが無いと思いながら煙が消えた場所を見る。そこには獅子の鬣を持つような髪をなびかせて盾で魔法を防いでいた幸一がいた。
「な、何故死んでいない！？」
目の前の男が聞いてくる。まったく、人が寝てるときに起こすなよ。
「俺の名前はオリュンポス十二神の一柱ヴァルカンだ。この体が消えそうだから仕方なく変わったんだ」
「なぜ、神なんかでてきてるんだ？　何故なんだ！！」
「あ？　偶然だよ。偶然。俺が力が少なくなって人間の体に入ってなかったら呼べなかったな」
「あ、あと貴様、確かブサイクとか醜いとか言われていたのになんだ？　その美形？　何故なんだ？」
「はぁ？　俺は足が不自由なだけで醜いとか言われてたんだぞ？あと神なんだしそこらの美形な男よりは顔もいいぞ？」

金髪は納得しないようだった。はーしかたない。
「貴様？　この盾分からないのか？　これはイージスだ。俺が作った奴だよ」
「な、なんだと？　なら貴様は本当に神なのか？」
「はー、そうだといってんだろうがまったく。人間って奴はものわかりがねぇな。まあ俺の勝ちでいいんだよな」
しかたない……そろそろ主人格にもどるか……
「まてぇぇい！！（´・д`・）」
なんだ？ん？変なＢＧＭまでかかっている
「西から太陽が沈むときそのとき俺達は現れる。悪を倒し世の中に平和をもたらすために！！」
「「俺達ビクトリー兄弟！！（＾ω。★）」」
二人の魔術師がでてきた。片方はデブでもう片方はガリ。秋葉原戦士か？　いや秋葉原魔術師か。
まったく……周りの空気が醒めたじゃないか。
「俺と戦うのか？」
「ああ、貴様は悪の根源だ。神ではなく悪魔なんだ！！だから貴様を倒す。」
「本音は？」
「ああ、ファニアスたんやシュリスちゃんをかけて勝負しろぉぉぉお！！ヽ（・、д`・）ノ」
「いいだろ……かかってこい。」
「うぉぉぉおおおーーーーーーー」
そういいながら突進してくる。捨て身の攻撃をしてもう一人が魔法で俺か……しかし甘いな。
俺は雷を展開し防ぐ。
「食らえ！！　ゼウスの雷を！！　神の裁きを受けるが良い」
そういい雷を操る。相手が懲りるような強さで撃つ。そうしないと殺してしまい問題になるからだ。
数分後、ゴミ二人はゴミ箱に入っていました。

さて、いいかげん主人格さんに戻しますか。あ……武器代わりに自分のハンマーを出せるようにしておくか。武器無しはかわいそうだし。戦闘できないだろうしな

――――――――――――――――――――――――――

――――

「第四回！！ファニアスちゃんのー用語解説コーナー！！」

パチパチパチ・・・

「今回はオリュンポス十二神のヴァルカンの話をするぞー。ギリシア神話では名前をヘーパイストスでローマ神話ではウゥルカーヌスと呼ばれているんだよー。オリュンポスの神々に加えられたヘーパイストスであるけどー、ヘーラーの彼への冷遇は続き、彼は母への不信感を募らせていたんだよー。そんなある日、ヘーパイストスからヘーラーに豪華な椅子が届けられたのー。宝石をちりばめ、黄金でつくられ、大変美しい椅子で、その出来に感激した上機嫌のヘーラーが椅子に座ったとたん体を拘束され身動きが取れなくなってしまったそうなのだ。そこでヘーラーがヘーパイストスに拘束を解くよう命じると『自分を貴方様の実の子であると認め、神々の前で紹介してください』と言ったらしいのです。醜さゆえ自分が捨てた子で認めたくもなかったヘーラーでだったらしいけどー、このままでいるのも恥ずかしいかったそうでー。仕方なく要求に応じヘーラーも認めたらしいのー。だが、母に疑心暗鬼になっていたヘーパイストスは、ヘーラーが助かりたい一身であり、本心で言った言葉ではないと考えてー信用せず拘束を解かなかったのだー。そして、『なら私をアプロディーテーと結婚させてくれますか？出来ないでしょう。軽々しく言わないでください』と言ったのであるらしいのだー。ところがヘーラーは助かりたい一身でこれを了承しちゃったらしいぞ。驚いたヘーパイストスだったけどー、急いでヘーラーを解放しちゃたんだよー。そして、ヘーパイストスはアプロディーテーと結

婚することになったのだー。しかし、アプロディーテーがすぐにアレースと浮気をしたために不仲となり離婚。後に改めてアグライアーと再婚したらしいのだー。今日はここまでーグッバーイ」

第一章　第四話　『決闘』（後書き）

すいません。バトルなんて書けません・・・。どうしてもしょぼくなります・・・。これからちょっとは勉強しないとダメですなー。

第一章　第五話　『出撃準備』

・・・プニプニ　・・・パチクリパチクリ
ここは？ん？保健室かな？清潔な白いカーテンにフカフカのベット、独特な薬品のにおい。そして目の前にはシュリスさんの顔がある・・・。シュリスさんってやっぱり美人だよな。
「シュリスさん、もう起きているので頬をつつくのはやめてください・・・」
「きゃぁあ！！」
びっくりしたのか大声で叫んで俺のみぞおちにパンチする。
「い、一回落ち着いて！危ないから！！（俺の命が）」
「あ、す、すみません・・・背中の包帯やっているときに話しかけられてびっくりして・・・」
・・・嘘いうなよ。人の頬をプニプニしてたくせに・・・まぁいいか。
「ありがとうシュリスさん。でも避けて欲しいな。」
「あ、う、す、すいません。」
名残惜しそうに離れる。でも自分も少し残念・・・胸のだんりょ――ってなにおもってるんだよ！！　自分ってこれだけスケベだったっけ？シュリスさんが美人だから？でも・・・クリスや市も美人だよな・・・なるほどやっぱり胸か。胸なのか？うーんでもクリスも胸大きい方だけど・・・やっぱり性格だよね。というか自分なんでこんな事考えてるんだろう・・・
「コウイチー！！　大丈夫！？」
そういいながら突っ込んでくるロケッ――もといファニアス。「ふぐうぅ・・・」またみぞおちにＨＩＴ・・・貴様ら・・・殺すつもりか！！
「大丈夫、大丈夫、大丈夫だから離れてねファニアスちゃん」
みぞおちがグリグリされて、さっきのダメージもあるのでかなり吐

きそうに・・・うぷぅ・・・
「そういえばクリスとシリエルさんは？」
「シリエルはクリスを見ているのだー」
『シリエルとの好感度は低かったようだ。』
うるさい天の声。
『事実だろ。まぁ好感度高くてもクリスのとこに行くがな。』
ならしゃべらなくていいだろ・・・
「そうなんだ・・・ってクリスになんかあったのか？」
「うん、急に震えてごめんなさいって・・・」
どっかの麻薬中毒者かって・・・茶化すところじゃないよな・・・
「ふむ・・コウイチ君？目が覚めたのだね。」
自分の近くに会長がいた。どうやってきたんだろう・・・周りの二人も固まっている。なら気がつかなかったのか・・・それほどの相手だったのか・
「コウイチ君、すまないな。」
会長は深々と頭を下げる。
「あやまらないでくださいよ！！終った事なんだから！！」
「コウイチ君・・・実は私はコウイチ君が望んだような世界をつくるのが夢なのに、それを罵ってすまない。そうでもしないと力が確かめられなくて」
「どういうことだ？」
「私は異世界の住人の能力を知りたかったんだ。手荒なマネをした。まことにすまない。」
「いやいいですけど・・・なんで力を確かめたかったんですか？」
「それは有益なものか、害をもたらすものかを見極めるためだ。君に生徒会に入ってもらいたい。」
どうするか・・・クリスにも許可取らないとダメかな？いや・・・しもべの出世だから大丈夫か・・・
「いいですよ」
きついかもしれないけど若干嬉しくもあった。自分の居場所が少し

でも増えると人間は嬉しいものだ。ついでに・・・飯もまともになるだろう。ずっとお預けは勘弁です・・・。
「必要になったら伝達魔法を使うから安心してくれ、では。」

3日後――
俺はジョギングをしていた。体もかなり治ってきているから。少しは運動しないと。まぁこんなに早く治ったのもシュリスさんとファニアスちゃんが頑張ったおかげだろう。回復魔法を貰ったおかげで今じゃどこも痛まない。しかしまだクリスは寝ているらしい。その理由は体内にあるエネルギーを一気に放出させたため疲れているらしい。自分に何かできないだろうか？
「コウイチさん、お疲れ様です。」
シュリスさんはひんやりと濡れているタオルをくれた。走って若干熱った体に丁度いい。自分は走る前に汲んでいた井戸水を飲みながらしみじみ考える。元の世界でもここの世界のような青空になっているのかな・・・
『生徒会メンバー集合。生徒会室に来てください。』
あ・・・呼ばれた。なんか脳に直接響くような感覚だ。
「生徒会によばれたので行きますね」
「はい、いってらっしゃい。」

「さて噂ぐらいは知っていると思うが・・・こいつはクリスのしもべのスミダコウイチだ。これからは監視も兼ねてこの生徒会に入ってもらった。以上。さて本題に移ろう。今回は森と洞窟に新種のモンスターが現れたという情報が来た。したがってこのモンスターたちの生態を調べてもらう。害を出しておりどうしようもできないならそのばで殺してもらってもかまわない。敵が未知のため、二人一組で行動してもらう。チームメンバーはこのボードに書いといた。私がバランスを考えて作ったチームだ。きっと調査を完遂し、戻ってくると信じている。さてパーティーを確認したらさっそく向かっ

てくれ。期限はなしだ。では行って来い」
「「「了解！！」」」
えらいことになったな・・・

第一章　第五話　『出撃準備』（後書き）

もうだめだ・・・疲れた。続きはまた今度

第一章　第六話　『出撃』

「さっさとこい・・・貴様が遅いと生態を調べる時間が減る。」
なんでこんな女性とチームなんだろう？実は能力じゃなくて、面白そうな組み合わせじゃ・・・そんなわけないない。・・・たぶん
この人はエリエンヌ・アリア・シュバルツさん、クールで知的っぽいイメージが似合う女性だ。組んだ時は嬉しかったが・・・少しすると人が変わったように俺を急かす。そんなに早く帰りたいのかな？なにか事情があるかもしれないな。
「エリエンヌさん・・・落ち着いてください。そんな状態でモンスターと遭遇してもまともに倒す事ができません。生態を調べるなんてできないですよ。きちんと冷静になって相手を見極めないと。」
「わかっている・・・」
わかっていないな・・・しかしこれは個人の問題だよね・・・でも見捨てれない。まぁでも今日は野宿にしないとだめだな・・・今日中に洞窟までは絶対につかないだろう。だから明日行ったほうがいい。無駄に夜にでるより朝を待ったほうがいい。
しかもこんな急いでる状態じゃさらに悪い。
「エリエンヌさん、もう今日は休みましょう？この状態で森を歩くのは危険です。」
「私は無事だ。だからさっそといくぞ。」
「俺がきついです。だから休みましょう。」
「し、しかし・・・」
「会長は調べて来いと言った後に無期限とも言っています。これはかなり時間が掛るからでしょう。無理に急ぐ必要なんてないでしょう？」
「ど、どうせなら早いほうがいいだろ？　早くてなにが悪いんだ？」
「この日が落ちそうなときに野宿の準備しないでさらに進んだときに離れ離れになって魔物に襲われたら危険です。」

「私は大丈夫だから先に・・・」
「大丈夫じゃないだろ？　何を基準で大丈夫なんだ？　もしあんたが死んだらお前の家族になんて謝ればいい？　私がエリエンヌさんをとめられなかったから？　まぁ謝る事はまずどうでもいい。でも、残された家族のこと考えろよ！！　お前一人の命じゃないんだよ！！　まぁ親とか嫌いかもしれないがお前が大事な人だっているだろう？　そいつを悲しませる選択肢をとるんじゃんねぇよ！！　あ・・・すまん。感情的になって。枝拾ってきてくれないか？」
「あ、ああ・・・」
「俺は魚とって来ますので枝を集め終わったら火をおこしておいてください。」
「しかし・・・どうやって魚を手に入れるんだ？　ここは山だぞ？　魚なんていないのでは？それよりも菌類のキノコとかとってきたほうが。」
「キノコの場合は自分は不確実です。エリエンヌさんが解るのならいいんですがね。まぁ今日はやめましょう。キノコは探すの意外に手間取りますから。しかも魚は山でもいるはずです。ちょっと準備しますから。」
　俺は自分のバッグの中をあさる。取り出したのはナイフとしかけ。まず枝を先端を細くしてしかけを巻きやすくする。これで完成。簡単お手軽釣具の完成。川魚や引きの弱い湖の魚なら余裕で釣れます。実はなぜ釣具があるかというと・・・会長に釣りしたいといったらくれました。ここで役に立つとは・・・
「では、釣ってきますね。枝集めと、火おこしお願いします。」
そう笑顔で言い、行った。

　かれこれ３０分程度。釣り場所がよかったのかかなりあっさり釣れた。大体・・・３０匹ぐらいだ。うーんでもここまでいらない気もするけど・・・まぁいいか。塩漬けにしておけば若干は持つだろう。

さっきの野宿ポイントにエリエンヌは居た。きちんと火をおこしている。しかし寝ている。まぁなんか急いでいたから神経が疲れたのだろう。俺は起こさないように料理を始めた。そうたいした料理ではないがこういう時の定番料理の魚の塩焼き。て、手抜きなんじゃないんだからね！！　たぶんこの魚は鮎系だろうというか鮎じゃないと少し嫌だな・・・さてまずはー腸をとる。これで生臭さが若干消えます。まぁここの味が好きな人もいるから各自の判断で決めます。自分は無しのほうですね。それにしてもある程度常にサバイバル道具を携帯していてよかった。こういうことに巻き込まれる事すらほとんど無いが備えあれば憂いなしだね。魚に塩をふりかける。この塩は対脱水症状用の塩だが気にしない。だんだんと香ばしい匂いがただよう。うんいいできだな。俺はそっとエリエンヌを起こす。まだ眠たそうな顔にドキッとしたのは内緒ってことで・・・

「これは？」

「魚の塩焼きだな。すまないな。道具がもっと有ったらもっと豪勢なんだけど・・・」

「そう・・・でも食べてなくていい。一人で食べてくれ。」

「やっぱり貴族様にゃ合わないかね・・・でも食べろ！！これから先がもたなくなるからな。」

「いらない・・・・」

「ふーそれなら無理やり食べさせるぞ！！」

「むりやり？」

「んーなら口うつしでもして食べさせようか？」

「ふふっ」

「ん？　どうかしたのか？」

「私にそんなこと言ったのは貴様が初めてだ。口うつしは遠慮したいから食べるとしよう」

「そうしてくれ。やっぱりつくったからにゃあ食べてもらいたいですよ。ついでに俺は寝床と果物とか野菜を探してくる。」

「ああ、わかった。いってきてくれ」

少しは心開いてくれたかな？まぁでもさっきと比べて笑ってくれたからいいだろう。うん。よかった。

ふーこんなものかな・・・ある程度の食料があつまった。意外に人参やじゃがいもがなっている。この世界の森って俺にとってはパラダイス！？　かなりの量の野菜が野生化しているがうまそうだ。あ、桃あるな。デザートにも丁度いい。ん？確か・・・カレーのルーと米がある。カレーが作れるじゃないか！！　さてー明日が楽しみだぜぇい――――

「ふー・・・」

私は一人でため息を出す。あの青年は今では珍しいほど目が澄んでいた。まるで大空を思わせるほどのものだ。でも男なんて変わらない・・・どうせ男なんて女をしたに見てる。ただの跡継ぎを産ませるだけの道具だと思っている。きっとあの青年だってそうなんだ。心を許すな。でも・・・この魚の塩焼きが暖かくて、あの青年の暖かさに触れられるようで・・・私の冷たい心を溶かしてくれそうで・・・私は食べ続けてしまう。次第に涙も出てきた・・・どっちが自分の本当の気持ちなのだろう。あの青年を信じたいのか・・・それともあの青年を拒絶したいのか・・・ふふっ・・・氷の聖騎士とも呼ばれている自分がなんでこんな事を考えているのかと思った。そして笑ってしまう。そして涙もでる。

またしんじたいな・・・

気づいたら火が弱くなっていた。火に枝を足す。火がまた燃え上がる。シルフィード・・・私はどうしたらいいのかな・・・そういい自分のロケットをみる。そこには二人の少女が写っていた。でも・・・私の夢はかなえたい。だから――――

「ただいまー」
どうやら帰ってきたらしい。私には眩しい気がする。その青年は私を助けてくれる気がした・・・でも・・・この人じゃ叶わない・・・どう足掻こうが叶わない。
「はー寝床がいいところ無かったよ。」
「そうか・・・ならここで寝るしかないな。私はもう寝ようと思う。火の番をお願いしていいか？」
そういえば・・・名前はコウイチだったか・・・うん、あとで貴様じゃなくコウイチと呼ぶことにしよう。さすがに貴様は偉そうだ。そう思っているとコウイチは私に近寄る。どうしたのか？
「すいません。エリエンヌさん寒くて・・・隣いいですか？」
・・・どうしろと。ここは一緒に暖まれればいいのか！？しかしこれは恥ずかしい・・・逃げたくなるし、顔が熱くなるのがわかる。うー・・・
「い、いいいい、いいいいだろう。一緒に寝よ――――」
「すいませーん遅れましたーたははー。でも桃とかもたくさん取れたし寝床もはっけ――――――」
「「「・・・」」」
「なぜ俺がいる！！」
な、何が起きてるんだ？なぜコウイチが二人！？
「あちゃーまったく・・・いいところで来ないでくれない？折角楽しもうと思ったんだし・・・本物さんもいれて３Ｐでやるかい？」
「嫌だ」
「即答かよ。まぁいい。なら貴様を殺すしかないか。」
そういい奴は姿を変える。ゴツイ姿になる。これではまるで高レベルの魔神じゃないか・・・
「ふふふ・・・声もでないだろう！！　これが俺の真の力だ！！」
こんな奴に勝てるのか？　武器も向こうにある。どうすれば――――
・・・だっさいな。

「ふふふ、声もでないだろ！！　これが俺の真の力だ！！」
「ださい」
「な、なんだと！！」
「いや、ださい。」
「ほう！この魔神、シリエンファーヨニエルジョナンシュアリアスブラウクドラシエルリクトカイエシエルシックティグフォンボウラジエアスジグラブジエストレ・ブレファーグエストミスレシアファーブレイックナクネミオンイリヒヒブロウニードカイエルシンファーブリエングエストを侮辱しているのか！？」
　ちょっとまて？
「もう一度。」
「そうか！　ならば言うぞ！　シリエンファーヨニエルジョナンシュアリアスブラウクドラシエルリクトカイエシエルシックティグフォンボウラジエアスジグラブジエストレ・ブレファーグエストミスレシアファーブレイックナクネミオンイリヒヒブロウニードカイエルシンファーブリエングエストを侮辱しているのか！？」
　名前長いからシリエンでいいや
「ああ、侮辱しているさ！！　シリエン！！　貴様名前なげぇよ！！」
「何をいう！！　私は短いほうだぞ！！　祖父はグランマニエルシンフェルブラクドミエルリクラエカエンショブレリアグロシアスキリエミマニアスジグミルプティアレムシルカラブレイアスホークレスレーバジスナクエルグラシアシグナムブリューテンペラアクシアショクフォープロニックアマターキャシューマミエシルボウシリエックバスティンモロシス・ブレファーグエストミスレシアファーブレイックナクネミオンイリヒヒブロウニードカイエルシンファーブリエングエストだ！！」
「な、なげぇ・・・」
「ハッハッハ！！　この私、シリエンファーヨニエルジョナンシ――」

「うるせぇ！！」
俺はハンマーを出し、思いっきり吹っ飛ばす。まるで漫才のようだ。
「ふぅ・・・こんなものかな？」
「・・・」
うーん気絶してるなエリエンヌさん・・・
「おーい・・・大丈夫か？　意識あるかー」
「あ、ああ・・・大丈夫だ。」
「ならよかったー。はい桃。これ食べて落ち着けよ。」
「ありがとう・・・」
あ・・・魚ない。まぁいいけどね。おいしかったならいいしね。
さて火を消してーと。ついでにからかうかー。
「でも・・・魚ないな・・・エリエンヌさん全部食べちゃったんだ・・・」
「え？あ、ああ！　すまん。美味しくて食べてしまった・・・なんでも言う事聞くから許してくれ。」
「なんでも？」
「ああ、騎士に二言はない！」
「そう・・・なら。」
エリエンヌさんの体が強張っているのが解る。まぁでも・・・俺は・・・
＞学園の商店街の買い物と道案内に付き合ってもらう。
＞体を好きなように弄う
なんだ！！　この二択！！　というか俺は前者なんだが！！
『はぁ？　しらねぇよ。大きなお友達は全員後者選ぶぞ。』
いや！！　俺は前者選ぶ！！　何があっても！！
『つまんねぇーやつー。』

「今度学園の商店街の買い物と道案内に付き合ってくれ。」
「え？　それだけでいいのか！　てっきり体を弄ぶのかと・・・」
どんなイメージだよ・・・
「俺はそんなことしないよ。相手が嫌がることはしたくないんだ。まぁ偽善者に近いかもな。まぁ置いといて・・・いい？買い物とかに付き合ってもらっても？」
「ああ、それくらいお安い御用だ。」
「さてーいこうか。この近くに熊とかもいない洞窟があったから。ちなみに火もおこしてあるからあたたかいぞ。」
「ああ、わかった。では行くぞ」

「コウイチか・・・」
私はそうつぶやく。コウイチは私が見た男の中でも異質の部類だ。私が異質と思うのは会長ぐらいだろう。二年生で騒がれて、会長に勝ったと言われるコウイチが気になって観察したが人間性は完璧だった。言葉は若干悪く感情的になりやすいが周りの人に優しく接している。しかも顔もいいから女子には人気な人だ。二日間見てみたがはっきり言ってここまでの人はめったにいないと思った。まずはゴミ拾いからはじまり、花の手入れ、掃除を誰に言われた訳でもなく自分でしている。教師に頼まれてものを運んでいる生徒の手伝いをしていたり、事務のおばあさんの会計の手伝いや悩み相談。そして剣術指導や体術修行、さらには料理を教えてもいる。しかし、コウイチは味付けが本当にうまい。あの魚の塩焼きでもそうだ。魚の油が引き立つような塩加減。しょっぱすぎず適度な甘味もある。ここまでつくれるとは思わなかった。やっぱり料理教えてるのは伊達じゃないのか・・・。でも私は心を許せない。いや怖いのか・・・あんな優しい人の心の闇を見たくないのかもしれない。
「―――ヌさん？エリエンヌさん？」
「え？きゃぁぁああ！！」

「ぐほ・・・」
コウイチは腹を押えてしゃがんでいる。どうやら鳩尾にパンチを入れてしまったらしい。
「エリエンヌさん・・・洞窟はあそこ・・・です。火は・・・・頼みま・・・したよ・・・」
「あ、すみません!!」
私は急いで回復魔法を使う。自分は光と水の混合だが回復は苦手だ。どちらかというと攻撃魔法のほうが得意だが・・・ないよりはマシだろう。
「いえいえ、俺もいきなり声をかけてすみません。」
そういいコウイチは洞窟に入っていった。私も離れないように着いていく。どうやら火を強くしているらしい。
「火の番は俺がやるから先に寝ててくれ。俺も後から寝るから。まぁ火の番っていうより明日の朝ごはんをつくってから寝るだけなんだけどな。
そういい彼はナイフで野菜を切っている。まぁお言葉に甘えて寝よう。

どうやらエリエンヌは寝ているらしい。後ろから寝息が聞こえる。
さて! 早速作り始めよう!! 俺の最高傑作を作る!!

「ここは・・・洞窟か・・・」
そういえば昨日会長が命令がしたんだっけ? 外からの日差しが心地よい。それにしてもいい匂いがする。コウイチは何をつくっているんでいるのだろうか?
「あ、おきましたか?ちょうどいいけど・・・まずは顔洗ってきてらどうです?ちかくに泉があったし、井戸もあったので大丈夫ですよ。」
「ああ、わかった。では行って来る」
「いってらっしゃい。」

ここは意外に環境がいいかもしれない。野菜もあるし空気も綺麗だ。生きていくには十分な水もある。うん、でも私はどうしてもあの子を救わないと・・・でも今はモンスター調査が任務だから忘れよう。うん。そう心に決め顔を洗う。

「あ、おかえりー。」

「ああ、ただいま」

まるで新婚さんみたいに感じてしまう。あはは。自分って変だな。というか自分がお嫁さん!? おかしくない!! 普通自分がただいまとかいってお嫁さんに癒されるんだよね!! まぁいいやこの話はかんがるだけで暗くなる・・・

「さて、はい」

俺は葉で作った皿を手渡す。中には米とカレーが入ってる。

「この白い物体と茶色い物体はなんだ?」

「俺が丹精込めて作ったご飯とカレーです。カレーライスともいいます。おいしいですよ。」

「かれーらいす?」

「はい、カレーライスです。」

若干口に運ぶのを戸惑っている。人間は未知のものを食べるときは抵抗があるらしいけど本当らしいな。うーん美味しいだけどなー。その様子が可愛い・・・頬を若干桜色にしながら口に運ぶか運ばないか悩んでいる姿はあの最初に会ったときとはすごいギャップがあってさらにそそられる。これがギャップ萌えなのかな?

やがて決心したようにカレーを口に含む。

「おいしい・・・」

「でしょ!辛いけどその辛さもおいしいんだよ!」

うん、おいしいっていわれるとすごく嬉しい。

「そういえば・・・」

「なんですか?」

「ここを拠点にしないか?ここなら目的の洞窟も近い。」

「そうですね。ここを拠点にしましょう。でもふぁ～うん・・・眠い・・・ちょっと仮眠してもいい？」
「ああ、いいぞ。その間私は食材を探してくる。」
「りょうか・・・い・・・」

数時間経ったらしい。エリエンヌさんが起こしてくれた。
「さて今回は洞窟ですよね。」
「ああ、今いる場所はここに一番近いからな。シンシェル洞窟に向かうのが時間的には効率がいい。しかし・・・」
「しかし？」
「私は水と光。コウイチは火だ。ここの敵とは相性は悪い事は確かだ。それでもいくか？」
「ああ、それしかないならそれで行きましょう。」
そして俺たちはシンシェル洞窟へと向かった。しかし・・・ここは来ないほうがよかったかもしれない。まさかあんなものが大量にあるなんておもわなかったからだ・・・・

第一章　第六話　『出撃』（後書き）

今回はいつもより若干長いかも。それにしても・・・眠い。さておやすみなさいー

第一章　第七話　『救助』

「思った以上にジメジメしていますね」
「そうだな。しかし……腐った臭いがしないか？」
「気のせいでしょ？」
　しかし俺もそれは感じた。入った瞬間腐った臭いがした。しかし……ここはカエル形のモンスターや魚形のモンスターがいる。きっと死んで腐ってこのような臭いがしたんだろう。しかし……周りには巨大なカエルや魚が浮いていて気持ち悪い。しかもあるくと地面がヌメヌメしている気がする。これは女性は入りたくないだろ。これはさすがにキツイ……。しかしエリエンヌさんは顔色一つ変えないで歩いている。これが慣れなのかな？
「エリエンヌさん、あそこにモンスターの群れがありますよ。」
　向こうの道に不自然にモンスターがたまっていた。これは若干怪しいな。
「放っておけ。と、言いたいところだが……調査もあるから見に行こう。」
　近づいてみる。俺はそこのモンスターのところにいった。生臭さッ！！　これはきつい！！　臭いだけで気絶しちゃいそう！！　そこの中心にはヌメヌメになって半泣きになっている猫耳をつけている少女がいた。助けないと！！
　助けますか？
＞はい
　いいえ
　なんでＲＰＧ風？しかも選択肢でいいえ選んだらどうなるんだよ！！
『１８禁ルートに……』
　ちょっと自重しろ作者！！　というか作者！　てめぇ未成年だろ！！

『気にしない、気にしない』
というかなぜこんな選択肢を。
『この際だからこの話をカオスにしようと』
それは最低だ！！
『はやく助けないと大きなお友達が喜ぶ１８禁ルートになるぞー』
おぼえてやがれ！！
「エリエンヌさん助けましょう！！」
「ああ、当たり前だ！！ここで見捨てたら騎士の名が廃る！！」
敵がこっちを向いた。本能的にこっちの様子を感じたんだろう。
大体……２５ぐらいいる。これぐらいならなんとかなるだろう。
「行くぞ！！　召喚！！」
俺はハンマーを召喚する。というか……なぜハンマーなのかな？
俺は刀系統の武器が得意なのに。しかしこのハンマーはかなり手に馴染む。まるで昔から使っているかのように馴染んでいる。とても軽い気がする。
「二手に分かれて撃破するぞ！　私は右を！　コウイチは左を頼む！」
「了解！！」
ハンマーを振るう。ハンマーが当たったモンスターがつぎつぎひしゃげていく。中には脳やら内臓が飛び出ているモンスターもいる
「おぇぇ……」
気分がよくない……初めて見る臓器。これで喜ぶやつがいるのか……俺は吐き気しかしない……アタマモイタイ……モンスターだとわかっているのに人間をころした気分になってくる。
「大丈夫か！　コウイチ！」
エリエンヌさんは敵を蹴散らしながら話す。平気でいられるのがすごいと思った。
「初めて殺したので……もう気分が悪くて」
「初めてモンスターを殺したのか？」
「ええ、だからです。よく平気でいられますね？エリエンヌさん」

少し皮肉をまぜていった。殺す事にためらいがない騎士さんに。
「いや私も慣れない。しかし……殺さなければこっちが殺される。それを理解しろ」
「でも……俺は……」
「徐々にでいい。別に慣れなくても良いんだ。自分が死ななければいい」
「騎士っぽくない発言ですね……」
「ふふ、名誉のために死ぬのは頭の固い年寄りだけだ。生きていれば必ず取り返せるんだから私は精一杯生きようとしている」
「イメージが変わりましたよ」
「どういうことだ？」
「いえなんでも」
気がついたら右側にいた敵が少なくなっている。エリエンヌさんは喋っている間にもきちんと倒していた。俺も覚悟を決めないと……
「いけるか？」
「ええ、もう大丈夫です。ありがとう。エリエンヌさん」
「き、きにしなくていい！　それよりもさっさと敵を倒すぞ！」
「はいはいー了解です。エリエンヌ様ー」
真っ赤にしている。これはおもしろい・・・これから時々からかうことにしよう。
俺はハンマーを振るう。一振りで敵を粉砕する。やっぱり臓物をみるのにはなれないが少しはマシになってきた。
「これでおしまいだ！」
そして俺は最後の一体を叩き潰す。潰した感触は気持ちよくは無かった。
「ご苦労様。はじめてのモンスター戦にしては行動がスムーズだったな」
「そうですか？　ありがとうございます」
「さてそろそろ先に進もう」
「ん？何か忘れていませんか？」

何か忘れている気がする。そうモンスターの群れと戦った理由だ。
「あ！　大丈夫！！」
そう猫耳少女を忘れていた。
「……ま……」
「ん？　どうしたの？」
「おまえがふっ飛ばさなきゃ！こんなことにはならなかったんだにゃぁぁぁあああああ！！！！！」
「フゲホ！！」
いきなり猫耳少女にアッパーを食らわせられた。そうそれはまるで龍が天に昇るような勢い――――じゃない！！
「おまえ誰だよ！　折角助けたのに人違いでアッパーするなんて！！」
「まったく！　人のことハンマーで吹っ飛ばしたおきながら！！」
「え？　ナンノジョウダンデスカ？」
一人だけ吹っ飛ばした記憶がある。でもあいつは男だった。こんな可愛い子じゃないさ！　って現実逃避はやめておこう
「どうして亜人の少女なんだ？　まえ私を襲おうとしていたときは男じゃなかったか？」
「じ、じつは……あたしの一族は変化の珠と呼ばれる魔法具があるんだにゃ・
それでーそのー男なら一緒に寝れるかなーと」
「そうか、なるほど。私はその少女姿のほうが可愛らしいくて抱きしめたいのだがな……」
「ま、とりあえず俺質問あるんだが」
「なんにゃ？　変態スケベ人間？」
「へんた――まぁいい。どうしてここにいるんだ？　どうやら場所から見てついたばっかりに見えるが」
「んにゃ……実は変化の珠を落としたのにゃ。だから探しに来たのにゃ」
「そうかー……なら俺たちはこの先に進むから持ってきてやるよ」

「そうだな。手間を考えてもあんまり手間も掛らないからな」
エリエンヌも同意する。こちらも時間を余分にとるわけにはいかないためだろう。
「いやだめなのにゃ、あたしの一族以外が触れると熱を発生させるのにゃ」
「そうなのか……エリエンヌさんはどうしたらいいと思います？」
「私は……一緒に来てもいいと思う。戦力の足しにはなるだろう」
エリエンヌは一瞬考える素振りを見せたがすぐに結論をだした。
「しかし……魔法は使えるのか？猫の亜人は一般的に魔法の能力が人間よりも高いというが……」
「もんだいないにゃ！このすがただと魔法力が低いんにゃけど前衛さんが時間さえ稼げば複合魔法程度ならちょちょいのちょいだにゃ」
「複合魔法ってなんですか？エリエンヌさん」
エリエンヌさんと猫少女が驚いたように口をあける。何かおかしいこと言っただろうか？
「複合魔法とは二つ以上の魔法を同時に操り混ざり合わせ発動する高等魔法技術だ。並大抵の人では発動できないな。学園で使えるのは会長と教師の一部ぐらいだろう。しかし猫の亜人は集中力が人間より格段に高いらしいからほとんど使えるだろう」
「いやそんにゃことないよ？努力しないと身につけられないからにゃ。一応これでもあんたらよりは年上だから唱えれるのはあたりまえにゃ」
「実年齢は？」
「１２５――じゃない！！　女に年齢聞くにゃ！！！」
「ぐふ！！」
な、なるほど１２５歳かおぼえておいたぜ……
「遊んでないで行くぞ、猫とコウイチ」
「はいにゃー」
「了解です」
猫耳少女を仲間に加えて俺達は洞窟の先に進む。この腐った肉の

臭いを少し気にしながら……

「毎回お約束ぅぅー！！　ファニアスちゃんの用語解説コーナー！！　っていってるけど・・・なんで五話と六話に出番ないの！？答えなさい作者！！」

「いやーすみません出し忘れて」

「ぶー許さないよー、というわけで勝手にゲストをつれてきたよ！！」

「え！？　誰」

「というわけでー今回はクリスちゃんだよー」

「ちょっと作者！！私は一応ヒロイ――じゃなくマスターなのに出番がないの！？」

「だって……しかたないじゃん。この話が終ったらクリスの出番増えるんだから」

「なら早く終わりなさい！　命令だわ！！」

「ぶーぶー」

「まぁ今回は複合魔法の説明を……」

「それはエリエンヌさんが解説した」

「……ファントムミスト！」

「な、なにこれ！にぎゃぁぁーー」

「それじゃ今回はファニアスと」

「クリスがお送りしましたー」

「「次回もお楽しみにー！！」

注）ファントムミスト　相手が最もおそれる幻惑を見せて相手を精神的に追い詰める魔法

第一章　第七話　『救助』（後書き）

うわぁ……更新遅くなってすみません。

第一章　第八話　『逃走』

「くらくなってきたにゃ～」
前回仲間になった猫耳年増少女が何か言っているまったく独り言かよ。年取るのは嫌だね～。
「何か言ったかにゃ？」
「いえいえ、何もありませんよ？　私はただ考え事をしていただけで」
「そうなのかにゃ？　ならすまないにゃ」
へーへー心の中での悪口ってどうして察知されやすいのかが不思議だ。これが女の勘というものか。
「しかし本当に暗くなっているな……コウイチ火魔法頼む」
「エリエンヌさんーどうやって魔法使うのですか？」
「「……」」
見ないで！　俺を『なんでそんなことも知らないんだ？』みたいな視線で見ないで！
「仕方ない……私が光魔法で代用する。――出でよホーリースフィア！」
そう唱えるとエリエンヌさんの手から光の珠が現れて空中に漂い、光を放っている。青白い光が神秘的な雰囲気をかもし出している。しかし明かりが若干心許無い。なるほどだから火の魔法での明かりの方がいいのか。
「これ以上強くすると戦うときに魔力が足りなくなるからこれで我慢してくれ」
そういうと有無を言わさずスタスタと歩いていく。俺とネコ娘はその後ろについていく。文句は無いので口答えもしない。気のせいかもしれないが足元がやけに冷たい。まるで足元に霧があるような錯覚がある。
「エリエンヌさんはとっても頼りになるにゃー。どっかの誰かさん

とは違って！」
「……俺のこの指が真っ赤に光る！！　お前を倒せと轟き叫ぶ！！
必殺！　シャーイ〇ングゥゥ！！　フィンガァァアアア！！！
（デコピン）」
「ふにゃ！よくもやったにゃ！！　にゃぁぁああ痛い痛いにゃあ！！」
俺の必殺シャイニ〇グフィンガー（デコピン）は相手のデコを破壊する力を（もっていないけど）もっている。
「うわぁぁん！　エリエンヌさぁーん。ひぐっ。あいつが虐めるよー」
「あはは！　敵将うちやぶったりー」
シャン……
俺の前髪が少し切れた。
「弱いもの虐めは駄目だ。可哀想だろ」
俺はエリエンヌさんがいるときはネコ娘を虐めないように決めました。
「それはさておきさすがに寒くなってきたな」
「俺の服を貸しましょうか」
「あ、いやいい。このぐらいで風邪をひかないからな。私の母国は雪国だったから問題ない」
「そうなんですかー」
この流れは何気にまずい気がします。こういう流れは親が死んだりとかしている確立がある。無闇に聞かないでおこ――――
「にゃ！　ご両親はお元気ですかにゃ？」
おいいいいい！！　空気読めよ！！
「ふふ、あんまり言いたくないが……まぁいいか。私の家族は死んでしまった」
「そ、そうなのかにゃ……ごめんにゃ……」
「いや、気にしないでくれ。私ももう慣れたからな」
「エリエンヌさん……」

「さぁ行こうか。もう少しで最深部だろう」
そういうとマントを翻し少し早足で先に進んでしまった。俺とネコ娘はあわててあとを追いかける。
腐っている臭いが濃くなっているのを実感した。この先になにかあるのだろう。
「まて」
手を俺の前におく、俺は素直に止まることにした。
エリエンヌさんは光の珠を消した。
「どうして消したのですか？」
「もし新しい魔物の反応が魔法反応型もしくは光に反応するタイプならどうする。後ろから不意打ちがくるかもしれない。だから安全策としてこうした」
「なるほどーためになります」
「けどー目が見えないから敵の居場所が分からなくなるから聴覚型には気をつけないといけないにゃー」
ネコ娘も補足してくれる。なるほど、新しい魔物ならデータ不足だから不意打ち対策にか。
「さて行くぞ」
ゆっくりと前へと進む。音とお互いの喋り声がなくなったせいか足音がやけに響く。
ゆっくりとゆっくりと足音がなる。不意にエリエンヌさんが顔を歪ませる。
やけに腐敗した臭いが鼻にくる。吐き気が込み上げるほどではないがこの臭いの中に二時間もいれば発狂してしまいそうだ。
「この臭いはなんだろうね。エリエンヌさん」
「さぁ……」
「この臭いは……逃げよう！　一刻も早く！！」
「どうしたんだ？」
向かい側から足音が聞こえる。嬉しいのかスキップのような軽やかな足音が聞こえる

「アラアラ、お客様ですかぁ～？　ようこそ！　我がラボへ！」
そういうと学者風の男は指をパチンとならす。急に周りが明るくなる。この場所を照らしたのだ。
「どうですか～このゴミたちは？　生きた姿は汚らわしいけど死んで腐敗してると美しいでしょ？」
この腐敗の臭いの原因がわかった。それは……
死んだ人間の腐敗した臭いだったのだ――
「う、うわぁぁあああ！！」
「あ、あ……」
俺とエリエンヌさんは腰が抜けそうになっていた。そこには人間には見えない腐った肉、肉、肉、肉、肉。
それが周りに散乱している。内臓も飛び出しており健康的な赤い色ではなくカビが生えておりそして黒や茶色になっている。
ひとつひとつがまるで遊び終えた人形のように無造作に置かれている。もう意識がもたないぐらいに臭い。二時間もいなくても発狂してしまいそうになる腐敗した肉たち。
「い、いやぁぁあああ！！　もう……やめて……やめて……」
エリエンヌさんは泣きながら懇願する。もう見せないでという事だろう。
「ん？　そこの娘はわからないのかい？　この芸術が？　まったくいいじゃないか……人間はあるていど運命が決まっている。その決められた運命の終結には等しく死がある。その命の最後の輝きを見ているのが好きなんだ。その死をみるために人間を集めてじっくりと槍をさしていきその人間たちの断末魔を聞きながら茶を飲むのもいいものなんだ。まぁ、それにも飽きてきて死体をそこらへんに捨てたら……なんと！　新しい芸術があるじゃないか！　この自然と一体になる姿もいいだろう？　ひとつのことでもあ――――」
「いいかげんにしろ！！」

恍惚の表情をして人の死を芸術とか言うコイツには我慢できなかった。テンションはハイになっていた。臭いなんか気にしている場合ではない。
「なんだ？　まったく……まぁいいボクの崇高な趣味は誰にも理解できないからね。まぁ遊ぼうよ。鬼はボクで君達は逃げるんだ。何分もつかな？　前の人は5分だったからさー。楽しみだよ。さぁ！　行くよ」
そういうと魔法を詠唱し始めた。あいつは、遊びという名前の殺戮をしようとしている。俺は大丈夫だがエリエンヌさんは震えて動けなさそうだ。
ネコ娘を探すがいない。逃げたのか、素早いと思う。なら俺のやることはまず一つ。エリエンヌさんを別の部屋に移動する事だ。
「――我の血を糧とし赤き楔をかのものに打ち込め――、ブラッドチェイン！」
男は魔法を唱える紅い鎖を放つ。狙いはやはりエリエンヌさんだ。俺はエリエンヌさんを抱えて避ける。しかし反応が遅かったためか腕に掠ってしまった。
その瞬間腕が重くなる。なるほど詠唱の通り相手を拘束するものか。しかし掠っただけなので俺をそのままエリエンヌさんを抱えながら移動する。鎧をつけてるため重いだろうが今はテンションがハイになっているためかあまり重さを感じない。
「ん？　あ、重くないか？――ってなにお姫様だっこしているんだ！」
「まずは逃げましょう！　不利です！」
「ああ、わかったから！　もう歩けるから下ろしてくれ。恥ずかしい。」
「あ、はい」
俺とエリエンヌさんは逃げる。しかし相手の場所がわからないし下手に動くと危険な気がする。
「エリエンヌさんどうします？」

「相手は外にでると思っているだろう。そこをつく」
「なるほどもっと奥に進むのですか。けどそれじゃ一生ラチが……」
「いや5分あれば援軍を呼べる。しかし集中力がかなり必要なためどうしても詠唱できる場所も探す必要がある」
「なるほど！」
俺とエリエンヌさんは安全な場所を探すため奥に進むことにした。
「ネコ娘はどうした？」
「逃げました……」
「ならよかった。民間人に属しているであろう彼女を巻き込むわけにはいかない」
「まぁそうですね」
あまり気にしていないらしい。というかこう考えれるエリエンヌさんはたくましく思えた。けれども女性なんだ。俺が守らないと。
「さて、進みましょう」
「だな。しかし……あの男はなんなのだ？」
「わかりません。でも、敵であることは確かですね」
ふと床に穴があった。不自然な気もするが……どうするか。
「穴か……」
考えていたらエリエンヌさんが近寄り同じ穴をみていった。
「どうします？」
「いくしかないな」
「ええ、わかりました。俺が降りて大丈夫だったらハンマーを召喚しますのでそのときに降りてください」
俺は穴におちる。意外に短くこの先に道もあるようだそしてその先にまた穴がある。大丈夫だろう。俺はハンマーを召喚する。それにあわせてエリエンヌさんも降りる。俺はハンマーをしまう
「この先も穴がありますのでもう一回いきますね」
「ああ」
そしてまた降りる。しかし今回は長かったこのまま加速しまうとケガしてしまうのでハンマーを召喚する。それにあわせてエリエン

ヌさんも――って！！
「すいません！　エリエンヌさん」
俺は一言謝り肩にエリエンヌさんを乗せるようにする。そして俺の肩に乗る。一言で言うと肩車だ。
少しずつ降りていく。エリエンヌさんは恥ずかしそうに頬を赤らめているが気にしない。

降りた先は広い空間だった。
機械がたくさんあり、大きな泉に管をいれて何かを吸い取っている。
「何だ？　この鉄の塊は？」
俺は近寄り機械を動かす。操作法がわかるからどうやら俺の国とおんなじタイプなのだろう。
「ん？　なぜわかるんだ？」
「俺の元の世界と似ている機械があるんだ。だからある程度はわかる」
「き、機械？　なんだそれは？」
「んーあとでお願い。今調べるから」
「あ、ああ。わかった。」
カタカタカタ
俺がキーボードを打つ音しか聞こえない。案外ブロックが弱く簡単にハッキング（？）できた。さすがにあの学者もこっちの世界では機械なんてないから別にブロックをかけなくても支障がなかったのだろう。
俺はとある日記を発見した。それを読み始める。その文章には悲しき男の実験記録や日々が書かれていた。
――――――――――――――――――――――――

「ファニアスのー！！　解説コーナー！！　今回はシリエルちゃんを連れてきたよー」
「どうもー」
「今回は魔物の反応についてだよー」
「まったく、まずは大体の種類を分けましょうかしら。まず大雑把に反応するものを分けると音、光、魔法代表的ね。ここから、魔法反応は身体能力の増強に気がつきやすいのや魔法の詠唱のときにできる魔力の香りに反応するわよ。
　音は基本的には眼が見えない魔物が鋭いわ。蛇なんて良い例かもしれないわね。光は昆虫タイプや幽霊タイプなどを惹きつけやすいので注意です」
「シリエルちゃんはそういう魔物に襲われたらどうするの？」
「私は……そうね……魔法反応型じゃなければ不可視の魔法を使うわ。魔法反応型の場合は普通に逃げるわ。魔法を使うと逆に不利になるもの。なるべく用意しておくアイテムは煙幕だわ。持っておいて損はしないからね」
「ほーほーなるほどーシリエルちゃんらしいねー」
「ならあなたはどうするの？」
「えーほら！　私って外にでない箱入り娘てきな存在だから気にする必要性もないかなーと……」
「やれやれ」

第一章　第八話　『逃走』（後書き）

誤字脱字は気にしないでください。あと展開早いのもご愛嬌で。
今回は一番展開に失敗したと思う。

第一章　第九話　『学者の過去』

１９８７年　９月１９日
今日は私は新しい医学説を発表した。いろいろな人が私を褒め、たたえてくれた。まだ２５歳だったが相当なものだと考えた。私は純粋に嬉しかった。さて明日の研究のために早く寝よう。

９月２０日
私は研究のためのネズミやウサギを間違って殺してしまった。この部分はまたやり直し。仕方ないが焦らないでやろう。私の部屋に夕日の日差しが入り込んでいる。いつの間にかこんな時間に……さて一度眠ろう。
眠った後研究を続ける。さっきのネズミから新しいモノが見つかった。大発見だ。これは次の目玉にしよう。

９月２１日
今日もいいことがあると思った。しかしお金を渡されて無理やり研究を奪われた。そんなに名声が欲しいのか……私は研究資料が全てなくなった部屋でポツンと一人になる。幸い、あのウイルスのことについてはメモしていない。
私の発見はバレないだろう。あれは本当に偶然だったから。

９月２２日
先輩の桜庭さんがたずねてきた。かれは生体に興味をもち、アンドロイドを作ろうとしていた。理論は確立しているためあとは作るだけらしい。羨ましい……俺は全部獲られたのに……

９月２３日
何もない。ただ心の中に大きな空洞をあけてなにかを考えている。

９月３０日
新しいことが分かった。この世には精霊が存在している。なにもファンタジーの中だけではない。私は精霊は原子だと思う。原子の集合体。それが精霊。しかし魔力が足りので出て来れないだけでは

ないか。
昔はアーサー王のエクスカリバーも精霊が持っていたといわれる。精霊は人と関わりあって生きている。俺はそれを証明するためにまた研究をする。
１９９２年　１０月１２日
かなりまとまった。結構かかったがいいものができた。俺は早速この報告書を提出する事に決めた。これはジャンルは違うがすばらしい発見だ。楽しみで仕方がない。これで学会の連中の肝を……
いやまずは寝よう。眠い。
１０月２６日
なぜ否定される！　あなたらがただ単に頭が柔らかくないからだ。唯一協力などを言われていたのは桜庭先生だけだった。けど……桜庭先生の作品はとてもすばらしい。けれども俺のものは非現実的？
桜庭先生のだってそれなら非現実的だ。俺は証拠もみせたし根拠もある。なのに否定される。そうか……こんな研究なんて無意味なのか……こんな儲けにならない研究……。あ――桜庭先生のは娯楽や戦争などにも使える。だからか。
１０月２７日
耳鳴りがする。ここ最近するようになってきた。しかし俺は研究を続ける。耳などどうでもいい。俺はあいつらを見返したいだけだ。たとえ耳が失っても研究できる。
？月？日
変な世界に来てしまって何日もすぎた。記録である日記をかけなかったのが残念だ。しかしここは俺が目指していた世界に似ている。夢でも見ている気分だ。
？日
同じく飛ばされてきたという女性とであった。名前は華仙（かせん）　葉月（はづき）。どうやらかなりこの世界で過ごしているらしい。この異世界の言葉も覚えている。彼女とともに俺は世界を回ることにした。
？日

色々なできごとがいっぱいあった。村の人たちの暖かさ、モンスターの優しさ、精霊達の慈愛。俺はこの世界にきてよかった。元の世界には戻れないけれども、こんなにも暖かい世界。のびのびと生活できる世界。俺はこの世界で暮らす事を嬉しいと思った。人のために今はとある村で医者になろうと思った。こんなすばらしい世界で医者になれる事を誇りに思いたい。

？日

小さな病院を作って早5年。村の人たちも元気に動き回っている。ここ最近は雪が降っており、屋根から雪を下ろすのが大変とか大きな雪だるまをつくったなどほのぼのした話を聞いてると暖かくなる。彼女は元気だろうか？　俺は4年前にまた旅にでかけた彼女のことを少し考えた。

？日

今日はとある町にいって薬を仕入れに行った。しかし村のひとたちがいない。何故だろうと思い村長のところにいった。そこの庭と家には村の人全員の死体があった。俺は許せなかった。女性は全員レイプさせられて殺されており男性は肉片のように無残に切り刻まれていた。服も全て奪われ家具も奪われている。山賊がまだ残っていたらしい。俺はそいつらを――――殺した。とても心地よかった。自分たちも殺したのに助けてくれと懇願する顔。逃げようとしても立てなくて震えているやつの顔。全てが愉快だった。こうなると村の人たちも愉快に見えてくる。何が楽しいかは自分でも分からなかったが俺は笑った。何かを忘れるために。

？日

行き場所もなくなった。俺は村の近くの洞窟に行く。そこの最深部にはすごいスペースがあり。そこには泉もある。俺はとあることを思い出した。人造精霊の生成方法。俺は生成にとりかかることにした。

？日

効率が悪い。そういえばパーソナルコンピュータというものが開

発されていた。その資料は見たことあるので俺はその材料を集めて作成する。意外にもあふれるよう材料は存在していた。そのため色々試せた。

？日

ついに完成した。俺のパーソナルコンピュータ。元のものより25倍ぐらいは高性能だろう。早速俺はこの機械で研究を進める。

？日

人造精霊の一号が完成した。しかしエネルギーが採取できないためボツに。

？日

この泉の水を使ってみることにした。泉に魔力が宿っているのは多々ある。数日後エネルギーが自動的に補給できるものができた。しかし肉体維持のためのタンパク質が手に入らない。そうだ。

？日

俺は人間を数人連れてきた。人造精霊に食べるというアクションをくみこんでいるため自動的に食べるようになる。そして食べていく。俺はそのシーンを美しいと思ってみる。

？日

俺は我慢できなくなってきた。人を殺したいという欲求が強くなってきている。俺は人を殺す事にした。まずは老人をじっくりじっくりといたぶる。しかしすぐに死んでしまう。つまらないから俺は大人を殺し始める。

血飛沫をだし、苦しみながら生きたいと願う人間。それがとても芸術的で俺は人をもっと殺すようになっていった。

？日

人造精霊たちはモンスターをも食べていき段々と力もついていった。とても可愛らしい我が子だ。もっと育て。ボクにもっとすばらしい絵を見せてくれ。

？日

「なんだこれ……」
「どうしたんだ？　コウイチ」
「あの科学者の日記だ……　エリエンヌさん？　この近くに村ありますか？」
「あ、ああ。一応あるがもう人が一人もいない。全ての人が死んでいた。どこかの魔術師が魔法を使いみんなを殺したらしい」
「そうなんですか……」
　あともうひとつ気になる事があった。華仙葉月だって……あの人はここにいたのか？　美月義姉さんが……。
「あら～見ちゃったのかな？」
「「な！」」
「ボクの日記か～懐かしいな～おはは。あれからもうこれだけ時が経ってるんだね～でもボクの研究資料を少しでも見ちゃったんでしょ？　処罰しないとね～」
「貴様……」
　エリエンヌさんは鞘が走らないように気をつけながら相手に切りかかる。しかし相手はそれを避ける。
「よくも！」
「あはは～そんなんでボクに勝てないよ。怒りなんてものは油断している相手にしか効かないからね」
「五月蝿い！　風よ。我の剣に宿りて鋭き矛となれ！」
　エリエンヌさんが唱え終わると剣がさらに鋭さを増し刃も長くなる。そして相手に切りかかがそれをまた避けられる。
「まったく～人の話は聞くものだよ？　この雌が！」
「なっ！」
　人が変わったように袖から剣をだし切りはじめる。
「ほらほら～どうしたんだい！　そんなにおされてさぁ！」
「てめぇ！　どけろ！！」

俺は後ろからハンマーを振りかざす。
「キミもジャマなんだよ！　風よ切り裂け！　ウィンド！」
「ぐわぁ！！」
俺は壁に叩きつけられる。頭がすこしグラグラする。頭をぶつけたようだ。
「コウイチ！」
「よそ見したらダメですよ」
そういうと学者はエリエンヌさんの横にまわって黒い弾を打ち出す。それをまともに食らいエリエンヌさんも壁に叩きつけられる。
しかし俺とは違いもっと強い勢いで叩きつけられていた。
「う、あ……」
「はぁ……これでぇートドメですね。まったくつまらなかったですよ？」
「エリエンヌさん！」
俺は重い体に鞭をうつ。
「太古の楔よ。奴を貫く槍となりその血を奪え！　ドレインランス！」
ごぽごぽと膝から血が出続け鎖がその血を吸い取って赤く染まっていく。
「え、こう……い……ち……？」
「だ、だいじょうぶですかね……」
俺の膝ががくがくと笑い始める。しだいに血がなくなり顔が青くなっていくのが分かる。
「ま、まってろ今回復魔法を……」
「たぶん無理ですよ……回復魔法は出血をとめるだけでしょ？もう血が足りませんから」
「コウイチ！　でもせめて！」
「い……や……いいです」
「いや！　まだ助かる！　まだ！」
しかしエリエンヌさんは回復魔法をかける。血は止まったが血が

足りない。
「なんで助け合う！　何故そうまでして！　イライラする！　虫唾が走る！」
　相手は闇雲に魔法を打ち続ける。しかし機械が頑丈なのか機械やカプセルなどには傷がつかない。
「自分の身が大事なんだろう！？　人間なんてそんなものだろ？　貴様らはなぜ相手を気遣える！」
「俺は……守りたいだけだからね……。まだ間に合うから……まだ間に合うのなら力いっぱい助けていたい。俺の体なんてどうでもいいよ。だって……俺が守ると決めたんだ。そのためなら命をかけるのは当然。だろ？」
「コウイチ……」
　学者は暗いオーラを出しながらこちらに近づいてくる。ひたひた、ひたひたと。そして武器を取り出し斬りかかろうとする。さっきのときとは雰囲気が違う。さっきのは遊んでいるように見えた今は本気で八つ裂きにと思っているのかもしれない
「闇の矢よ！　四方八方から相手を狙撃しろ！」
　周りに黒い大きい矢が飛び交う。確実に俺を殺すつもりなのだろう。ここまで手が込んでいるとは。
「どうします？」
「私の魔法は範囲攻撃に弱いから避けるしか……けれどもその体じゃ……コウイチは……」
「ならエリエンヌさんは逃げてください。そして仲間を呼んでください。この矢を耐えるぐらいの壁にはまだなれますから」
　腕がうずき始めるが俺はこらえる。さっきのダメージのせいかわからないがどうかは分からないがなぜか腕がうずく。
「な！　私よりコウイチが行った方が！！」
「いえ、増援が遅くなりますし地理もわからないのでエリエンヌさんにしか任せられないです。さっさと逃げてください」
　いつでも発射できるのか周りの矢は空中で静止している。

そして……放たれた。
「穢れなき水よ……穢れを持ちし闇の力を阻め」
ありえない人がいた。白い穢れのないような人が前に竪琴をもって現れていた。
長い髪をなびかせ俺とエリエンヌさんの前にいる。それは天使の降臨にも見えるほど美しかった。
矢たちは俺たちの周囲にできた水の膜の中で威力を失い消えてしまう。
「え……シュ、シュリスさん？」
「大丈夫ですよ、コウイチさんにエリー」
「エリーというのはやめてくれ」
「それはおいておきましょう。それでは一曲いきます」
「え？　一曲って」
次の瞬間やわらかい歌声が俺の耳に届く。優しく母性が感じられる詩だった。今まで貧血気味だったのが嘘のように直っていく。
だんだんとドーム状のような水の膜の中に歌声が響く。それはまるで母に抱かれているようなぐらいの安らぎが感じられる。
「これが私の詩です。」
「あ、今あれと交戦中だけど」
「あの技はたぶん領域系の防御魔法には弱いので大丈夫です。安全なので今は休んでください」
しかし汗が額に滲んでいる。使用する魔力が多いのだろう。しかも詩を歌った。これできつくない方がおかしい。
俺は……決めた。
矢は次第に消えてゆき最後にはもう飛ぶ矢は無くなっていた
「シュリスさん、エリエンヌさん。今から走って出口に向かいましょう」
「そうだな。今は無理だから逃げるしかない」
「そうですね。私もそれが一番だと思います」
「では一斉に行こう」

そういうと俺たちはこの部屋の出口に向かって走り出す。俺は万が一のため後ろにつく。
出口は近かったため2人ともすぐにでた。俺はそれに……続かなかった。
「さようなら……シュリスさん、エリエンヌさん。生きてくださいね！　俺も生きれたらいきますから！」
俺はそういい出口をハンマーで壊す。そうこいつを閉じ込め、時間を稼ぐためだ。
「な！　コウイチ！　貴様何を！」
俺はその言葉を無視してある方向へ目を向ける。そこには目が据わった学者がいた。狂気に飲み込まれた哀れな学者の姿だった。
「君ィ？　ゆるさないよぉ～。折角のサンプルたちがいなくなったじゃないか」
「ハン！　言ってな！」
「まぁいいや。一番弱いのは君だろう？　私の研究の成果を見て欲しいな。この完璧な生命体を！！　そしてこの生命体に命を捧げるがいい！！」
パチンと指を鳴らす。二個のカプセルからそれぞれ形状が違う生物が現れた。
人間の形のものとタコみたいなものがいる。
「さぁ、ボクはゆっくり見ているよ。特等席で。血に彩られる狂想曲を」
ここからが勝負だ。エリエンヌさんたちが早いか、それとも俺が足止めに失敗しコイツがエリエンヌさんたちを捕らえるのが早いのか。
俺はハンマーを握り締める。さっきから腕が変に熱い。俺は奥歯を噛み締めると自分の武器を構える。
俺の立っているところが血で濡れている。さっきの自分の血のせいでもあるだろう。とてもやりにくい立ち位置だ。
横にステップする。多勢に無勢だ。けれども俺は約束した。一方

的だったけどさっき生きると。そのために武器を振るうことを決めた。
ジリジリと歩み寄り隙を疑ってくる敵。
「かかってこい。俺が相手になってやる」
こうして戦いが始まる。

第一章　第九話　『学者の過去』（後書き）

あーはい杉岡ですー。ここ最近更新遅くなっていますねー。
なぜかこの小説に名前がリとつく人多いですね……
相変わらず展開が早い杉岡です。自分の文章のヘタさが情けないです。
がんばってうまく書けるように努力します！

第一章　第十話『対峙』（前書き）

えっとなぜか知りませんが今回すごく馬鹿げている内容になってしまいました。
ど、どうぞ……次回はマジメに書くので許してください！

第一章　第十話『対峙』

「てぇりゃ！」

思いっきりハンマーを振り下ろす。しかし単調な攻撃は避けられてしまう。

今は人型の奴と退治している。

タコのような形のほうは急に動かなくなったからだ。ふつうならそのタコを殴りにいくかもしれないが後ろを突かれないために人型の奴と交戦している。

俺はハンマーを横なぎ払う。奴は上に飛び上がるが俺は持ち手を変え柄で思いっきり突きをする。

それをまともに食らったため奴は吹っ飛ぶ。不意打ちは避けれないようだ。しかしこの手はもう通じないだろう。相手は理解能力が非常に高い。

しかし今はまだひるんでいる。そこには俺は走って近寄る。またとないチャンスを生かすためだ。これで一体倒したらだいぶ楽になる！

けれども攻撃ができなかった。俺は壁にぶつかり何かがが投げたもので押さえつけられてしまう。

「ふー間一髪だね。ユー」

「遅いんだよ！　クー」

「ごめんごめん。アイツの血液は特殊でちょっと解析に時間がかかったんだ」

そこにはタコの形の奴がいなくなり、俺がいた。そこで俺はわかった。タコは戦闘をするために動かなかったんだ。

そして人型は時間稼ぎ……なるほど……っと関心している場合ではない。

「でもなぜかソイツさ複雑なのに、ハンマーしか出せないみたいなんだ。ダッサイよね」

「でもそのハンマーを有効に使えてるじゃないかさすがはクー天才だな」
「あはは、そうでもないよ。あいつがバカなだけだよ」
俺は悔しくて唇を噛み締める
「あいつ本当に悔しそうにしているぜ」
「本当だねー！　ユー」
俺は本当に無力だったんだな……10分もかからないうちに負けるなんて。
すいません。エリエンヌさん。
「さて、どうせ不味いだろうけどどこから食べる？」
「うーんなら腸がいいな」
「俺は頭でいいや、こいつもあそこに行きかー。まぁこれだけ弱いんだから別にいっか」
「だねー」
あいつらの声を聞いてるとふいに違う声が聞こえた。どこかで聞いた事のある声だ。
「ふぁ、情けねぇな。しかたない俺が変わりに戦ってやるよ。アンタが死んだら俺が困る」
とたんに腕が熱くなる
「う、がはぁ！　ぐぅ、あああ！」
「あ？　何コイツ病気？」
「なら食えないかもね。ちぇー」
「いいたいことはそれだけか？」
「「はぁ？」」

「コ、コウイチ！」
「エリー今はだめ……逃げるしかない……」
「しかし！」
バチン、と乾いた音が響く。シュリスに叩かれたのか……

「コウイチの気持ちも考えて……今はただ逃げよう」
「うん……」
「にゃはは～お二人さん？　それで本当にいいのかねぇ？」
「「え？」」
　そこには獣の耳を生やした女性が立っていた。どっかで見た事がある顔だ。私は記憶の中から該当者を探してみる
「う～ん、本当にいいのかねぇ？　私はちょっとこの向こうに用があるんだけれど。一緒にくる？」
「ほ、本当か！」
　私は考えるのを中断して彼女の言葉に賛成しようと思った。
「エリー。助けも呼ばないと。あとその人も敵かもしれないし」
「私は敵じゃないよ。あと一つ言うとここから戻れないよ。強力な結界があるから。だから足止めなんて無駄。それなら今助けに行った方がいいと思うがね」
　本当に敵か敵じゃないか……私は……彼女を信じる事にした。敵なら自分の存在をばらさずに殺した方がはやい。しかもどこかで見た事がある。特にあの猫耳。
「シュリス、信じようあの人の言葉を」
「けど……はー、そうですね。エリーはこういうときは絶対曲げないからね。私も行きます」
「シュリス、ありがとう」
「それじゃーちょっと危ないからどいてねー一気にここ壊すから」

「いいたいことはそれだけか？」
「「はぁ？」」
「なら俺も本気でいかせてもらう」
「はっはっは、何言ってるの？　ああ、きっと頭狂ったんだな」
「そうだね～じゃないとこんなセリフ言わないもんね」
「貴様はハンマーの心を分かっていない。ハンマーとは……　漢（オトコ）の

武器だ！！飛び道具に使うなんて邪道！！」
俺を拘束しているハンマーを解く。そしてそのハンマーを俺の武器庫に入れる。珍しい武器は好きですよ。
そして俺は二つの武器を取り出す。
「ゆけチャクラム！　ゆけガーンディーヴァよ奴らを撃ちつらぬけぇぇぇぇぇ！！」
俺はチャクラムを飛ばしながらも弓で敵に攻撃する。
「ハンマー使ってねぇし、お前もバリバリ飛び道具使っているじゃないか！」
「チッチッチ、甘いな。俺はハンマーを飛び道具にするのは許してないのだ（一部除く）」
「武器変更を要求する！」
「そうだそうだー！」
「しかたない。槍で勘弁してやる」
俺は武器庫の中からとある槍を取り出す。
「それならＯＫだ！」
「なら戦って負けても突っ込むなよ？」
「ああ！」
俺は構える。向こうはこちらに攻撃を仕掛けるため走ってこっちにくる。なぜ離れているかというとさっきの弓とチャクラムが原因だ。
「ゆけ！　グングニル！　奴を貫けぇぇぇ！！」
「ちょっ！　ま！　それ反則！　反則！」
「はぁ？これは投槍だから問題は何にもない。突っ込むなといったのに突っ込むとは悲しいな」
「てめぇのせいだろうが！」
「しかたない……ゆけブリューナク！　奴の四肢をボロボロに貫けぇぇぇぇぇ！！」
「まてまてまて！　おかしい！　おかしいだろ！？」
「仕方ない……ゴソゴソ……よし発見。ゆけ、ゲイボルグ！

！　奴を――」
「まてまてまてぇーい！！　普通に接近戦にしよう、いやしてください」
「仕方ないな。んしょこれでいいだろう？」
「なにその巨大な剣……」
「バルムンクだけど何か？」
「あ、ありえないでしょその大き――」
ザシュン
「え」
「お前の下半身はもう斬れている」
「ぎゃぁあああ！俺の下半身がお茶の間では放送できない状態に！！」
「我がバルムンクに！　断てぬものなし！」
「どっかで聞いた事あるセリフだな。おい！」
「うるさいなーはい木工用ボンド。さっさとくっつけて」
「こんなものでくっつか！！」
「ユー、これってギャグ小説だっけ？」
「知らん！！」
「戦闘時に俺が出るとマジメな小説じゃなくてギャグ小説になるんだ」
「最悪だなおい！」
「しかも面白くない」
「そんなこというなよ……」

……何やってるんだろ、あの三人
「おや？　逃げたのではなかったんですか？　ちょうどいいです。三流コントは見飽きたのであなた方と戦いますか」
「援護を頼む！　シュリス」
「任せてください」

この部屋に音が響く。体が軽くなったかのようにスムーズに行動できる。詩は偉大だなと少し思ったり。
「ぐ、いきなりなんで動きが良く……」
「私の本気をなめるな！」
「輝く星たちよ、七色の光をもちて――」
詠唱が始まる。呪文が完成するための時間稼ぎだ。ある程度することが決まっているとスムーズに動ける。今回はあの猫耳の女性に攻撃を届かせないようにするだけ。
たったそれだけだ。それならうまくできないはずがない。こっちはシュリスもいるし向こうは一人だ、注意は簡単にそらせる。
「ぐぅ！　貴様ぁぁ！！　雌の分際で！！」
「ふん、ジェンダーなんて知らん。知っているのは女でも戦いに不利はないことだ」
私は相手の攻撃を極力いなす。無闇にガードするよりいなしたほうが有利だからだ。向こうはいなさないで防御している。だから手数が減るのだ。
それだから攻撃される。怒りは油断しているやつしか意味ないといった口はどこにいったのか。
「今、断罪のときはきたり！　プリズムスターズ」
どうやら呪文が完成したらしい、私はバックステップでさがる。
みたこともない呪文、彼女は一体……何者なのだろうか
「グ、クソッ！　雌ども！　なめるんじゃねぇ！！」
突然襲い掛かってくる。あの魔法で倒せなかったのか！？
「まずはてめぇから殺してやるよ！！」
「きゃ！？」
「エリエンヌさんをやらせるか！　必中の槍よ奴を貫け！　グングニル！」
学者の腹には貫通してらしい槍が見える。どうやら槍が当たったらしい。
「コ、コウイチ……？」

「あーあ、まったく今の主導権俺にあるのに無理やり奪って槍をうつとはさすがだね。あっはっは、さてこいつらはどうするか」
コウイチ（？）の傍には2人の男がいる。
「これは？」
「ああ、あいつが作った人工精霊らしい」
「とりあえず学園につれていくべきだと」
「そうだよなーそれじゃさっさとでてあとは学園の探索係に任せよう」
「う、うん」
バタン
「え？」
いきなりコウイチが倒れた。
「こ、コウイチさん！　しっかりしてください！」
「ごめんねーちょっとどいて」
そういうと猫耳の女性は額に手を当てて腹をさすったりしている。
「うん、ただの過労。問題なし」
「よ、よかった」
「でもどうやって運ぶ？」
「あ……」
「俺達が運ぶよ」
「き、貴様らが？」
敵だと思われるやつらが名乗りをあげる。
「いや、だって主いなくなったから主を倒した人が主でしょ？　だからこの人は俺たちの主ってことだから安心して」
「いやだからって」
「そうねお願いしますね」
しかし猫耳の女性は聞き入れる。
「ど、どうして？」
「だってこんなに目が輝いてるから捨てるのもかわいそうだし」
「う、まぁそうですね」

一時間後保健室で起きた俺はあの2人が俺の子分になったことを聞くとめまいを起こしてもう一度寝てしまった。

――――――――――――――――

「はーいファニアスちゃんの！　用語解説コーナーだよ！　今回は6個の武器について説明するよー。出てきた順に説明するね～

・チャクラム
ヒンドゥー主神が使う光輪。使った神が太陽神であるために日輪とも言われている。円月輪とも呼ばれている。

・ガーンディーヴァ
シヴァ神から英雄アルジュナに贈られた剛弓。ちなみに元々の持ち主が空と水の神のため水の属性を持っているのが一般的。

・グングニル
オーディンが持っていたといわれる槍。グングニルという名の意味は「貫く」。ルーン文字と言われている文字を書くことで絶対外さず、手元に戻ってくる槍ができた。ちなみにここ最近では魔槍と呼ばれているが神がもっているから聖槍だと思う。でも聖槍だとロンギヌスを指す場合が多いです。

・ブリューナク
太陽の力を持つ槍。太陽神ルーが持つ魔法の投槍。名前の意味は「貫くもの」。一度投げると先端が5つに分かれてばらばらの切っ先が敵を襲う。ちなみに追尾性能もある。

・ゲイボルグ
みんな大好きＦａｔｅにも出ているゲイボルグです。（なかには嫌いな人もいるかもしれないが）赤枝の騎士団のリーダーのクー・フ

ーリンが所持しています。投げると先端から３０もの矢じりが飛び出し、敵の防具を貫通させたといいます。

・バルムンク
竜殺しの剣と呼ばれます。鉄よりも固いといわれている竜の鱗を一撃で貫いている。ちなみにグングニルにはさすがに勝てなかったらしくグングニルに折られたらしいです。

いじょうなのです～。ではまた今度～ですよ！」

第一章　第十話『対峙』（後書き）

えー、はい弁解しません。何故なんだろう？　なぜこんな変な感じになってしまったのでしょうか？　はい本当に申し訳御座いません。ほんとに申し訳御座いません。これからも読者でいてくれると嬉しいです。

第一章　第十話　『対峙』（まじめ？版）（前書き）

はい今回はマジメ版みたいのを書きました。どうぞ

第一章　第十話　『対峙』（まじめ？版）

「てぇりゃ！」

思いっきりハンマーを振り下ろす。しかし単調な攻撃は避けられてしまう。

今は人型の奴と退治している。

タコのような形のほうは急に動かなくなったからだ。ふつうならそのタコを殴りにいくかもしれないが後ろを突かれないために人型の奴と交戦している。

俺はハンマーを横なぎ払う。奴は上に飛び上がるが俺は持ち手を変え柄で思いっきり突きをする。

それをまともに食らったため奴は吹っ飛ぶ。不意打ちは避けれないようだ。しかしこの手はもう通じないだろう。相手は理解能力が非常に高い。

しかし今はまだひるんでいる。そこには俺は走って近寄る。またとないチャンスを生かすためだ。これで一体倒したらだいぶ楽になる！

けれども攻撃ができなかった。俺は壁にぶつかり何かがが投げたもので押さえつけられてしまう。

「ふー間一髪だね。ユー」

「遅いんだよ！　クー」

「ごめんごめん。アイツの血液は特殊でちょっと解析に時間がかかったんだ」

そこにはタコの形の奴がいなくなり、俺がいた。そこで俺はわかった。タコは戦闘をするために動かなかったんだ。

そして人型は時間稼ぎ……なるほど……っと関心している場合ではない。

「でもなぜかソイツさ複雑なのに、ハンマーしか出せないみたいなんだ。ダッサイよね」

「でもそのハンマーを有効に使えてるじゃないかさすがはクー天才だな」
「あはは、そうでもないよ。あいつがバカなだけだよ」
俺は悔しくて唇を噛み締める
「あいつ本当に悔しそうにしているぜ」
「本当だねー！　ユー」
俺は本当に無力だったんだな……10分もかからないうちに負けるなんて。
すいません。エリエンヌさん。
「さて、どうせ不味いだろうけどどこから食べる？」
「うーんなら腸がいいな」
「俺は頭でいいや、こいつもあそこに行きかー。まぁこれだけ弱いんだから別にいっか」
「だねー」
あいつらの声を聞いてるとふいに違う声が聞こえた。どこかで聞いた事のある声だ。
「ふぁ、情けねぇな。しかたない俺が変わりに戦ってやるよ。アンタが死んだら俺が困る」
とたんに腕が熱くなる
「う、がはぁ！　ぐぅ、あああ！」
「あ？　何コイツ病気？」
「なら食えないかもね。ちぇー」
「いいたいことはそれだけか？」
「「はぁ？」」

「私はあっちに戻る！」
私は戻ろうとした。しかし腕をつかまれる。私は驚いてしまった。彼女にここまで力があるとは思わなかったからだ。
「邪魔をしないでくれ！　もう見たくないのだ！　私の……私のせいで私が未熟な所為でこうなった！　私が代わりに盾になるべきだ

ったんだ！　私はまだ長く生きてないが騎士なのだ。私が護らないといけない。シュリスは学園に戻って応援を呼んでくれ。私が時間稼ぐ」

バシン！

大きな音が鳴る。遅れて私は頬の痛みを感じた。シュリスが平手打ちしたのか？　シュリスは目に涙をため私を見る。

「エリーだけ苦しいと思わないで。私だって苦しい……役に立たなかった自分が悔しい。だけど彼は私達に託した。だから――」

「まちな！」

シュリスの声を遮って一つの声が聞こえた。どこかで聞いた事がある声だが姿はまったく知らない人だった。特徴は猫の耳。職業はたぶんウィッチだろう。

「怪しいものではないよ。あたしは冒険者をやっている魔術師。まぁウィッチだね。やっているんだけどね。まぁ置いといてここを出ようとしたら結界があって出れなかったんだ。多分通信魔法も使えないし出れないよ。この場合術者を倒すんだけど術者は壁の向こうかな？」

「一応そうですが……その結界の情報は本当ですか？　私が来たときは張ってなかったのですが、もし結界の事が本当ならばこれぐらいの規模の結界を張るには３０分はかかりますが」

「あんたは学園の生徒かい？　ならまだ知らないかもね。これはスイッチタイプだろう。前もって敷いておき何かの言葉に反応するようになっていたのだろう。あたしの事は別に信じなくてもいいぞ。あたしは向こうに用があるだけだし。コウイチから受けた恩は返さないとダメだからね」

彼女は崩れて通れない壁に向かい魔法を放とうとしていた。

「私も行きます。一人でも人手が必要ですよね？」

「ああ、人手は多くて困らないからな」

「エリー！」

「私は護りたいのだ。彼を」

「……はー、私も行きます」
「まず作戦は……ここをこうしてやるだけでいい」
「わかった。がんばらせてもらう」
「私も了解しました」
「それじゃいくよ！　ライトニングボルト！」
長い詠唱時間ののち壁に向かって魔法を放つと壁が崩れる。そこには――

「「はぁ？」」
「調子乗るなよ泉の精霊ごときが」
「ふん、そのハンマーから抜け出してから言うんだな！」
俺は記憶している武器具現する。全てを焦土に化すといわれる伝説の剣を。
手に光が集まる。速さを重視したため威力は少なくなるだろうがこいつらには5分の1の能力でもいけるだろう。
時間かけても唱えている間にやられたら意味がない。
「具現せよ。悪魔の剣の写し身よ。レーヴァテイン・レプリカ！」
手に深紅の剣が握られる。その剣を振るい水のハンマーを一気に蒸発させる。
「なに！？　クー！　拘束を頼む！」
「わかったよ」
俺の周りに四本の柱が現れる。古い魔法だな。
「亜空間武器庫展開！　ブリューナクよ我の手に」
俺は武器庫の中からブリューナクを取り出し武器庫を踏み台に上空からブリューナクを放つ
この槍は5つに分裂し相手に向かう。こんな柱なんて一気に壊せる。そして最後の一つはあのタコだ。
「クー！」
「蒸発せよ！」

槍が強い光を放つ。
そして蒸発してタコは消える。所詮泉の精霊だ。能力なんてあんまり高くない。
「よくもクーを！　水よ奴を包み拘束せよ！」
「あいつよりも下の拘束魔法で俺を止めると思うなよ」
俺の周りに水の膜が展開されるが水ならこの剣の前じゃ意味がない。火の力がかなり強ければ水なんて一瞬で消えてしまう。水の拘束魔法なんてただの一秒ももたない壁だ
俺は剣を一振りする。それだけで俺を拘束していた水の拘束はなくなる。
「くそ、くそ！　なんだよ！　こいつ！　荒れ狂う水よ。奴を狩れ！」
「イージス展開！」
目の前にイージスを出す。ちなみに俺のイージスの盾は結界魔法のように展開される。そっちのほうが使いやすいからだ
「な、なんでだよ。何でなんだよ！」
「そんなの決まっている。泉の精霊なんかが神に勝てるわけがないからだ」
そして俺は詠唱を始める
「全てを焼き尽くし焦土と化せ。フレアヴォル――ぐふっ！」
な、タイムリミットなのか？　早すぎるまだ五分も経っていない。魔法は使えないな。それなら。
「白銀の刃よ。我の手に！」
とっさに武器を製造する。ここの場所は質のいい鋼があったからだ。武器は刀。魔力をつかわないで早くケリをつけるなら刀が一番いい。
たぶん今回は魔力を使いすぎたからたのもあるがきっとこの体が魔力酔いを引き起こしたのもすぐにタイムリミットになった原因の一つだろう。
こんなとき自分の体じゃないのがもどかしい。

ブリューナクを蹴り上げて亜空間武器庫にいれる。レーヴァティイン・レプリカはそこまで魔力が篭っていないからなんとかなるだろう。
俺は精霊の方にあゆみよる。怯えているようだ。俺はそれを無視して斬る。そして俺に血がつく。刀にもベットリと……
「おい、見てないで降りてこいよ。そこで見てないで」
俺はイスに座って高みの見物をしているやつを睨む。
「ふーん、でも君だってもう限界でしょ？」
「なんだと」
「まずは君の動きにキレがなくなっているね。次に魔法の中断。そしてブリューナクの武器庫へ入れた。この３つでわかるでしょ？君はもう魔力がつきかけている」
「でも残りはお前だけだ」
「ふーん、でもさ。泉の精霊を蒸発させたのはハズレだったね。水は蒸発しても冷気を加えれれば元に戻る」
「ま、まさか」
「そうだよ。たぶん想像通りだよ。また蘇るんだ。涼しき風よ。我らを癒したまえ。クールウィンド！」
泉の精霊は切断した傷が直り、蒸発した精霊も元に戻る。
「ユー、反撃開始だね」
「そうだなクー。やられたら倍返しだ」
「イージス起動！　展開、前方３７。方向に一つ、後方６８。方向に一つ」
「「甘い！！」」
気がついたらもう近くだった。
「な！」
「烈風衝！」
「烈氷衝！」
俺はとっさに二つの剣で敵の攻撃を防ぐ。しかしレプリカのレーヴァテインは衝撃で壊れてしまう。

「その邪魔な剣さえ壊せれば俺達の勝利だ！」
「その刀は普通の刀らしいからね」
「ぐっ！　はー、はー」
「おやおや戻ってしまいましたが。そっちに興味ないのでさっさと拘束して手足もぎ取って私の研究所に運んでくださいね」
「「了解しました。マスター」」
どうやら解除されたらしい。俺の体が自分で制御できるから。
しかしこれはピンチだ。
「アイシクル！」
「ぐわぁぁ！」
俺の足を貫通して氷の柱がでてくる。
「いいねぇその声ゾクゾクするよ」
「ライトニングボルト！」
目の前に雷のビームらしきものが飛んでくる。
「誰だい？　俺とユーの邪魔するのは？」
「そこの男の保護者かな？」
一人の女性が出てきた。それに続いて二人の女性がでてくる
「コウイチ！」
「エリエンヌさんにシュリスさん！？　学園に戻ったんじゃ？」
そう俺はこの2人に逃げてもらうために時間を稼いだのに……きたら意味無いじゃないか。
「実は」
「それはあたしが話すよ。そこにいる学者が結界張っていたからでれなかったんだ。だから私達はそいつを倒すためにここに来た。わかるかい？　コウイチ？」
「ん？　俺のこと知っているの？」
「……気づいてないならいいわ」
「僕らを無視して話しすすめないでくださいよ」
そういうとタコ型だった精霊が人型に変わる。
「拘束魔法……影縛り天曇二式、発動」

「エリーのその術って確実に光属性に見えないよね……」
「そうか？　ふむ、でも一応光系統なのだがな」
「のんびり話しないで。あたしたちの敵はまだいるでしょーが」
「ボクのことかい？　あはは、君達が束になっても勝てないよ」
そういうとイスから立ち上がり魔法を詠唱し始める。
「コウイチ、聞いてくれ」
「あ、はい。どうしたんですか？　えーっと、えっと名前は？」
「ラジエでいい。ともかく、あたしが魔法の詠唱を完成させるまであいつの攻撃から私を護ってくれ。一気に大魔法でケリをつける。ちなみにエリエンヌとシュリスには話してある」
「わかりました」
ラジエさんも魔法を唱え始める。精霊達は後ろで動けないく喋れないから安心だ。
一人に専念すればいいからとても楽。３対１だ。まず力の差があってもとめることができる。
「援護を頼むぞ！　シュリス」
エリエンヌさんが声を張り上げてそう喋る。きっと詩の事なのだろう
「任せてください」
この部屋に音が響く。体が軽くなったかのようにスムーズに行動できる。詩は偉大だなと少し思ったり。
「ぐ、いきなりなんで動きが良く……」
「俺の本気をなめるな！」
「輝く星たちよ、七色の光をもちて――」
ついに詠唱が始まりはじめる。俺はあいつを動けなくするために足を斬る。
「ぐぅ！　貴様らぁぁ！！」
やつはまた闇雲に魔法を放っている。
俺は相手の魔法を極力いなす。無闇にガードするよりいなしたほうが有利だからだ。向こうはあたりもしない魔法を乱射しているた

め。手数が増えるのだがそのぶん精密ではないのと威力も高くない。
それだから攻撃される。怒りは油断しているやつしか意味ないといった口はどこにいったのか。
「今、断罪のときはきたり！　プリズムスターズ」
どうやら呪文が完成したらしい、俺はバックステップでさがる。
まばゆいばかりの光が現れる。
突然現れた美しい夜空が見えた
実際に夜空が見えたわけではない。魔法が美しい夜空のように見えているのだ。
幻想的な攻撃だった。まるでそこだけが別の空間のように感じられるほどひきつけられた。
「クソ餓鬼どもめ！」
「一つ聞きたいことあるのですが」
「うるせぇ！」
「仕方ない。体に聞く！　華仙流抜刀術、箒木（ははきぎ）」
一旦、刀を鞘に納めてから加速をつけて抜く。これは義姉さんが見せてくれた華仙流抜刀術だ。ちなみに俺はこれしか知らない。他にもあるらしいからこいつに聞きたかったのだが……そういえばさっき巻物あった気が……もしかして？　あとで見ておこう。
手に持っている俺の刀に血がびっしりついている。俺は人を殺したんだ。そう思った瞬間体が震えた。奥歯がガタガタとなり寒気もする。急にインフルエンザのような症状が襲う。
「コ、コウイチ？　ど、どうした……顔が真っ青だぞ？」
そうかもしれない。初めて人を殺したんだ。平気な分けない。
「あ、はは。俺は人を殺す事には向いてないようです。もう今でも斬った感触が残って気持ち悪いんです」
「コウイチ、すまない。私が不甲斐ないばっかりに」
「う、う……。俺は、俺は……」
「今は私の胸で存分に泣いてくれ。誰だって人を殺すのが怖い。当たり前だ」

俺はエリエンヌさんの胸で存分に泣いた。鎧は冷たかったが、心は暖かった。母のような温もりがあった。

コウイチが寝てしまった。泣きつかれたのと激しい動き、そして初めて人を殺したという事実の所為でかなり疲れたのだろう。

「エ、エリー？　どうやって運ぶの？」

「あ」

そうだ、男一人なんて私とシュリスと旅の女性では無理だろう。どうするべきか。

「すいません」

「お、おいクー？」

「なんだ？」

さっきまで敵だった精霊がこっちによる

「僕たちが代わりに運びます」

「信用はできないな？」

「なら一つ、僕の能力はコピーです。もちろんあなたの技の影縛りでしたっけ？　あれも使えます。でも使わなかった。それでは……ダメですかね？」

あのときに私とコウイチに影縛りがかかればアイツは倒せなかった……

影縛りは影があれば使えるから本当にあの科学者の味方なら使うだろう。

「うん、なら信じてみよう」

「え、エリー……」

「どうせ人手がたりないんだ。それなら……な」

「はぁ……わかりました……」

私達はここからすぐに出ることにした。この場所から私は逃げ出したかった。

コウイチのためだと言い聞かせて

第一章　第十話　『対峙』（まじめ？版）（後書き）

タイトルも変えました。二つの世界と二色の未来です。
ちょっと眠いので最後手抜きなのは許してください

第一章　第十一話　『お出かけ』

あれから一週間がたった。もう体も元通り。
けれども体の筋肉痛は尋常ではなかった。しかしすごく今は楽だ。
今日からまた下僕として働く。
どうやら俺が旅に出かけた次の日にクリスは元通りになったらしい。
昨日はクリスたち三人が俺のお見舞いに来てくれた。
なんかちょっぴり幸せだったり。
エリエンヌさんとシュリスさんは毎日のようにここに来てくれた。
やっぱり常日頃鍛えていると直る早さも違うものなんだねとエリエンヌさんを見て実感。
これからはもっと体を鍛えようとすごく思った。
今日は洗濯、掃除が割り当てられている。
女物の下着を洗うのはなれない。というかキツイ。とても恥ずかしい。
少しは意識してくれるとありがたいものです。
しかも洗物の量はたくさんある。
まったくなんで女性は洗物が多いかなっと。
俺は洗濯場にいく。
この前は川で洗っていたが今回は洗濯場だ。
というかあったんだ……洗濯場。
よごれをきちんと落としそして皺がないようにきっちりのばす
なんかデジャブ。
それにしても量が多いので時間がかかる。
ふーむ、大変だ。
「ん？　コウイチか？」
「え？　エリエンヌさん？」
「ああ、どうだ？　調子は？」

「すっかり平気です。大丈夫大丈夫」
もう体は軽い。うん
「ありがとうございます。毎日御見舞いに来てくれて。」
「いや、そんなことで感謝されてもな……ん、あ、そうだ。思い出した」
「どうしたんです？」
「明日、暇ならこの学園のところをいろいろ案内しようと思ってな」
そういえばそんな約束していたな。すっかり忘れてたけど。
やっぱり約束はきっちり守るタイプなんだろう。
「ええ、明日は仕事もありませんので」
「なら明日」
「はい！　では」
エリエンヌさんはここから出て行った。さてさっさと終らせようかな。

澄み切った青空に布団のシーツなどがゆれる。今日、出かける前にやっておく。
こんなに天気がいいなら干しておいた方がいいので。
今日は普通にお出かけ日和。
日頃の行いがいいのだろう。
「コウイチ準備できたか」
廊下からそんな声が聞こえる。俺の部屋のそとから声をかけたのだろう。ちなみに俺の部屋はマスターとは違う部屋だ。
やはり男女が同じ部屋で寝るのはよくないのだろうという学園からの配慮で部屋をもらえた。
やっぱり汚いあの部屋で地べたに寝るのは苦痛だ。
せめて布団もしくはやわらかいものでもあの部屋には欲しかった。
今日はついでに服も買おうと思っている。さすがにずっとこの服じゃまずいからな。

学園側の援助もあり日常品には困りはしないぐらいにはなっている。
「はい、今行きます」
「ああ」
サイフをもちいつもの学生服を身につけ外に出る。
そこにはいつもと違うイメージの姿をしたエリエンヌさんがいた。
長めのワンピースを着て肩にはカーディガンをかけている。
いつもの凛々しい姿とは違い淑やかに見える。
「ど、どうしたんだ？　私の姿見て固まって……似合わなかったか？」
「い、いや違うんです。い、いや……その～、あ～、え……っと……似合いすぎてて」
「そ、そうか？シュリスに見繕ってもらったんだが……ちょっとこういう服苦手だから……」
「じゃ行きましょう！　あ～楽しみだな～！」
恥ずかしさを紛らわすために大声で部屋から出る。
市で免疫ついてたと思っていたけど意外に免疫ついていなかった。
なんというか市は可愛いけどエリエンヌさんは綺麗な感じだからか？

風になびいて一本一本踊るようになびく長い金色の髪。それに見とれてしまう。
こんなに綺麗だとは思わなかった。
ついこの前、洞窟に行ったときは堅物な女性だと思っていたがプライベートはプライベート、仕事は仕事というのをきちんと分けていた。
大人な女性というか人生の場数が違う感じがする。
みんなのお姉さんというのが一番しっくりする。
そんな女性がとなりにいる。

……確実に男女の質が違う気がする。
そんな美人なエリエンヌさんと肩並んで歩く……ある意味地獄だ。
さっきから男たちからの視線が痛い。
そして女たちは暖かい眼差しでこっちを見ている。
エリエンヌさんは気づいてないのかそれとも気づいててやっている
るのかはわからないが俺にいろいろな場所を教えてくれる。
……かなりのハイテンションで。
なんかイメージが少し崩れたけどこんなにはしゃぐ事があんまり
なかったんだろう。
ちょうどいいガス抜きになれば幸いだ。
なぜか一度そう考えると周りの視線が気にならなくなる。
さて楽しまないと！

「コウイチ、これなんてどうだ？」
「うーんもう少し抑え目なのがいいかな？」
「そうならこっちか？」
「うん、これがいいね」
洋服屋で服を選ぶ。こっちの世界より服の種類などは少なかった
が満足できるものが結構あった。
もともと服には興味なかったので動きやすい服装を選んでみた。
エリエンヌさんの進めもあり軽装にした。なんでも重い服や鎧だ
と俺の攻撃の仕方と合わないらしい
服を着替え制服を鞄の中に入れる。新しい服を着ながら商店街を
歩く。
いろんな人たちがお互いに声を掛け合いながら移動する。
それはデパートとかに慣れていた俺には新鮮だった。
そんな昔では普通の光景だったものを見ていたら心があったかく
なった。
「いいですね。みんな助け合って…」

俺はエリエンヌさんに語りかける。しかし上の空でアンティークショップの棚に置かれてある箱を見ている
「どうしたんですか？　エリエンヌさん」
「え、あ、すまない」
「いいですよ、それでどうしたんです？　その箱を見て？」
ちょっと顔を伏せてから顔を上げた。
「早く亡くなった母の形見のオルゴールに似ているのだ。ただそれだけだ」
「あ――す、すいません」
「いやいい、気にしないでくれ」
そういっていたが目ではそのオルゴールを名残惜しそうに見ている。
金額は……た、たかっ！　４万ｚだって！？　この服上下合わせて１２０ｚなのに……
なるほどだからか……
「さて腹ごしらえでもしよう。ここの近くに店があるからな」
「わかりました」

それからいろいろ周った。
魔法宝珠屋などおかしな店や駄菓子屋みたいにこっちにもある店が結構ありかなり楽しめた。
今俺は広場にいる。
エリエンヌさんがちょっとシュリスに会いに行ったらしい。
先に帰ってくれと言っていたが夜道を女だけで歩かせるわけにはいかないと思いここで待つことにした。
買い物がおわったらここにくるらしいからここをのんびり見て周る。
「お兄さん、お兄さんちょっと来てくれない？」
「いいですけど……何かあったのですか？」
「変な人に追われているんですよー助けてください！」

見た目は１０歳くらいの少女。事情はしらないが追われているらしい。
「んーお兄さんはどうもできないなー」
もし追い払ったとしてもその後はどうするのだろう……
「追い払うだけでもいいんですよ！」
そう少女は頼み込む。さてどうしたものか……
「さっきのオルゴールほしいんでしょ？」
「え、な、何でそれを？」
「にひひーあそこはおじいちゃんの家なの。だからね助けてくれたら差し上げてもいいんだけどなー」
背に腹は変えられないか……。
「わかったよ。それで何すればいいの？」
「お兄さん話わかるねー。じゃあの男に近寄って攻撃してくれればいいよ」
「それだけ？」
「うん、それだけ。別に攻撃じゃなくても少しその場にとどめておくだけでいいから」
いいのかなぁ……
「そのあと店に来てくれればあのオルゴール上げるからさ」
「わかったよ」
俺はいかにも不良ですといっているような男のもとに近づく
「あん？　何見てんだよ？　ぶちのめされたいのか？　あ〝ぁ？」
「いやあの～お兄さん？　なんであの子のことを追っているのですか？　女の子から助けてほしいと聞きましたが？」
そう言うと急に顔を真っ青にしておどおどし始める。なにかあるのだろうか？
「ちっ、ばれていたか……」
そう呟くと不良っぽい人はすぐにいなくなる。何かあったのだろうか？
さてあの店に行くか。

「おじゃまします」
チリンチリンと鐘の音がなり俺を出迎える。
中は思った以上に明るく埃っぽくない。初めてこういうお店に来たが結構いいものだと思う。
奥には４０代くらいのおじさんがカウンターにいた。
「すいません、あのオルゴールをもらえるって言うのできたのですが……」
「ん？　あのお婆のいっていた子か？　まったくあやつ人の売り物を勝手に」
「お婆？　いえ少女っぽい人でしたが」
奥からテコテコ歩いてくる人が居たさっきの女の子だ
「勝手じゃないでしょ？　おじいちゃんから許可とったじゃん。文句は言わないでよ」
「おじいちゃんとかキショ！　お前の方が年上だろうが！」
「あ、あのー話が見えないのですが」
「わたしはー商売の女神の使い魔の菊だよん。このおじいちゃんに憑いている狐だねぇー」
「わしは一応肩書きは大商人。名前はロースド・ウィグナー。菊のおかげでここまでこれたな」
「なるほど……」
お互いを悪くいいながらもお互いを信頼をしているのがわかる。
なんかオーラが違う。なんといえばいいかわからないけど。
「お、そうだのーあのオルゴールを渡そうか」
「ありがとうございます……」
「本当に困ったものじゃの。わしらは後ろから捕まれたら主人を交代しなきゃならんからの～。まぁお互いさまじゃ。見事あの彼女を口説きなされ」
そういうと菊さんは奥へフヨフヨと空を飛びながら行ってしまった。

彼女を口説く？　ん？
「あの菊、なかなか気が利くんだよ。よくカップル未満のやつを見ると仕事を依頼して商品をただで渡すんだよ。あ、俺のことは気にしないでくれ。ちゃんとその分儲かるからな。伊達にあいつが商売の女神の使い魔じゃないってことだ」
うーん納得しないけど貰っておこう。
「ありがとうございます。ではまた今度機会があればきますね」
「まぁすぐかも知れないがね。そんじゃよい人生をー」
変わった人だなー。俺はそう思った。
……あ、急がないと

「遅いぞ」
「す、すみません。ちょっと女の子助けてたら……」
遅く来たのが不服だったのかちょっと顔に不機嫌さがでている。
エリエンヌさんがそう顔するとは思わなかった。
「エリー……私たちも遅かったのだから仕方ないと思うけど」
「仕方ない。今回は許そう……」
シュリスさんの言うことは聞くんですか……
「ではお姫様方。私がきちんと護衛しますね」
「よろしく頼む」
「ごめんなさいね。コウイチさん……」
そのあと雑談をしながら学園に戻った。

「エリエンヌさんいますか？」
俺は晩のご飯を食べ終わった後ここにきた。エリエンヌさんの部屋だ。
「ああ、開いてるから入ってくれ」
「失礼します」
「どうしたんだいきなりきて？」
「今日はどうもありがとうございますね」

「礼にはおよばない。そのなんだ……さっき公園ではすまないことをした……」
「いえ、気にしないでくださいよ」
俺は腰のバックパックからさっきもらったオルゴールをとりだす
「そ、それは……どうしてこれを？」
「少女があの店の子供で助けたから依頼料代わりにくれたんだ。俺がもらっても意味ないからさ。エリエンヌさん……もらってくれませんか？」
「ありがとう……本当に……」
涙を出している。いや本当は出してないのかもしれない。けどエリエンヌさんの中での母の姿が大きいことがわかる。
「いや感謝しないでくださいよ。するなら店主にね」
「うん……」
「それじゃ……また明日」
「また明日……」
俺はすこし逃げるように部屋から出た。うーむ明日からエリエンヌさんに会いづらいぞ……
でも会いたいとも思う自分もいる。複雑な気持ちだ……
部屋に入り俺はベッドに吸い込まれるように倒れ。すぐに深遠の中へと落ちていった。

第一章　第十一話　『お出かけ』（後書き）

今回は本当に遅くなってしまいましたが第１１話です。
一応ラストまでの流れは決めました。
まぁ完結目指してがんばりますので応援よろしくお願いします。

第一章　第十二話　『戦闘実習』

「そこまでっ！」
澄み渡った青空。最近あれだけ雨が降っていたのが嘘のように雲がない。
今日はやれなかった戦闘授業を行っている。基本は俺のような召喚されたやつが戦う感じだ。
殺したらダメなので俺は木刀でほかの魔物たちはマスターの命令で力をセーブして戦うようにしている。
召喚師たちはそれを興奮してみている。何が面白いのだか。お前たちが俺の代わりに前にでて戦えよ。
そして有名になりたいからって俺を狙うなよ。
それにしても木刀は少し違和感があって使いづらい……なんとかならないかな……
それで魔女の皆様は日陰でおしゃべりですか……いい身分ですね。はぁ……。
「はい、ご苦労様。飲み物持ってきてあげたわよ」
俺のマスターがどうしたわけか飲み物を持ってきてくれた。おかしいこんなに気がきく人だったか？
「ありがとう。さすがに疲れたからね」
「……コウイチ、ここ最近ありがとうね」
「俺なんかしたっけ？」
「疲れてるのに私のこととかして……」
「いや、気にしなくていいよ。俺がしたくてしただけだから」
「ん、それじゃがんばってね」
「りょーかい」
アイツやっぱり暑さで頭おかしくなってるんじゃないかな？
よしっとさて行くか
それにしてもこっちに来てから身体能力上がったのかな？　体が

今まで向こう以上に動かしやすいんだけど。
「おい！　てめぇ……クリスが召喚したやつだな？」
いかにもごつい……ってこういうやつは戦士の国に行ってこいよ。明らかに魔法使いって体格じゃないもん。
「親分！　あいつに負けたんです！」
なるほど部下の敵討ちか。
「俺の部下がお世話になったようだな？　俺と勝負しろ」
「いいですよ？」
教師に合図をし戦う許可をもらう。
「それではマナーにしたがって正しく戦ってくださいね」
相手は自分のしもべを召喚する。大きいゴーレムだった。
……確実にこれって物理攻撃効かないよね？
相手のゴーレムはゆっくりと攻撃していく。少し横にずれてそれを避ける。
相手より小さいのを利用し足元に回りこみ足に木刀でなぎ払う。
しかし明らかに木刀の硬度が足らずぶつかった瞬間に折れてしまう。
「どうだ兄貴のゴーレムは！　お前なんてへでもないんだよ！」
「まぁお前なんてただの人間だから仕方ないよな？」
そういって俺を嘲笑している親分と部下一。なら一気にやるか……あまりやりたくないんだけどな……。
「先生？　主人に魔法貰うのってありですよね？」
「ええ。相手にかける魔法じゃなければ問題ないです」
その言葉を聞き俺は勝利を確信する。
「マスター！　俺の木刀に火属性にしてくれ！」
「いいけど……何に使うの？　ゴーレムだから属性を火にしたところで……」
「いいから早く！」
なんか不機嫌になったが関係ない。マスターはしぶしぶ木刀を元の形に戻し火属性と鋼をコーティングする。

マスターからそれを受け取りゴーレムに向き合う。なにやら観客が増えてきた。
俺は近くにあった石を一個拾う。
「勝てるわけねぇよ。俺のゴーレムにはなぁ？　かけてもいいぜぇ？　俺はそうだなぁ……この魔法具でもかけるか」
余裕と顔に書いている。
周りの連中も何か賭けを始めたらしい。そして俺のほうにはクリスとシリエル、ファニアスの三人しかいない。
なるほど俺に賭けたのはこの三人か……
「なに賭けるんだぁ？　土下座でもしたら今ならまだ許すけど？」
「生憎、俺だけじゃ賭けるものはないんでね。賭けるのは俺と俺に賭けてくれた人の体でいいか？　もし俺が負けたら好きにしていいさ」
「な、なんだと！？」
ここまで自信満々なのが驚いているのだろう。
そして後ろでは不安そうに俺を見るマスター。
「勝てるの？」
「必ず」
「わたしはコウイチを信じるよー。かならずかてるさー」
「そうね……まぁ応援してるから」
「はぁ……シリエルとファニアスは楽天的……まぁ、賭けたからには責任とってよね」
「ああ」
風が一瞬強く吹いた。それが戦いの始まりだった。
「いけ！　ゴーレム！」
ゴーレムはさっきよりも速い速度で殴りかかる。俺はそれを後ろに避ける。俺が居た地点にはゴーレムの腕が刺さっている。
避けた後拾った石をゴーレムの手に投げる。一瞬よろめき隙ができる。
「燃えろ！　バーニング！！」

俺は上段に構えた木刀を思いっきり振り下ろす。斬撃から炎が出てゴーレムを覆う。
「そんな炎じゃ俺のゴーレムに傷をつけられねぇぞ！」
「ああ、元から傷つけるつもりはないしな」
「なんだと！？」
俺は近くにある噴水に向かって思いっきり木刀を投げた。
木刀が噴水にあたり噴水から思いっきり水がでてゴーレムにかかる。
「水だと？　それがなんになる？」
「知らないのか？　火で焼かれたものを水で一気に冷やすと脆くなるんだぜ？」
「な！？」
ゴーレムの体からパラパラと岩が欠けていく。
「それじゃ終わりだ。華仙流抜刀術箒木！！」
俺はゴーレムの体を全力で貫く。ゴーレムは脆くなっており鋼でコーティングされた木刀がドリルのように削り進んでいく。ゴーレムの体から脈を打ち続ける岩の心臓を抜き取る。
「これでチェックメイトだろ？」
俺は脈を打ち続ける岩の心臓を手に持ちそういう。確実な勝利宣言だろう。
「勝者！　コウイチ！」
教師がそういい。この戦いは俺の勝利となる。
「コウイチ……これを受け取れ。俺は負けたからな」
「いや正直いらないからいいよ。俺魔法使いじゃないから邪魔……」
「そ、そうか……邪魔かーはははは……グスン……」
あいつ当分立ち直れないかも……悪いことしたかも。

それから時間が過ぎ夜へ

「エリエンヌさんいくんですか？」

「ああ、任務だからな。さすがに学園の近くの敵は排除しなければ」
「いってらっしゃい」
「コウイチもがんばれ」
「え？　何をがんばるんです？」
「聞いていなかったか？　再来週の学園祭で生徒会の出し物の喫茶店あるからそれの衣装決めとかいろいろだが……」
「聞いていなかった……」
「まぁ……がんばってくれ。私はそういうの苦手だからな」
「りょ、了解です……」
なんか毎回面倒な役目を押し付けられている気がしてならない今日この頃。
まぁエリエンヌさんの仕事も忙しいけれどこっちのほうが大変な気が……
「安心してくれ。学園祭までには帰るからな。まぁ一週間くらいか。会長はいるからわからなくなったら会長に聞いてくれ」
「あ、はい……シュリスさんはどうなるんです？」
「生徒会の会計はあんまり戦闘しないからな。あと補助系がシュリスは主だからな……大規模な戦闘のときしかでないな……。予算の相談はよくしておいてくれ。予算が間に合わないとかになったらダメだからな。ふむ、時間だ。では」
そう言うと行ってしまった。いろいろ助けてくれたエリエンヌさんがいなくなるのは少しきついな……まぁがんばろう！　あ、仕事貰いに行かないと。

第一章　第十二話　『戦闘実習』（後書き）

はいはーい少し手抜きになったかも……
思いついたことがひとつ。夜に小説書くのは止めよう。
ネタが詰まってしまう

第一章　第十三話　『過去の傷、今の悲しみ』

「それはこっちに置いてくれ。あれは向こうの教室で使うため向こうに。この部分のお金は会計に聞いてくれ。飾りつけはもう少し華やかに。」

テキパキと指示をだしてる会長。やっぱりこういうのはすごいなーと思う。指示する人の鑑だろう。これなら女子にもてるのも納得がいく。なんでもできるからなあの人。

俺は今日も会場準備のため動く。生徒会の人数は思った以上に少なかった。９人しかいない。てっきり２０人ぐらい居るのかと思っていた。これじゃ毎日大忙しだろうと思う。

出し物のほかに看板作成、会場造り、ポスターの掲示、危険物の審査などなどあまりにも多すぎて目が回りそうだ。

けれども会長の指示で恐ろしいほど円滑に進んでいる。これも才能なんだなー。

「えっとこれはここから左方向に右向きにおいてください。あ、この件ですか。これはですね今業者と話しているので明日報告します」

シュリスさんもいつも以上にテキパキ動いている。って感心している場合じゃないか。まだ荷物運びは終わってないからなー。

俺は欠伸をぐっとこらえて荷物運びを再開する。というかこういうとき召喚士系って便利だよね。荷物を呼び出した魔物に運ばせれるから……

そんなこんなで昼は過ぎていく。一生懸命働くと時間が経つのを忘れてしまう。

俺はぐいっと軽くのびをし骨の音をならす。その音が仕事をしたと実感できて心地よかった。

「くそっぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！」

そんな俺は夜に叫びながら服をつめたい川の水で一生懸命洗っていた。
俺はマスターがまったく家事できないことを忘れていた。
この前から異常にやさしいと思ったがこのためか！
山積みにされている洗濯物。確実に一時間はかかるぞこれ。
俺は川の水の冷たさに耐えて洗っていく。
水が冷たいせいで汚れも落ちにくい。
朝の洗い場使えるときに洗濯物を出してほしかった……
「ふぅー」
一息入れる。しかし量はなかなか減らない。というか服どれだけあるのだ？　明らかにこんなに使わないだろう。
そういえば部屋にあったフラスコが倒れてたな。もしかしてそれで？
いやそれはないだろ。うん。いやそうだと信じたい。
危ない薬品が服についていないことを祈り洗う。
……マジでコワッ！

洗濯物も終わり泉に向かうことした。
空気が澄んでるからネットをつけて昼寝できるようにしておいたのだ。
どうせ泉には生徒も教師もあんまり来ないし静かだし俺にとってみればすばらしい場所だ。
そんなところに先約がいた。冷たいのに泉に入って震えている女性が……
一瞬寒さで震えているのかと思っていた。けど泣いて見える。
昼にあれだけの指示を出していた人とは思えないほど今は弱弱しい。
「シュリスさん……」
どうして泣いているのか俺にはわからない。けど俺は……シュリ

スさんに声をかけた。
なぜ声をかけたのかはわからない。でもひとつわかるっていることがある。
俺は……少しでもシュリスさんの助けになりたい。
「シュリスさんどうしたんですか？」
いきなり声をかけられてビックリしたのかビクッと体を震わせた。
「コウイチさん……ど、どうしてここに居るのですか？」
声を震わせながら俺に尋ねてくる。こちらを見ていないということはたぶん泣いているのだろう……
「シュリスさんこそどうしたんです？」
「わ、私は眠れなかったので頭を冷やしにきたんです。もう頭は冷えたので失礼しますね」
そう言うと急いでここを離れようとする。俺は帰ろうとするシュリスさんの腕をつかんだ。
「「あ」」
腕をつかんだとき強くつかみすぎてお互いに思いっきり転んでしまった。
「コウイチさん……どうして私なんかにかまうのです？」
「え？　いやなんとなくだけど……どうしても悲しそうに見えて」
「そうですか……ならコウイチさん、あなたにとって私はどう見えます」
いきなりの質問だった。俺にはどう見てたか……
「俺には一人で全部背負ってしまっている感じに見えるな」
素直にそう思った。悪いとは思わないが普通の人より背負いすぎていると思っている。
「そうですか」
図星だったのか少しビックリしているように見える。どうしたのだろうか、いつもと違う気が……
「コウイチさんは私の傷をもしよければ少し背負ってくれますか？」
「いいですよ。それで少しでもシュリスさんの重荷が減るのなら」

「なら聞いてください。私の過去を…」
シュリスさんは美しくとても綺麗な声で過去の記憶を紡ぎ始める
――――とある栄えている国がありました。
しかし貧富の差が激しくお金を持っている貴族はお金をさらに稼げましたがお金がない庶民はさらにお金が無くなるような国でした。
そう外見だけは美しい国です。私はその国のスラム街出身でした
その栄えていた国のスラム街では男の貴族が美しい娘を探し自分の屋敷にメイドという名の奴隷にされてしまうことが多かったのです。
女の子はそんなことを知らないので貴族の男たちがきたときによく媚をうるのです。自分の親などを救うために。
悲しいことですよね。少ない金額しか貰えないのに自分の娘を渡すのは。
私は母から守られました。お金なんかなくても私とともにいればいいと言ってくれました。
本当にお金はありませんがあの頃は本当に楽しい時代でした。今も楽しいのですがね。
コウイチさんはどうして私がここにいるのか不思議なのですか？
そうですね……この学園はスラム街の人間は入学できませんから……
私は……無理やり貴族の男に連れ去られました。隠していた母は目の前で殺され私は一人になりました。
私もその場で死のうと思い舌を噛み切りました。けれども治癒魔法ですぐに戻ってしまいます。
ただただ痛いだけ死のうと思っても死ねなかったのです。私は涙を流していましたがそのうち涙さえ出なくなってしまいました。
私はその貴族の屋敷で働かされました。
もう親がいない私はまじめに仕事なんてしませんでした。そうでしょう？　しても無意味ならしなくていいですから。

脱走も何度もしました。本当に数え切れないぐらい
そして毎回毎回呼び出されて鞭でぶたれ治癒魔法で傷を癒されまたぶたれ……
私は嫌になって……家宝の壺を壊しました……
殺してくれる。やっとこの苦しみからのがれる……家宝を壊したのだ。殺すのは当然だろう。
けれども殺さなかった……あの男の炎魔法を何度も何度も受け……そして背中にもう癒えぬほどの火傷を負いました。
私はもう脱走を考えなくなりました。何度やっても無駄……背中にこんな傷があればだれもが軽蔑するだろう……
そう私なんて人間はこの人にしかもう仕えることしかできないのだろう。
その一ヵ月後――
貴族の男は国王の警備隊につかまりました。
どうやら国王が死に王の第二子が継いだことにより国政が大きく変わったらしいのです。
一律の税が貴族の負担を大きく庶民の負担を少なくし格差を無くそうとしたのです。
その手始めに行われたのが奴隷商人の捕縛、そして品物になっている人の救出だったそうです。
そのあと身寄りが無い私をとある貴族の方が養子にしてくれました。
とある貴族の方がやさしく頭をなでてくれて私はやっとで地獄が終わったと感じさせてくれました。
傷のこともその貴族の人がやった訳でもないのに謝ってくれました。
それが申し訳なくて地獄から救ってくれた貴族のかたのためにゼロから猛勉強をしこの学園にきたのです。
「以上です……」

「最後にいい人の養子になれてよかったですね……」
「ええ……」
「けど――」
「まだなにかあるのですか？」
ひとつ答えてないことがあった。一番重要なことだ。
「なぜこの泉で泣いていたの？」
俺の一番の疑問。この過去を教えてくれたということは教えてくれるのだろうが聞かないと言わない可能性がある。一人で抱え込んでしまって……
「そ、それは」
「俺の予想では……過去話に関係あるんだな」
言うのを躊躇ったが俺の真剣な眼に負けたのか深呼吸を一回し話し始める。
「今日、寮に帰ったら部屋にひとつの張り紙がありました。『あなたに復讐を』と一行書いてあるだけの紙でした」
「それなら別に気にすることは――」
「ええ、それだけなら気にする必要はないんです」
すっと丸く透明な珠を差し出した。その珠からシュリスさんの背中の傷跡の映像がでてきた。
「こ、これは？」
「映像を写す魔法珠です。もうひとつあるのですがこれは……もっとひどいのでさすがに……」
たぶん想像できる……きっともうひとつは……過去の……
「男には撫で回すように見られ友人には見捨てられました……きっとエリーも差別すると思いますし……私は……もう道化みたいなものですよね……。恩返しももうできませんよね……。どうせ……あなたも私を見捨てるのですね？　あはははは……はは……」
「……シュリスさん」
「なんですか？　罵るんですか……別にいいですよ？　慣れてますから。殴ってもいいですよ」

「ごめん……」
「どうして謝るのですか……あなたが悪いわけでは」
「俺は殴りもしない！　罵りもしない！　絶対……絶対シュリスさんを救う！」
「そんなこと……無理ですよ……」
「いーや！　俺にちょっとした案があるんだ。でも必ず救える。諦めるなんて愚の骨頂だ！　こんな噂なんてすぐに消せるさ！」
「は、はい！」
俺の空威張りで少し元気が出たのだろう。少し笑顔で答えてくれた。
「諦めないぜーもしこれで解決したらモテモテになりそうだからな！」
「それは無いと思いますね」
お互い笑いあいながら話をする。とりあえず今だけでも忘れてほしいとおもう
俺の仕事はまず噂をこれ以上広げないこと。これは早急だな。しかしもう殆ど広まっているだろう。会長がいれば何とかなるのだが今日は生徒会室で泊り込みだったはず……エリエンヌさんは魔物狩りでいない。なるほど……犯人はこれを狙ったのか。
さてと……あるやつらに頼ってみるか。きっと力を貸してくれる。でももし失敗したらシュリスさんは……精神が壊れてしまうかもしれない。精神攻撃とは……復讐者もなかなかやるな……
なるべく学園祭までにはケリをつけないとな。みんなで笑顔で学園祭を迎えたいから……。

第一章　第十三話　『過去の傷、今の悲しみ』（後書き）

はいー相変わらず更新日がつかめない杉岡ですよん。
今回はシュリスさん救出しようぜという話ですね。
は～文章能力がほしい……
第一章はそろそろ終わります。
はい終わります。まぁ場面の区切り程度ですがね。
第二章としてまたでます。
計画では第五章で完結ですね。
これからも見てくださることを願っています。
そしてで、できれば感想を……

第一章　第十四話　『作戦開始』

「というわけだ。手伝ってくれるか？」
「もちろんだとも！　学園のアイドルのシュリス様を汚すなんて言語道断！　あんなものただの捏造だ！」
「兄者！　俺たちの力をみせてやろうぞぉぉおおお！」
「おう弟よ！！！」

俺が頼ったのはビクトリー兄弟だ。まぁ他の人でもよかったがこういうのの方があやつ――げふんげふん。協力してくれると思ったからだ
あとなんかこういうやつって魔法具の扱いうまそうだから。もしかしたら……
「ひとつ聞きたいのですが魔宝珠の映像は書き換えができるか？」
「うん、一応できる。あんまり知られてないけどね～やり方は簡単、自分の思念した意識をこの魔宝珠に刷り込むこと。そうすればどんなものでも映像は書きかえれる」
「なら、その映像を偽の映像とすることはできないか？」
「がんばればできるだろう。しかしそれをやるには少し大変だな…」
「大変？」
「ああ、まずひとつあの映像の広まり具合。広まりすぎている場合は一個程度じゃ確実に信用されない。けどその日付とその映像の日付が合って時間も合っていればどっちが本物？　ということになるからな」
「そうだな。うーむ、エリエンヌさんが居ればすぐに騒動も静まると思うんだけどなー。ん？　そういえばビク兄が把握しているのって一番最近のでいつだ？」
「ビク兄って……まぁいいや。俺が知っている一番日付が新しいのは二週間くらいまえかな」

「その日なら俺とエリエンヌさんがシュリスさんと行動してたな」
「……なんか無性に腹立ってきた」
「俺もだ兄者」
「いやそれは置いておこう！　さぁ魔宝珠をどうするか考えよう！」
魔宝珠っていっても俺はそんなものを売っている場所なんて検討もつかない……
この前行った時は主に日用品を売っているところと服屋を教えてもらったからな。んーそれらしいお店……やっぱりあんまり思いつかない。
「お金なら俺たちが出せるんだがな……普通の魔法具店の場合はやはり在庫切れということがあるからな……もしかしたらアンティークショップとかになら売っているかもしれないな。けどそれでも売ってる確率は少ないと思う」
「あ……」
そういえばひとつだけ心当たりがあった。あの場所だ……あそこならもしかしたら……
「ちょっと心当たりがあるかもしれない！」
「ん？　そうなのかー？」
「ちょっと行ってくる！」
俺は商店街に急いで向かうことにする。後ろから声がするが助けられると思うと気分が高揚してその声が耳までとどかない。

「兄者……確かコウイチってお金もってないよね……」
「ああ、お金どうするんだろう」

「さてここか……」
幸いここまでの道は覚えていた。一回行ったことがあると案外道を覚えているようだ。

チリンチリーン
「いらっしゃい。お、あのときの坊主か。久しぶりといいたいところだけどそこまでじゃないな」
「おーおぬしはー。仲は進展したかのー？」
「いえ、まったく――って今日はちょっと聞きたいことが」
俺はこれまでの経緯を話す。まぁ過去話の部分は伏せたが。
「ふむ……なるほどのーようわかった」
「それじゃ！」
「だめじゃ」
「いいんじゃないか？　ひとつ未使用なのあるし」
「だーめーじゃ。ひとつしかないからダメなのじゃ！」
どうやらひとつしか魔宝珠が無いため売ってくれないらしい。
「お菊がこの前使わなければそんなことにはならなかったんじゃないのか？」
「うう、そこは言うな！　ぼけ！」
「あ、あの～」
「お、すまんすまん。さすがに売り物が一個しかないからのう。というわけでまた条件を提示するのじゃ。お金もいらん」
「今回はどういうものですか？」
「琥珀の洞窟にある心静酒というものを持ってきてほしいのじゃ」
しんせいしゅ？　酒の一種かな？
「どんなものです？」
「ああ、それは俺から説明する。その心静酒ってーのは酒の一種なのだがちと特殊なんだ」
「特殊？」
「ああ、普通酒ってーものは気分を高揚させるものだ。冬山では遭難時、酒はすごく大事だ。遭難してしまったら気分が下がるだろう？　しかも体温も下がる。けど酒を飲むことで気分が高揚し体温も上昇する。このため生き残れる確立も上がるということだ。けど心静酒はその名の通り気分をリラックスさせる効能がありしかも体も

温まる。このため王室や不眠症の人などにもよく使われるんだ。けど今回あんまり入荷できなくてな。今困っているんだ」
「ということで今回は物々交換でよいじゃろ」
「いいですよ。でもひとつ」
「なんじゃ？」
「ここってアンティークショップじゃないんですか？」
「ああ、外観と店の間取りがアンティークショップと似ているのじゃ。まったく」
「そういうなよーお菊ー。まぁもともと行商人みたいなものからだったんだ。友人が店をくれたからここに店を作ったんだ。この店を簡単に説明すると何でも屋だな。基本種類問わず入荷してるしな」
「そうなんですか」
「ふむ、ではこの瓶に入れてきてくれ」
「はい」
少し大きめの瓶と地図を手渡された。５リットルぐらい入るだろうか。
「あれ？　一個いいのですか？」
「もっと多くほしいのは本音なのじゃがさすがにこれ一本で魔宝珠と同じ値段だからしかたなかろう」
なるほど。こういうのはマメなんだな。でも……
「いえ、もっと採ってきます。なので何個ぐらいですか？」
「ふむぅ……」
「いいじゃねーか。坊主もこういってるんだしよ」
「そうじゃのー今の時期では強力なモンスターも居ないはずだからの……。瓶１０個分お願いするのじゃ。カートも貸そう」
「はい！　分かりました！」
「その意気じゃ。ではがんばって参れ」
俺はカートを借りそれを押して地図に書いてある場所向かった。
「お菊……お前これを狙ったんだろう」

「何のことかのー」
心静酒はとても高価なもので今回の魔宝珠を上回る価格なのだ。
何故そこまでなのか――
心静酒はモンスターたちにも重要なものでそれを守護するモンスターがいるのだ。
そのモンスターが弱いならいいのだが並の冒険者では敵わない強さをもっている。
「さすがにあの小僧には無理なんじゃないか？」
俺は素直にそう思った。運動神経がいいただの少年に見えるのだ。
そう普通の少年に――
「そうでもないのじゃ。あの少年には大きな力が存在しているのは明らかなんでのー」
考えを見通したようにお菊は答える。
「そもそもあの少年は魔法使いではないのがわからんか？」
「え？　魔法使いじゃないのか？」
「ふむ、そうなのじゃ。魔法使いにしては服が軽装すぎるし杖も持っておらん。それなのにここにいるのはおかしい。なら何でいるのかの？　とおもったのじゃが簡単に想像できたのじゃ」
「どういうことだ？」
「もし、あの童が召喚されたものだとしたらどう思うかの？」
「召喚……でも異世界は魔物しかいないんじゃないのか？」
「そうだと思ったのじゃが実は違うのかもしれんの。他の世界にも同じような存在があるのかもしれんな」
「ならお菊はあの坊主の能力を信じてこれを頼んだのか？」
「うむ」
「帰ってきてくれるといいな」
「いやあの童なら帰ってこよう。さてこの魔宝珠を少し磨いておこうかの」
「それか？」
お菊は魔宝珠を磨き始める。は～たまには店番をしてくれればい

いのにと思うがやめておこう。確実に問題がおきそうだ。
チリンチリーン
新しい客が来たようだ。さて……気持ちも少し切り替えないと
「いらっしゃいませ、本日はどの様な品をご所望で？」

第一章　第十四話　『作戦開始』（後書き）

すいません……今回だいぶ更新が遅くなってしまいました。
原因は……アルトネリコ３です。
今作はヒロインよりもヒロインの別人格が好みです。
ヒロインは夢見がちな女の子とマゾっ子と天然アゲパン娘（ネタバレ？）だったな。
天然アゲパン娘はまだよかったけどね……
そして驚きは眼鏡で同性の武器屋の人に好かれている先生がふんどしになるとは……
ええ、笑ってしまいました。さすがアルトネリコ……不意打ちは得意ということか。
そして今月は無限のフロンティアの新作とひぐらしが出ます！　お、お金が……
というので今月も更新が遅くなるかもしれません。期待してくれてる人には申し訳ないです。
それではまた次の話で～であであ
追記
もしかしたら新作を書くかもしれません。ロボットもので。
無限のフロンティア発売記念ということで。
もし投稿したらそのときは見てくださるとうれしいです

第一章　第十五話『祭りの前の静けさ』

手渡された地図には道すじが詳しく書いてあったがけれども難点が存在していた。
それはとても遠いことだった。明らかに一日では間に合わない。
「困ったな……」
カートの後ろになにか珠が置いていた。これなんだろう
魔宝珠だけど……なんか大きさも色も変わってるな。中にはドラゴンのような模様が描かれている。
ペタペタ……触ってみてもなにも起こらない。
「これ何のために？」
その瞬間その魔宝珠に光があふれ始める。
「え、え？」
光が膨張していき眩しく俺は目を瞑る。
光が次第に止み俺の前には一体の大型のワイバーンがいた。
「こ、これは……ええっとぉー」
ワイバーンはまるでさっさと背中に乗れと言わんばかりに首を忙しなく振る。
たぶん移動手段はこれを使えということか。

「うわぁあああああ！！」
スピードが速くとても重い風が俺を襲う。吹き飛ばされそうになるのを手綱を握り耐える。
乗馬マシーンを一回体験してみてきつかったがこれはその倍や5倍ぐらいはきつい。人間という人種が存在するためのありとあらゆるものがなくなりそうだった。しかも寒い！　気圧が違うせいでここまで違うのか……
次第にワイバーンが速度を落としていく。どうやら目的についたようだ。やっとで地面に帰れる！　やっぱり人は大地だよね！　そ

んなことを考えていると急に浮遊感が襲った。
「へ？」
急にワイバーンが消えて俺は落下し始める。カートは安定感を保ちながら下に落ちていっている。そんな中俺は冷静に見えるがすごく焦っている。確実にこれ死にそうな高さだもん。
「この手につかまれ！」
そのときどこからともなく手が差し出される。俺はその手を掴んだ。そして腕が抜けそうになるほど引っ張られた。
「いったぁぁあああ！！」
「我慢しろ」
その人は俺のカートも回収する。そしてゆっくりと地面に降りてゆく。
「大丈夫か」
「ええ、あなたに引っ張られた腕以外なんともありません……」
「あう……ごめんにゃさい……」
いやいやちょっとぉぉ！！　命の恩人を責めたらダメだろうがぁあああ！！
「あ、こちらこそすみません！！　わざわざ助けてもらったのに」
「いいにゃ……別に気にしてにゃいにゃ。借りだってあるし……」
あれ？　どっかで聞いたことあるな。あと借り……？
「ああ、強姦魔か」
「ちがうにゃぁあああ！！」
「だってエリエンヌさんのこと襲おうとしたから……」
「にゅ～」
やっぱりあのときの猫か……見た目が大人の女性になってるのは大切なものの力かな？
はてさて？　この姿も前に見たことあるな？
「あ、あの学者と戦ってるときに手伝ってくれたの君だったのか」
「そうにゃーところで……エリエンヌさんと連れの可愛い女の子どこにゃ？」

こいつ……百合趣味があるのか？
「残念だがいないんだ」
「小僧に興味ないからさっさと帰れにゃ」
「扱いヒドッ！！」
俺の存在価値ってエリエンヌさんとシュリスさんのお供ですか……
「でも俺……洞窟で心静酒採らないと」
「わけありなのかにゃ？」
「ああ、それも大事な」
そうだ。こんなところで話してる場合じゃない。さっさと採りに行かないと
「今はやめたほうがいいにゃ。近くの村で祭りが行われている。その祭りで村の人たちは神経尖らせているからにゃ」
「え……」
「あの村の付近の洞窟でとれる心静酒はすごく高価なのはしっているにゃ？」
確か……魔宝珠と同じぐらいの値段だった気が……
「ええ、映像の魔宝珠と同じくらいの値段だと」
「バカ！　それ以上にゃ！！　なぜって？　それはあの洞窟には魔物がいるからにゃー」
「値段はさておき、魔物ですか？」
「そうにゃ、魔物は強く並大抵じゃ採りにいけないのにゃ。村人でも魔物から『分けてもらって』祭りをおこなうのにゃ。それなのに……譲ってもらえるわけないにゃ」
そういうと猫娘は俺の腕を引っ張りどこかに連れて行こうとする
「えっと……どこへ行くんです？」
「村にゃー。理由はわからないけど『どうしても必要』なんでしょ？　明日洞窟に行って魔物に交渉しにいこうにゃ」
「なるほど分けてもらうんですね」
「そーいうことにゃ」

「メッチャガンつけられるんですが」
「気にしちゃ生きていけないにゃー」
周りの人たちが俺達のことをかなりにらんでいる。まぁ祭りでしかも大切なもの祭ってるんだししかたないか。
そんな視線を受けながら宿屋に向かう。
「いらっしゃいませ」
宿屋についたら優しげなおばあさんがいた。なんか睨まれなくて嬉しい。
「えっと部屋借りたいのですが」
「いいですよ。えっとー何名さまかのう？」
「俺と連れの女性の二人です」
「そうかいそうかい。ここにはどうした理由できたのかい？」
「えっと俺たちは旅人なんですが目的地はアイシラ魔法学園なのですがここでお祭りがあると聞いてついでに寄ってきました」
「なるほどねぇ～それは災難だったね」
「災難？」
「ほら村の人たちの目がきつかっただろ？　それはね盗賊が旅人に成りすまして心静酒を盗むのをさせないためだったのさ。いつもはみんないい人なんだがねぇ～」
「なるほど。でも俺は気にしてませんよ」
「それはよかった。祭りが始まるまではみんな睨むかもしれないが祭りの始めの酒交り《さけまじわり》が終わったら普通にもどるからさ。見損なわないでおくれよ」
「ええ」

「ふにゅ～疲れた～」
「大丈夫ですか？」
「動きたくにゃい～」
どうやらあのあと洞窟までの道のりを聞いて回ったらしいのだが収穫はゼロだったらしい。それどころか賊と間違われたとか。

「とりあえずさっさと寝ましょう」
「襲ったらだめにゃぞ」
「襲いませんよ」
「枯れてるにゃ～」
「うっさい」
猫にからかわれた。なんかイラつく。しかし隣で気持ちよさそうに寝息を立てていた。なんか怒るにも怒れないっていうかこうやってるとほんと可愛いいのに
そんなことを考えていたらいつの間にか寝てたらしく朝になっていた。

第一章　第十五話『祭りの前の静けさ』（後書き）

久しぶりの更新！！　ついでに『戦闘実習』も少し内容変えました！　さすがにゴーレムを一撃で殺すのは無理というものがあるのでいろいろ使ってみました！

第一章　第十六話　『祭りの始まり』

「さてそろそろいくにゃん」
「ええ」
俺と猫娘は荷物を纏め朝早くに洞窟に向かうことにした。
この村の近くに洞窟は存在する。だいたい距離は１．５ｋｍぐらいの距離らしい。歩いて向かうってもすぐそこの距離だ。
「それじゃお宝目指してレッツラゴー！　にゃん」
「おー」

～数分後～

「ここがその洞窟だにゃ」
「なんか凄く飛びませんでしたか？」
「ん？　気のせいじゃないかにゃ？」
「そう……ですね」
洞窟を歩いていく。ほの暗いが光が必要でもない。なんかこういう風に歩いていると前の時が思い出す。あの吐き気は嫌だけど。
歩いているとふと広い空間にでた。そこにはなにか大柄のタマゴがあった。
「これなんですか？」
「うーんトロールとかかにゃ？」
「でもそういうのって哺乳類じゃないのか？」
「ん？　哺乳類でも卵から孵化するのって結構いるにゃんよ」
「え？」
「たとえばリザードマン。爬虫類に見えるけどあれ哺乳類だにゃん」
「ええ！？」
「ほかにもあるから今度調べておくといいにゃ」
「そうしておきます。ならここはトロールの巣なのか？」

「いいや、このタマゴは初めて見るのにゃ。でもどこかで見たことがあるような気もするにゃん」
「どっちなんですか……」
「まあいいにゃん。さーてどこから探そうかにゃー……え……」
「どうしたんですか？」
空を見上げながら思考していた猫娘は声を詰まらせる。俺もその視線を追って空を見上げるとそこには大きな影があった。白より純白といってもいい鱗を持つ大型のモンスター。俺の見間違えじゃなければ……アレは……
「こ、こ、ここはシルバードラゴンの巣にゃぁぁああ！！」
「やっぱりかぁぁああ！！」
『人間どもよ。なんのために来た。タマゴを奪いに来たのか』
篭るように響く声が俺の足を止めさせる。猫娘は無我夢中に走り回って壁にぶつかり気絶していた。
『そうなのか？』
失神してしまいそうなのを堪えて俺は向き合う
「いいえ、違います！　俺は……俺は！　友達の名誉を取り戻すために心静酒をもらいに来たのです！」
『ふむ、その目は嘘をついているには見えないな。心静酒は準備できる。しかし人間は信用は出来ないのだ。だから瓶を置いていけ。それに入れて入り口のところに置いておく。時間は明日の早朝だ。分かったか』
「はい！　それでいいです！」
『ならさっさと立ち去れ。もう少しで我が子が孵化するのだ。人間には見られたくない』
「はい。わかりました」

「というわけでなんとかもらえることになりました」
「意外に肝すわっとるにゃー」
宿屋にもどり成果を聞かせた。さっきまで気絶していたのだ。説

明はしておかないとだめだろう。
「おやおやまぁ。がんばってものですなぁ。あのドラゴン様と話すなんて」
「え、凄いことなんですか？　そりゃ勇気は入りましたが」
「ええ、素直で真剣な若者となら話すそうですな。ドラゴン様の体はどれも高額で取引される。どうしても下心が出てしまうのにのー」
「そんなに凄いんですか？」
「ふむ、そうですなー。たぶんこの宿屋の５０年分ぐらいになると思いますがね」
「そうなんですか！？　でもどうでもいっか。そんなに金は正直いらないし。なんか現実味がないや」
「そうにゃ。それならまだ樹蚕で絹狙った方が現実味がある稼ぎ方だにゃん」
「ほほほ、そうですなー」
「樹蚕ってなんですか？」
「そのまんまの意味なんですよ。樹に住み着いている大きな大きな蚕です」
「ほへー」
「祭りもそろそろでございますな。では楽しんで行ってらっしゃいね」
「ええ」
「いってくるにゃん」
俺たちは祭りに行く。この世界にきてからの祭りだ。なんだか凄くわくわくしてきたな。

（おいドラゴンのタマゴはやべえって）
（けれどもあれがありゃ、俺たちは大金持ちだ）
（そうだが……）
（俺はもう嫌なんだよ！　都に行きたいんだ）
（そ、そうだな！）

（安心しろ。見つかってもあのドラゴンは攻撃できない。なぜならタマゴまで巻き込むからな）
（なるほどそれならいけるな！）
（だろう。だろう）
楽しい祭りとは違う祭りが始まろうとしていた。

「にゃー……人間の祭りって不思議だにゃ」
「そうか？　それにしても俺の世界の盆祭りみたいな感じで懐かしいなー」
「俺の世界？　どういうことにゃ？」
「あー言ってなかったけ？」
「言ってたかもしれないけど忘れたにゃ」
「そうか。いや俺は別の世界から来たんだよね。平行世界って言うのかな？　そんな感じかな？　えっとなんか召喚術みたいなので呼び出されたんだよね」
「にゃ、にゃ……」
「どうした？」
「別世界の人間を呼ぶなんて……その主人はかなり凄いんにゃねー」
「いやいや、現時点では能力は上から数えて５０ぐらいらしいからあんまりすごく無い気がするけど」
「……潜在能力もあるだにゃきっと。そういえばなんか変わった能力つかなかったにゃ？」
「うーん、特には体が軽くなったのしか無いかな？」
「にゃー……」
「あ、そういえば体乗っ取られることは結構あったかも」
「乗っ取られる？」
「なんか大きな意志って言うのかな。飲み込まれる感じで俺だけど俺じゃない？　はは、なんて言えばいいのかな？」
「まあいいにゃー。たのしもうにゃー」
「ですねー」

なんか恥ずかしいな。女といっても市としか行ったことないし……あーなんかなー
「これおいしいにゃ！　一緒に食べるにゃー」
いろいろ屋台を周る。金魚すくいの近くで猫娘は足をとめた
「金魚は食べないでくださいね」
「た、食べるわけないのにゃ」
「いやいや、動揺しないでくださいよ！」
「ひよこは食べれるのか？」
「いやムリですから」
「お！　お兄さん。焼きひよこ一つ食べていかないかい？」
「親父さんひよこ掬いの近くでそんなものを出さないでくださいよ！」
「だっはっは。冗談だ。どうだじゃが芋の丸焼き食わないか？」
「二つお願いします。あ、片方はぬるめで」
「あいよ！　彼女さんは猫舌なのかい？」
「い、いや彼女じゃないですから！」
「そーかいそーかい。まあ青春していきな。昨日はすまんな。気が立ってな」
「いえいえ。仕方ないですよ」
「お待ち！　兄さんは熱いうちに食ってくれよ？」
「当たり前！」
「ぬーどこに行ってたにゃ？」
「いやずっとここにいたし」
「ふーん」
「まあこれでも食べて気取り直して」
「む、仕方ない無いにゃ」
「どこに行きますか」
「的当てなんてどうにゃ？」
「いいですねー」
そんな感じに時間は過ぎていって祭りは終盤に差し掛かった。

「もうそろそろ終わりですね」
「もっと食べたいのにゃ」
「まだ食えるのかい！」
コントをしているとき近くが騒がしくなった。なにかあったらしい。

「なんだあれ！」
「銀色の太陽？　いや違うシルバードラゴン！？」

「な、なんで！！」
「どうなっているんだにゃ」
ドラゴンは顔は見えなくても明らかに機嫌を悪くしていた。どう見てもこの村の人々を殺してしまいそうだ。なにが起きているんだ……

第一章　第十六話　『祭りの始まり』（後書き）

生きてます！
ここ最近なかなか書ける時間がなくて……いえ違います決してゲームやって書く気がなかったわけでは。
とりあえず第一章はもうそろそろ終わります。あと大体7話ぐらいですかね。
二章も比較的練れたのでなるべく早くｕｐ出来ると思いますね

第一章　第十七話『人攫いは血祭りに』（前書き）

グロ？注意！

第一章　第十七話『人攫いは血祭りに』

「村人の皆さん！　下がってください！」
「あ、あんたはどうすんだ？」
「足止めをします。理由も聞きたいので」
「ドラゴンは人間と違って理由もなく襲わないのにゃ。きっとなんかあるはずにゃ」
　上空から急に降下してきたドラゴンの攻撃を刀で防ぐ。
　けれども刀は攻撃用の武器だ。守りなんかに少しも適していない。簡単に弾かれそうになる。市曰くＲＰＧで最強と恐れられているモンスター。刃を踏んだはずなのに皮膚を貫かず刀をを刃毀れさせるなんて。
『裏切ったのか！　人間！』
「なんのことです？」
『タマゴを盗んだだろうが！』
「ん……タマゴ？」
「どうしたのにゃ。これは悪いことにゃ。早く返すにゃ！　丸焼きは嫌にゃー！」
「自分とってない」
『しらばっくれるのか！』
「そもそもとってたらここで足止めなんて考えないと思うんですが」
『……それもそうだが』
　……思った。このドラゴンって少し天然じゃないかな？　いや、だってここで足止めするのって盗賊どもの手下とかもするんじゃない？　自分は村人逃がすためだけど。
『けれども我のタマゴを奪った奴がいるのだ！』
「そうだな……でもあの大きさだからそこまで素早く移動できないと思うんだけどな」
「そうにゃ。うーん。荷馬車を使ったのかもしれないにゃ」

荷馬車か。確かにこの世界なら荷馬車しか運ぶ手段はないな。飛行機とか列車とかないし船はあるかもしれないけど、ここは平原のところだから海は近くないしな。ワイバーンだとアレほどの荷物を持つのは無理だと思う。
「けれども荷馬車じゃ追いつけないと思うけど」
「いや普通に馬を使えばいいにゃん」
「でも相手も馬……」
「このバカ……荷馬車は遅いのにゃ」
そうなのか？　いやでも
「よく考えるにゃ。タマゴを奪ったやつらはタマゴを傷つけたくない。それは分かるにゃ？」
「はい」
「だからゆっくりいく必要性があるにゃ。そして荷馬車は確かに速いようにおもえるけど実質荷物を運ぶから走るよりもやや速い程度で楽なだけなのにゃ。だからこちらがフルスピードで馬を走らせれば間に合うのにゃ」
「なるほど」
「というわけで馬をもらうのにゃ」
「もらえますかね」
「怒りを静めるために馬を謙譲するって言えばくれるにゃ」
『我もついていっていいか？』
「いいですけど目立ちますよ」
『なに。方法がないわけでもない』
ドラゴンは何かを唱える。魔方陣が現れ煙があたりを包み込む。
霧が晴れた後を見るとそこには女の人が立っていた。
「ふむ人間化も久しぶりじゃの」
「えっとドラゴンですよね？」
「ああ。我のことはシルと呼んでくれの」
「え、ええ分かりましたシルさん。自分は幸一です」
「にゃーめんどくさいからわたしゃシリエルでいいにゃん。それに

してもシルバードラゴンのシルバーをとったのかにゃ。短調的すぎにゃいか？」
「我は名前が要らんのだ。けれども不便だろう。だからの」
「まあそんなことはあとでにするかにゃ。今は急がないとにゃ」
お前が言ったんだろ。といいたかったが今言うとさらに時間ロスするだろう。黙っていることにした。
「ふむ、そうだな。我の可愛い可愛い娘を渡すわけにはいかんのじゃ」
「いやいやタマゴでわかるんですか？」
「娘のほうがいいのじゃ。息子より可愛いだろう。む、でも息子でも可愛いだろうの」
この親バカ候補は無視しておこう。なんか話進まない気がするから
「けれどもどっちに行ったのか分かるんですか？」
「ここから街道を通ってまっすぐ行くと大きな都があるのにゃ。ここ近辺では売るにはそこしかないのにゃ」
「なら早速行こうか」
「にゃーにゃー」

「よしここまでくればいいだろう。これで俺たちは大金持ちだ！」
「そうだな！」
俺たちは笑っていた。
「またんか！　タマゴを返すのじゃ！」
「な、なんだあいつ？　結構な美人だけど」
「たぶんあの村にきていた冒険者だろ。村長にでも頼まれてきたんだろ？」
「なるほどな。な、ならさ　タマゴを人質にしてあの女やっちまおうぜ。へへへ」
「そ、そうだな。あんなエロイ胸をゆらして……」
俺たちは後ろから来る美人さんのほうを見て話し始める
「おいお前！　止まれ！　タマゴがどうなってもいいのか？」

「ぬぬ！　卑怯な……」
「安心しろ。俺たちも止まってやるさ」
「約束だぞ……」
すぐに止まった。なんだ物分りがいいな。どっかの貴族のやつか？
俺たちも馬車をとめる。そして彼女に近づく。
「いい顔とスタイルしてるじゃねぇか」
「触るな無礼者！」
「いいのかなー？　そんなこと言って。タマゴ壊しちゃうよー？」
「何が望みじゃ！」
「な～に……お前とヤリたいんだ」

「あれ、やばくない？」
「そうにゃーでももう少しひきつけないと届かないのにゃ」
「いやいやもう体が触れ合ってんだけど」
二人で双眼鏡を見ながら喋る。まったくこれは酷いな。なんか人間の悪のところが見えて気持ち悪い
「ど、どうするにゃ！　行って殺すにゃ？」
「ダメだ！　そうした場合片方にタマゴを……」
「どうしようにゃ……。片方囮でその間に片方が」
「ダメだ。時間のロスがかかりすぎる」
「どうしよにゃー！」
「まったくシルさんが素直に止まるとは。計算が狂ったな。どうするべきか…」
考えているとふと耳鳴りがし声が聞こえる
『仕方ない。俺に代われ』
「お、お前は……」
『急いでるなら早くしろ』
「えっと何すれば」
『は～…』
あきれられた！？

『体を楽にするだけでいい』
「え、えっと力を抜くんだよね」
『ああ、そうしたら俺が自分で出てこれる』
体の力を抜く。その瞬間激しいめまいがおきそのあと吐き気がこみ上げてきた。
『深呼吸をしろ。精神を落ち着かせろ。乗っ取るつもりは無い』
声が響く。深呼吸をする。すると少しは楽になった気がする。
『さてーーーー』
「行こうか」

「どうしたのにゃ？」
「なんでもない。俺に任せておけ」
「にゃ？？」
俺は亜空間武器庫を召喚する。中にあるブリューナクを取り出す。
「さて、加速」
地面を炎で爆発させる。その衝撃を利用し俺はあいつらに接近する。
「あれ……だれにゃ？」

「お前がおとなしくやらせてくれれば卵は返してやる」
「ぬ……我は……我は……」
「邪魔だボケ」
そこで突っ立てる男とシルに槍を向ける。男は逃げ出したのだが俺にとってはそのほうが好都合だった。
「聞いておけ。こいつは俺の女だ。誰も手だすなよ。下がってろよ。シル」
俺はブリューナクを投げる。その穂先は分裂し男に襲い掛かる。
「ひ、ひぃぃ！！」
あたった穂先が逃げる男を切り裂く。一振りが幾重もの刃になり体を傷つける。四肢はもうズタズタになっており一生立てないだろ

う。いや生きていれば奇跡だな。
「お主は誰じゃ？」
「もう忘れたのか？　つれないな」
「いやしかしじゃな。そんな血のような深紅の髪で獅子のような髪型……ぬ、お、お主コウイチか！？　顔のパーツはそこまで変わってないがその髪どうしたのじゃ」
「あったりー。でも本当は幸一の体を借りている神様だけどね。変化すると一部分だけ変わるんだ。だからこんな髪」
「ぬ、そういえばその髪はヘパイストスかの。懐かしいの。しかしな……おかしくないかの？　そもそも神が人間の器に入ることが出来ないのじゃ。小さすぎてな。それなのにおぬしのようなオリュンポスの神が入れるとは」
「それはあとで話すよ。気づかれるからな」
俺はやつの荷馬車に近寄った。
「お、おまえ……卵がどうなってもいいのか！？」
「ああ、いい」
「な、何だって……」
当たり前だ。なにせ……
「俺には関係ないことだからな」
「な、なんだよお前。金もいらねぇのか！？」
「ああ、必要ないね。最低限寝るところさえあれば俺は十分だ」
俺は手に持っているブリューナクを奴に向ける。
「この槍は投げると広範囲に拡散する。卵壊していいと思わないと使えないさ」
「な、なんだよ……これでもくらえ！」
奴が魔法札を投げてきた。魔法札といっても下級のものだ。投げると低級魔法に変化して相手を襲うものだ。けれどもこいつが投げたのは一番安いもの。魔法職が使わない限りこの低級の札は馬などの一時的な足止め程度にしかならない。勝負あったな。
「現れろ敵を確実に射る必中の槍よ」

俺の武器庫から必中の紋章が刻まれた槍が現れる。俺がつくった名も無き槍だ。能力はグングニルに近いがグングニルと違って手元に戻ってこないのが難点だ。わざわざ引き抜かないといけないのがめんどくさい。しかし必ず当たるたまこういう頑丈じゃないやつらには便利だ。

「食らえ！」

俺はやつに槍を投げつける。槍は加速していき銃の弾丸のように加速をし奴に向かう。銃が作れればいいが銃弾は俺には作れないため仕方ない。所詮金属を武器に変えたり魔力を加えるぐらいしか出来ないからな。俺は。

「ぐぁぁあああ！！」

奴に当たって血があふれ出していた。涙目になりながら俺のほうを見ている。呪いの瞳かそれとも懺悔の瞳かあの濁った目じゃ判断できない。

奴がビクンと痙攣したあと近づき槍を引き抜く。俺の槍が悪党の血を吸い取ったように真っ赤になっている。武器庫から布を取り出して血を拭き取りその布を奴の顔に乗せる。何もないよりはマシだろう。

「さすが神じゃな。ヘパイストス。能力が人外レベルじゃの。おぬしの能力は一つは普通じゃな。武器を作成する能力。もう一つが神ゆえの強さじゃの。全ての武器を操る力かの。嫉妬に狂ったことのある男は一味違うの」

「昔のことだ。嫉妬も関係ない。あと一つ間違えているが俺はエクスカリバーやアポカリプス、グングニルなどは使えない。なぜなら持ち主を選ぶからだ。神々の武器は基本はもてないさ。持ち主を選ぶ武器以外なら操れるが持ち主を選ぶ武器はムリだ」

「そういいながらブリューナクを使っているのじゃ」

「これは俺を選んだからな。それだけのことだ。そういえばいいのか卵をみなくても」

シルは驚いた顔になり卵を見に行く。すこしした後シルはなきそ

うな顔で俺のように来た。
「た、卵が割れているのじゃ……さきっぽがピシピシって！　どうしてくれるのじゃぁぁ！！」
　暑苦しい。というかもともと盗まれるお前が悪いだろう。そういいたいがさすがにかわいそうかもしれない。けれども俺は違和感を感じた。卵には傷つけないように戦った。壊してもいいなどただのブラフだ。
　荷馬車に近づくとピシピシとなっている。なるほど。なら俺がここにいると厄介なことになるな。
「おい。お前子供産むの初めてか」
「そ、そうじゃが」
「お前、竜人だよな。ということは卵から液体はでずに産まれるはずだ。普通卵が割れると液体がでるから。残りはわかるな」
「ぬ？　というと……赤ん坊が産まれたのか！」
「だろうな。俺は先に帰るぞ。心静酒は忘れるなよ。あのシュリスには借りがあるからな」
「なんじゃ。お前が借りつくってるのは……義理の母とかかの。ならそやつも神が宿ってるのかの？」
「だろうな。たぶんテティス様だろう。体は共有しているが同じ属性だから意識も共有しやすいから俺が分からなかったのも仕方ない可能性がある。それに俺とあいつと違って二重人格のような感じだろう」
「この世界に二人の神がいるとは……何か起こる。ラグナロクでも起きるのかの。っと子供を見なくては！」
　そういうと走ってこっちに来る。
「邪魔だ！」
「ぐふぇ」
　シルに飛び蹴りされて吹っ飛ばされる。
「お、おお！　可愛い娘じゃ！　うむ。あーこんなに可愛いのか。我が子は！」

親バカだな。これは。
「ヘパイストス……ありがとうな。我が神アテナ様も感謝を言っているだろう」
「あ、あのときはすまなかった！！　そのつい欲求不満で！！」
「そのことかのー。アテナ様は笑っていたのじゃ。気にしないでもいいのじゃ。それに謝るのは自分のほうだとも言っていた。相談に乗ってあげられなくてすまないと。処女神ゆえそういうことはやれないと」
「……はは、やっぱあの人も優しいものだ」
「というか我が神はおぬしのこと愛しているのじゃ。今でもアイギスの盾使っているのじゃから」
「それは嬉しいけど……嫌いと聞いたけどな」
「我が神はそうだなお主がいた世界だとツンデレというのかの。そういうのじゃ」
「いやいや。俺は自分で言うのもなんだけど醜いからな」
「向こうは青少年だけどおぬしはなんというか男前というものじゃのっと。それじゃ我は行くのじゃ。それじゃあの」
そういって翼を出してとぶ。さすが竜人。人の姿でも飛べるのだな。それにしても昔話が過ぎたな。
あいつとは知り合いだ。アテナの従者、白金の竜人アイウスウェノア。なぜ名前隠してたか分からないがな。あいつも子供産んだのか。昔は戦いの邪魔とか言ってたのに。俺が封印されてから５００年も経っていれば当然か。さてあいつにも合流しないと。
「おーい！　コウイチ！」
「ん」
「片付いたのかにゃ」
「ああ。終わったぞ」
「なら帰るかにゃー」
馬を走らせようとする。しかしそれはまずい。俺の主人格の体力的な問題で

「すまないが荷馬車を使わないか？　これも返さないといけないだろう」
「そうだにゃ。そういえばコウイチは荷馬車の運転わかるかにゃ」
「ぜんぜん分からないな。俺は」
幸一は分かるかもしれないけれどもな。
「なら私が運転するにゃ。戦闘もやったそうだしにゃ。寝ててにゃ」
俺は素直に寝ることにした。

次の日――
「体が猛烈に痛いぃぃ！！」
「大丈夫かの？　さすがに属性の相性が悪いと大変じゃの」
「たいへんたいへんー！」
シルさんは心静酒を宿に持ってきてくれた。隣に小さい女の子を連れて。きっと娘だろう。もう三歳ぐらいに見えるけど。
「どうしてそうにゃの？」
「いろいろあるのじゃ」
「おかーさん、なんでー」
「そうじゃのー、たぶんの、アイビスと遊びたいのじゃ」
「そうなの！？　遊ぼーコウイチお兄ちゃんー！」
「にぎゃー！！」
子供の名前はアイビスらしい。たぶんいい家族関係をつくってくれるだろう。この仲のよさだと。でも俺に攻撃をしないでほしい。遊びと称して。いや無邪気だから仕方ないのか。
「まあそれぐらい許せ。代わりに送ってやるからの」
「ありがとうございー――にぎゃーー！！」
俺帰るまで生きてるかな？　そう不安になるのだった。

第一章　第十七話『人攫いは血祭りに』（後書き）

はい。杉岡です。なんか二ヶ月に一話みたいな感じになっちゃっていますね。駄目だよな……一週間に一話あげたいのですが難しいっす。

もしかしたら一章もう少しかかるかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0704h/

二つの世界と二色の未来

2010年10月8日13時56分発行